同窓会誌

旭川医科大学医学部
医学科同窓会

Asahikawa Medical University
Alumni Association

2015 no.33

＊同窓会シンボルマークのデザイン：
遠藤 享（すすむ）氏（グラフィックデザイナー・版画家）

＊シンボルマークについての遠藤　享氏のお言葉：
旭川医科大学同窓会の持つネットワーク機能を、デザインのコンセプトとして発想しています。普遍的な形の正円を形態の基本にし、旭川医大の頭文字の（A）と小さい正円４つとを直線的な線で繋ぎました。さらに遠近感をつけた大小の円との組み合わせを配することにより、同窓会の持つ役割＝遠隔地域や世界とのネットワークが更に未来に向かうイメージにしました。さらに、未来への発展をイメージさせました。シンボルカラーとしては、旭川の自然に囲まれた緑を取り入れました。

旭川医科大学医学部医学科同窓会 Asahikawa Medical University Alumni Association

同窓会シンボルマーク・会旗

旭川医科大学全景

卒後臨床研修センター・旭川医科大学医学部医学科同窓会 合同企画

旭川医科大学病院医師臨床研修プログラム説明会

平成27年7月16日（水）
旭川グランドホテル

吉田 晃敏 学長による
ご挨拶

卒後臨床研修プログラムの
説明をする 大崎 能伸 卒後
臨床研修センター長

平田 哲 副学長・病院長
によるご挨拶

締めのご挨拶をする
千葉 茂 同窓会長

司会進行を務める
小北直宏 副センター長

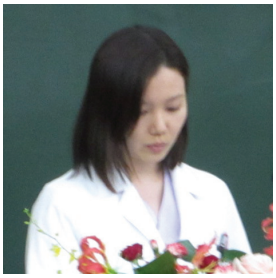
旭川医科大学二輪草センター主催、卒業臨床研修センター・医学部医学科同窓会共催

合同入局説明会

どうする 臨床研修先？
～若手医師が学びやすく、働きやすい環境とは～

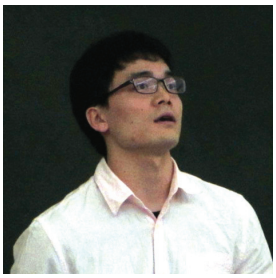
平成27年6月23日（火）

吉田 晃敏 学長よりご挨拶



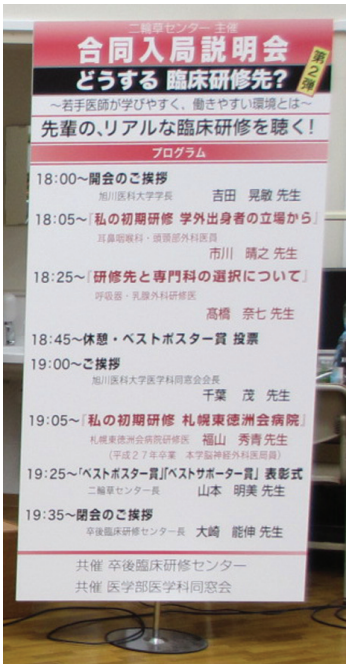
呼吸器・乳腺外科研修医
高橋 奈七 先生

耳鼻咽喉科・頭頸部外科医員
市川 晴之 先生



札幌東徳洲会病院研修医
福山 秀青 先生

二輪草センター長
山本 明美 による
表彰式



○目次

表 紙 題 字:故 山田守英 初代学長
シンボルマーク:遠藤　享 氏
（グラフィックデザイナー・版画家）

■ 巻　頭　言 …… 同窓会長（第１期生） 千葉　茂 … 1

■ 大学長挨拶 …… 学　長（第１期生） 吉田　晃敏 … 3

■ 退職にあたって …… 内科学講座 消化器・血液腫瘍制御内科学分野 前教授 高後　裕 … 7
麻酔・蘇生学講座 前教授 岩崎　寛 … 8

■ 教授就任にあたって …… 麻酔・蘇生学講座 教授（第19期生） 国澤　卓之 … 10
病院病理部 教　授 武井　英博 … 11

■ 近 況 報 告
脳性麻痺28年：からだは動きたいんだ！ …… 第３期生 鈴木　伸治 … 12
旭川医科大学病院での初期臨床研修プログラムの取り組み … 第２期生 大崎　能伸 … 13
海外研究留学中です …… 第23期生 長森　恒久 … 15
海外留学ご報告 …… 第29期生 南　幸範 … 16
海外研究留学報告～米国オーガスタ～ …… 第30期生 熊井　琢美 … 17
学生表彰 …… 医学科５年 潮田　亮平 … 19
学生表彰 …… 医学科４年 橋本　亮 … 20
学生表彰 …… 医学科３年 阿部　史華 … 21
医大祭2015を終えて …… 医学科４年 飯田　敏史 … 22

■ 教室（講座）だより …… 24
解剖学講座 機能形態学分野 …… 24
解剖学講座 顕微解剖学分野 …… 25
生理学講座 自律機能分野 …… 26
生理学講座 神経機能分野 …… 27
生化学講座 細胞制御科学分野 …… 28
生化学講座 機能分子科学分野 …… 29
薬 理 学 講 座 …… 30
病理学講座 腫瘍病理分野 …… 31
病理学講座 免疫病理分野 …… 33
微 生 物 学 講 座 …… 34
健 康 科 学 講 座 …… 36
寄 生 虫 学 講 座 …… 37
法 医 学 講 座 …… 38
内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科学分野 … 41
内科学講座 病態代謝内科学分野 … 43
内科学講座 消化器・血液腫瘍制御内科学分野 … 45
精 神 医 学 講 座 …… 46
小 児 科 学 講 座 …… 48
外科学講座 循環・呼吸・腫瘍病態外科学分野 … 49
外科学講座 消化器病態外科学分野 … 51
整形外科学講座 …… 52
皮 膚 科 学 講 座 …… 53
腎泌尿器外科学講座 …… 54
眼 科 学 講 座 …… 56
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 …… 57
産婦人科学講座 …… 59
放射線医学講座 …… 60
麻酔・蘇生学講座 …… 61
脳神経外科学講座 …… 63
臨床検査医学講座 …… 64
歯科口腔外科学講座 …… 65
救急医学講座（救命救急センター・集中治療部） … 67
地域医療教育学講座 …… 68
地域がん診療連携講座 …… 69

○目次

■ 学生団体(クラブ)だより …… 71

ラグビー部…… 71
準硬式野球部…… 72
卓球部…… 73
陸上競技部…… 74
競技スキー部…… 74
ゴルフ部…… 76
硬式庭球部…… 76
男子バスケットボール部…… 77
空手道部…… 78
男子バレーボール部…… 79
剣道部…… 80
山岳部…… 81
弓道部…… 82
大東流合気柔術部…… 82
ソフトテニス部…… 83
水泳部…… 84
女子バスケットボール部…… 85
女子バレーボール部…… 86
アイスホッケー部…… 87
男子ハンドボール部…… 87
柔道部…… 88
サイクリング部…… 89
雪艇倶楽部(カヌー部)…… 89
居合道部…… 90
ダンス部CRANK …… 91
SPEC(総合格闘技)…… 92
医療研究会…… 92
茶道部…… 93
JAZZ研究会…… 94
ギター部…… 95
ブラスアンサンブル…… 96
室内合奏団…… 96
合唱部…… 97
旅と鉄道研究会…… 98
医科学研究会…… 99
ボランティア部…… 100
漢方研究会…… 101
美術部…… 101
育児院学習サポート …… 102
Med-Edu Students to Studants… 103
放送研究会…… 104
プライマリー・ケアを学ぶ会…… 105
手芸サークル はんどめいだー … 106
Surgeon's hands部 …… 107

■ 訃　　報 …… 108

■ 事務局だより　特別会員・会員の異動について …… 110
平成26年度 事業報告・平成27年度 事業計画 …… 110
平成26年度 収支決算書 …… 112
平成27年度 収支予算書 …… 113
事務局からのお願い …… 114
同窓会ホームページについて …… 114
「ドクター総合補償制度」のご案内と会費納入について…… 115
通常の会費と終身会費について …… 115
同窓会事務局への連絡 …… 115
会 員 動 向 …… 116

■ 同 窓 会 歌 …… 118

■ 同 窓 会 会 則 …… 119

■ 同窓会医学奨励賞 規約・募集要領 …… 123

■ 役 員 名 簿 …… 126

■ 編 集 後 記 …… 第4期生　原渕　保明 … 127

同窓会誌第33号の発刊にあたって

旭川医科大学医学部医学科
同窓会長　**千　葉　　茂**
（第１期生、学長補佐、精神医学講座・教授）

「同窓会誌第33号」発行にあたり、本誌にご寄稿いただきました関係各位ならびに会員諸氏に深く感謝申し上げます。

本年７月１日、本同窓会　第一期生の吉田晃敏　氏が本学学長として再任されました。誠におめでとうございます。吉田学長が学長として初めて選出されたのが2007年７月１日ですから、2011年６月までの４年間（第１期目）、その後の2015年６月までの４年間（第２期目）を経て、今回は第３期目を迎えたわけです。同窓会としては、引き続き、吉田学長がリードする母校の活動を支援してまいる所存でございます。

現在、同窓会の正会員数は、今春の第37期生の卒業をもって、3,778名となりました。正会員の主な活動の場は、道内59%、関東16%、関西２%、海外１%となっております。学内をみますと、臨床系387名中351名（91%）、また、非臨床系（基礎系、センター等）では66名中18名（27%）が同窓生であります。

同窓会は、２年前から、正会員とは別に、「学生会員」の制度を設けました。その目的は、医学部卒前学生を「学生会員」とすることによって会員と卒前学生のコミュニケーションをいっそう深めること、また、同窓会の医学部卒前学生に対する支援事業をより充実・拡大することであります。現在、学生会員は、第１学年から第６学年までを合計すると749名に上ります。毎年、同窓会は、医大祭や第６学年の医師国家試験受験を経済的に支援させていただいておりますが、今後は、各学年の代表者と意見交換しながら、同窓会として地道な支援をさらに広げてまいりたいと存じます。

ここで、今年の同窓会活動を振り返りたく存じます。

平成27年３月25日(金)、第37期生卒業式のあとの祝賀会において、会長より卒業生に対して祝辞を申し上げるとともに、同窓会誌最新号と卒業記念品（アラーム付電波時計）を謹呈いたしました。

平成27年３月末日で、高後　裕　教授（内科学講座　消化器・血液腫瘍制御内科学分野）と岩崎寛　教授（麻酔・蘇生学講座）が退職されました。両先生は、医師としてはもちろん、教育者・研究者として長年にわたって力を注いでいらっしゃいましたので、多くの学生や教職員に惜しまれる中、本学を離れられました。同窓会からは、高後先生と岩崎先生には、本号にご挨拶を掲載させていただくとともに、記念写真アルバムを贈呈いたしております。

一方、平成27年５月１日付で、武井英博教授（病院病理部）、10月15日付で國澤卓之教授（麻酔・蘇生学講座）がご就任されました。新教授の皆様からは、本誌にご挨拶のお言葉をいただきました。同窓会を代表いたしまして、心からお祝い申し上げますとともに、今度とも何卒よろしくお願い申し上げます。

本年６月23日、二輪草センターと同窓会の共催で合同入局説明会が開催されました。吉田学長をはじめ大崎卒後臨床研修センター長、そして本学医学部医学科の医学生が多数出席し、意義ある情報交換が出来ました。また、各診療科・講座から多数の入局案内ポスターが展示されました。

本年７月16日、卒後臨床研修センターと同窓会の共催で旭川医科大学病院医師臨床研修プログラム説明会が開催されました。吉田学長、平田　哲　副学長・病院長はじめ、同窓会員、そして本学医学部医学科の第４～６学年の医学生が多数出席し、意義ある情報交換が出来ました。

さて、情報交換会の会場には、いつも同窓会旗が掲げられています。国内外で有名な遠藤　享氏のデザインによる同窓会旗には、同窓会がもつ現在のネットワークが未来に向けて発展するイメージが描かれています。会場でその旗を見ていた時、ふと、故・スティーブ・ジョブズ氏（アップル社創始者の一人）のスタンフォード大学の卒業生に贈ったスピーチを思い起こしました。

そのスピーチの中に、このような一節があります（Stanford Report, June 14, 2005)。ここで言う“dots”とは、人生におけるさまざまな経験というような意味です。

Again, you can't connect the dots looking forward; you can only connect them looking backward. So you have to trust that the dots will somehow connect in your future. You have to trust in something — your gut, destiny, life, karma, whatever. This approach has never let me down, and it has made all the difference in my life.

すなわち、ジョブズ氏は、“人生において、今のさまざまな経験がもつ意味はその時には分からないが、後になってからその真の意味が見えてくる。そのことを信じることによって、人生すべてが変わる。”というメッセージを学生に伝えています。私には、遠藤氏のデザインがジョブズ氏の考えと重なるように思えるのです。

われわれ同窓会についても、ジョブズ氏のメッセージと同じことが言えます。学生時代には単なる同期生、あるいは先輩・後輩であったかもしれない同窓生が、その後の仕事・人生において、かけがえのない意味を持ってくることがあります。今ある同窓会員の絆が、未来に繋がることを信じる―― 同窓会の発展は、この単純なことに潜んでいるように思われます。

旭川医科大学医学部医学科同窓会誌第33号(2015年)によせて

国立大学法人旭川医科大学
学長 **吉田晃敏**
(第１期生)

同窓会誌第33号の発刊をお祝い申し上げます。

私は、本年７月１日付けで、旭川医科大学学長の三期目を拝命致しました。この場をお借りしまして、改めてご挨拶申し上げます。

学長に就任して以来８年間、私は皆様のご支援をいただきながら、「旭川医科大学の新生」、「強い旭川医科大学の創造」を旗印に、様々な大学改革を進めてまいりました。

さて、この度の三期目にあたり、新たなビジョンとして、「旭川医科大学の更なる機能強化」を掲げることとさせていただきました。

皆様ご承知のとおり、政府は「日本再興戦略」において、我が国が成長するための重要な道筋の一つとして「国立大学改革」を位置付けております。この方針に呼応するかのように、文部科学省は、平成28年度からの第３期中期目標期間において、強み・特色を踏まえた機能強化に積極的に取り組む大学に対し、運営費交付金を重点配分するとして、３つの枠組みを設定しました。

この中から本学が積極的に取り組むとして選択したのは、「主として、人材育成や地域課題を解決する取組などを通じて地域に貢献する取組と共に、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で世界ないし全国的な教育研究を推進する取組を中核とする大学」という枠組みです。

以上の状況を踏まえて、本学の持つ強み・特色を最大限に生かした、本学ならではの機能強化策として、具体的には次の５項目にわたる観点から取り組んでまいります。

１．人材養成機能の強化
- ①　大学入学者選抜の抜本的改革
- ②　地域医療に根ざした医療人の育成
- ③　グローバルな医学教育認証に対応した教育の展開

等

２．イノベーション創出
- ①　臨床研究支援センターの強化
- ②　本学における研究シーズを養成し、北海道臨床開発機構（ＨＴＲ）における研究を更に推進
- ③　遠隔医療の研究推進

等

３．病院機能の強化
- ①　地域医療の中核的役割の強化
- ②　医師の復職支援と再教育システムの構築
- ③　「経営担当医長」を各診療科に配置

等

４．グローバル化
　①　若手研究者の留学の促進
　②　学生の国際活動の推進
　③　遠隔医療センターの国際化の推進
　等

５．ガバナンス機能の強化
　①　学長のリーダーシップの強化
　②　ＩＲ機能の体制整備
　③　新たな大学基金の創設
　等

続きまして、国立大学改革加速期間中（平成25年度～平成27年度）における、この１年間の主な取り組みについて概略を紹介させていただきます。

１．医学科でのアドバイザー配置
　医学科の各学年には、学年担当教員を配置しており、また、第１学年及び第２学年には、臨床系教員をグループ担任として配置しているところであります。
　この度、学生に対する学修支援や相談体制を更に充実させるため、第１学年から第３学年の各学年に、臨床系の教授をアドバイザーとして配置しました。
　第１学年・・・外科学講座　　東　信良 教授
　第２学年・・・脳神経外科学講座　　鎌田恭輔 教授
　第３学年・・・整形外科学講座　　伊藤　浩 教授

２．医学科２年次編入学時期の変更
　国際基準に対応した医学教育認証へ向け、平成27年４月入学者から新カリキュラムを適用しました。これに伴い、平成28年度から２年次の編入学時期を、10月から４月へと変更しました。

３．図書館の全面オープン
　平成25年度から行ってきた図書館の増築に続き、既存棟の改修工事も終え、本年４月に従来面積の1.5倍の図書館として全面オープンしました。

４．図書館24時間開館の見直し
　平成12年から24時間開館を行ってきましたが、長期休暇期間などの夜間や休日は利用者が少ないことから、一部、休館日を設けました。
　なお、休館中であっても、資料の取出しのための入館は可能です。

５．学生の懲戒に関する規程制定
　学校教育法施行規則が改正され、「学生の懲戒に関する適切な手続き」を定めることが義務付けられたことを受け、本学も学生の懲戒規定を制定しました。

６．臨床研究支援センターの設置
　臨床研究の円滑な実施や医療技術・治療方法の開発などを目的として、臨床研究体制を強化するため、治験支援センターを改組し、臨床研究支援センターを新設しました。

７．病院機能評価の認定を取得

本年１月に受審しました日本医療機能評価機構による病院機能評価において、「認定」の評価結果を頂きました。改善要望事項はありませんでした。

８．「日本国際病院（仮称）」参加を表明

政府は、「日本再興戦略」の柱の一つとして、外国人患者を受け入れる意欲と能力のある病院を「日本国際病院（仮称）」に位置付けることを明らかにしました。これを受けて本学も、参加する意志を表明し、現在準備を進めております。

９．病院玄関棟１階の改修

病院玄関棟にある旧職員食堂・売店等の跡地を改修し、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、麻酔科の外来エリアを設けました。続いて、眼科、リハビリテーション科、緩和ケア診療部の外来エリアも拡充しました。

さらに点滴センターを12床から20床へ増床し、VIPルームと相談室も新設。併せて、コンビニエンスストアの隣に「イートイン」を設置し、利用客のサービスに努めております。

10.「スポーツ医科学研究委員会」の新設

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会等からの医師派遣等の協力要請を受け、学内に「スポーツ医科学研究委員会」を設置しました。障害のクラス認定医養成や運動機能障害に係る研究を進め、障害者スポーツを含む幅広い分野で社会貢献に取り組んでまいります。

11. 大学機関別認証評価の認定を取得

大学評価・学位授与機構による大学機関別認証評価において、「大学設置基準を始め関係法令に適合し、大学評価基準を満たしている。」として、認定証を交付されました。改善を要する指摘事項は特にありませんでした。

12. 年俸制の導入

文部科学省が掲げた「国立大学改革プラン」において、「人事給与システムの弾力化」が求められていることを受けて、平成28年５月１日までに、本学では常勤教員の10％相当にあたる26名に対し、年俸制を導入しなければなりません。

本年10月末現在で、14名の助教が年俸制となっております。

13. 深川市立病院との連携と協力に関する協定を締結

地域医療の安定的な確保に向け、深川市立病院との間で協定を締結しました。主な内容は、本学の学生及び卒業生に対する修学資金の貸与であり、今年度は１名の学生がその恩恵を受けております。

14. 名誉教授称号授与の資格基準等を改定

現在の資格基準は、学長、副学長又は教授として通算20年以上の勤務が要件で、他大学等での勤務期間を加算するためには本学で少なくても10年以上の勤務期間が必要でした（通算基準）。この基準を他大学の例などを参考に改定し、それぞれ10年、５年へと変更しました。本年３月31日以降の退職者から適用いたします。

15. 研修出向制度の新設

これまでの出向は、退職手当の通算規定がある地方公共団体等に出向する場合にのみ認められています。この度、本学の職員として在籍したまま、出向先の職員としての業務を通じて研修する、研修出向制度を新設しました。研修期間は６か月以内で暦月１か月単位です。研修先は、北海道のへき地医療拠点病院等に限ります。

以上、この１年間における主なトピックスを紹介致しました。

同窓会の皆様方におかれましては、今後とも本学における改革の進捗状況を見守って頂きながら、引き続き、暖かいご支援並びにご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い致します。

定年を迎えて
―旭川医科大学医学部同窓会の益々の発展を祈ります

旭川医科大学 名誉教授
国際医療福祉大学病院 教授
高 後 裕

平成27年３月31日付けで旭川医科大学を定年退職してから、半年余が過ぎました。平成６年12月16日に旭川医科大学医学部教授として赴任し、内科学第三講座（現内科学講座消化器・血液腫瘍制御内科学分野）を主宰、数えて21年間旭川医科大学にお世話になったことになります。この間に、清水学長、久保学長、吉田学長をはじめ旭川医科大学の多くの方々からいただいたご厚情に、改めて感謝申し上げます。

振り返ってみれば、赴任当時の旭川は今より気温が低く、－20度を超える日もまれでなく、官舎から大学への道で、キラキラと、えも言われぬ輝きのダイアモンドダストが大気にあり、幻想的な雰囲気が感じられました。教室には旭川医科大学一期生の故 小原 剛先生、小野 稔先生を始め、多くの卒業生がおられ、一人ずつとお話し、みんなで教室を作っていくことで意思一致し、新しい教室作りが始まったことを昨日のように覚えています。その後の20年余を、多くの皆さんと行を共にできたこと、一人ひとりの教室の皆さんの努力と切磋琢磨により、臨床、教育、研究の面でそれなりに貢献できたものと満足しています。また、建学時からの使命である地域医療に対する貢献の面でも、教室員の協力のもとに何とか維持できたのではないかと思っています。

赴任した当時は、古き良き時代の医学部の延長でしたが、その後、卒後臨床教育制度の変更、地域での医師不足の顕在化、医学教育カリキュラムの全面的な見直しなど、多くの状況の変化に遭遇し、それらを講座・医局として一つずつ乗り越えることで毎日が過ぎていったという印象です。その間に、教室の教育、研究、臨床、地域医療に対する姿勢が理解されたのか、多くの卒業生が入局し、一緒に仕事をしてくれたことは、かけがえのない私の財産です。

退職後、縁があって、栃木県にある学校法人国際医療福祉大学国際医療福祉大学病院で仕事をさせていただいています。何となく、旭川医科大学に最初に赴任した当時と環境が似ており、医療の国際化とそれに対応した新たな動きが始まることへの期待と、これまでの医学・医療を取り巻く環境も、医学教育の国際標準化、超高齢化社会を迎えつつあるわが国の医療システム・保険制度の激変への対応、医学・医療・医療産業の国際化など、新たな方向が作られ始めています。元気なうちに、これまでの経験を生かし、いささかでも貢献できればと、楽しみながら毎日を送っています。お近くへお越しの節は、ぜひお寄りください。

稿を終えるにあたり、旭川医科大医学部同窓会と、旭川医科大学が、吉田学長はじめ同窓生皆様の力により、益々の発展されますことを祈念し、定年退職のご挨拶とさせていただきます。長い間有難うございました。

退職にあたって

旭川医科大学 麻酔・蘇生学講座 前教授
名誉教授 **岩 崎 寛**

1997年11月に札幌医科大学より旭川医科大学麻酔・蘇生学講座の教授として赴任させて頂き、無事に2015年３月をもちまして定年退官させて頂きました。16年余に渡り大過なく過ごせたのは学長をはじめ多くの職員の皆様のご協力の賜と感謝申し上げております。赴任した当時は教育研究棟の７階の教授室から多くの不安を感じながら旭岳の上に光輝く満月を見ていたことを思い出します。この間の旭川医科大学での私の主な活動をおぼろげな記憶を頼りに記載してみたいと存じます。

１．医療安全管理部

平成11年１月11日に横浜市立大学病院で起きた手術患者取り違え事件をきっかけとして全国的でスタートしたものです。アクシデントやインシデントの報告制度の作成や院内での医療安全の熟成および医療調査委員会での議論など、約10年余医療安全管理部に関与させて頂きました。この活動は当初、院内ではあまり受け入れて頂けない活動でしたが、現在では病院内での当たり前の活動として受け入れられ、病院における主要な評価活動になっている昨今の状況を鑑みますと隔世の感があります。同時に、医師や看護師およびその他の医療従事者の意識改革が進み、医療安全活動を通して病院の質が確実に向上していると感じています。

２．緩和医療

社会情勢の変化に伴い大学病院などの主要な地域医療機関で癌などに対する緩和医療の必要性により2006年に緩和ケアチームを正式に立ち上げさせて頂きました。当初はこの活動が継続できるかどうか危惧していましたが、10年余にわたる地道な活動により現在は、阿部副部長を中心として認定看護師のみならずリハビリ関連医師や作業・理学療法士、歯科口腔外科、栄養士など多くの職種が関与して頂ける緩和ケア診療部として活動できるようになりました。更に専門外来も開始可能となり院内から地域への今後の活動拡大が期待されます。我々麻酔科のペインクリニックとも協力関係を保ちながら癌疼痛などに関与させて頂きました。そのことが2008年にフジテレビで放映された倉本聰作のテレビドラマ「風のガーデン」につながり、主役の中井貴一さんが膵臓癌に罹患した麻酔科医の役を演じて頂いたことに成ったことは私の記憶の中で鮮明に残っております。この事は旭川医大における緩和医療の啓蒙に少しは役に立てたかなと思っております。また、緩和ケアチームに当初から加わって活動して頂いていた麻酔科講師から教育センター准教授へ転進して緩和医療に関わって頂いていた間宮敬子先生が2015年度３月から信州大学ガンセンター教授に就任されたことは望外の喜びでした。

３．材料部

材料部長として活動させて頂いた時期がありました。当時の最大の課題は、医療材料の無駄の無い管理・調達でした。そのために導入したので医療材料のSPD管理でした。約２千種類程度に医療材料の中でSPDに合致する品目の整理をすることの議論に多くの時間を割いて開始されました。この事により死蔵する医療材料の根絶がおおよそ遂行されたものと思っています。消費税のアップによる購入医療材料費の高騰という社会情勢から今後もさらなる医療材料の管理運営が要求されるものと思っていますが、これからの病院運営は漫然と医療材料を使うことでは成り立たない状況です。その基礎を造る活動に参加できたことは現在の病院での医療活動に大いに役に立っています。

４．手術室運営

私が赴任した当時の手術室にての総手術症例数は３千例未満であったように記憶しています。しかし。今日の旭川医大病院における総手術症例数は７千例にもなって居り全国での有数の大学病院となっています。これは在院日数の短縮や病院収益性の向上などの要因が関与していますが、外科系の各科の努力の結果でありますが、その結果手術室にての麻酔科医と看護師の重圧は大きなものになっていました。特に、麻酔科医の絶対数の増加は急務でありました。しかし、初期臨床研修制度の開始に伴い２年間の新入医局員の空白の時期があったこととその後の医学生の大学以外での研修希望者の増加にて新入医局員の確保に難渋する時期がありました。しかし、幸い平均毎年５名程度の麻酔科への入局者があり、この16年間は外科系の先生方に迷惑をかけること無く定期及び臨時手術に対応可能な麻酔科医を確保できたことは大変幸運でした。この事に積極的に貢献してくれました麻酔科の医局員の皆さんと手術室における若手の麻酔科医の成長に協力頂けた各科の外科系医師に感謝申し上げたいと思っております。

５．教育・研究

大学においては診療に加えて教育・研究は大きな柱であります。学生教育にては、講義開始前に製本した講義資料を作成配布致しました。この製本された資料は、講義中のスライドを可能な限り減少させ、またメモ程度を記載することにより聴講することに重点を置いた講義形態を目指したものでした。このことは医学生に高く評価され、大学卒業後にも捨てられること無く研修医として麻酔科にローテートしてきてくれた時にも活用して頂いたと聞いています。また、大学による教員評価においても私も含めて多くの麻酔科医局員がベストスリーなどに選ばれるなど高評価に繋がったことは嬉しい限りでした。研究面では薬理学教室などの多くの基礎講座に加えて実験機器研究センターの船越教授には当医局員が渡米する前の段階での基本的な実験に関する技術指導をして頂き、当医局員が留学しているアメリカのマイアミ大学、ウイスコンシン大学、ハーバード大学およびミシガン大学における研究スタートが円滑に行える状況にご協力頂きましたことは大学ならではの幸運でした。重ねて御礼申し上げます。

６．現在の診療

退職後の2015年４月からは札幌禎心会病院にて臨床麻酔と教育研修センターにて勤務し、大学とは全く異なる環境で仕事をさせて頂いております。ここ札幌禎心会病院は、2015年11月に新築移転して陽子線治療などの高度な先進医療を取り入れ、脳神経外科に加えて、頭頚部外科、心臓血管外科、消化器外科など外科系診療科に加えて循環器内科や消化器内科も加えて成人病に対する総合治療機関として新しく出発致しております。これまで旭川医科大学にて経験させて頂いたことを活かして地域医療に貢献していきたいと考えております。

旭川医科大学にて16年余に渡り多くに関係者に協力、支援して頂き無事に退職できましたことを重ねてお礼申し上げますとともに、今後の旭川医科大学の発展を祈念申し上げて居ります。

教授就任にあたって

旭川医科大学 麻酔・蘇生学講座
教 授 **国 沢 卓 之**
（第19期生）

平成27年10月15日付けで麻酔・蘇生学講座教授を拝命致しました、国沢卓之（たかゆき）でございます。以後、宜しくお願い申し上げます。私は、旭川出身の旭川育ちで、市内の小学・中学・高校を卒業し、平成３年に19期生として本学に入学致しました。学生時代は、中学生から続けていたバスケットボール部に入部し、楽しい学生時代を過ごして参りました。

平成９年の本学卒業後は、当講座に入局いたしました。その後、心臓外科と脳神経外科が中心の福島県の白河病院に麻酔科医長として赴任しました。今思えば、心臓麻酔・覚醒下手術麻酔という現在の専門領域へ進むきっかけとなった勤務でございました。その後、国内留学を経て、2005年に本講座の助教（当時の助手）として本学に復帰し、手術部准教授・副部長を経て、この度、現職に就かせていただくこととなりました。

私の一つ目の専門領域は、心臓麻酔と経食道心エコー検査（Transesophageal echocardiograpy：TEE）でございます。医師四年目で国内留学として東京女子医科大学に赴任し、スタッフや研究生期間を含めると４年半にもわたり、最先端の心臓麻酔を実践し、TEEに従事しておりました。その後、一旦帰旭後、ニューヨークのマイモニデス・メディカル・センターにて、米国の心臓麻酔とTEEに関する最新・最先端の知識を習得して参りました。周術期のTEEの目的と致しまして、①循環モニタとしての活用、②術式変更・追加などに寄与する診断としての活用、③危険を察知し患者様の安全を担保するためのリスクマネージメントとしての活用の三つがございます。この技術の応用は、患者様のみならず、医療従事者が受けられる恩恵も多いため、国内に普及することを願って、日々の臨床・研究・教育を行っております。私が昨年取得した米国の周術期TEE指導医資格は、アジア在住医師としては、まだ、私しか保有しておりませんため、書籍・解説の執筆、TEEデモンストレーション、講演、国内資格試験実施などを継続し、国内のさらなる普及に尽力させて頂きたく思っております。

二つ目の専門領域は、静脈麻酔でございます。経静脈的に投与された麻酔薬の血漿濃度を予測し、効果部位濃度（麻酔薬では、脳内濃度に近い値）を算出したり、その為に必要なパラメータを決定したり、その麻酔効果をモニタリング・判定したりする研究を行って参りました。その知識を応用して、患者様が覚醒するまでの時間を正確に予測し、痛みや生体反応が生じない麻酔薬の濃度を保ち、ひいては、起きたまま手術が可能となる状況（覚醒下手術）を、容易に達成することを可能としました。この技術は本学でも実践し、現在では、脳神経外科領域・耳鼻咽喉科領域・整形外科領域・血管外科領域で、頻回に施行させていただいております。

また、手術室の麻酔は安全が第一でございます。患者様の安全は、他科医師・メディカルスタッフへの安心に繋がり、良好な手術環境への近道と思います。今まで行ってきた臨床・研究を実践し、学生・研修医・若手医師に伝え、実践頂き、さらなる安全と安心を獲得することで、最終的には本学・本院の発展に微力ながら寄与できればと願っております。さらに、麻酔領域では、本学から最先端の知識や技術を発信し続けていきたいと思っておりますので、皆様、今後ともご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

教授就任にあたって

旭川医科大学病院 病理部
教 授 **武 井 英 博**

平成27年５月１日付けで、本学病院病理部教授を拝命いたしましたのでご挨拶申し上げます。私は、愛知県岡崎出身で、平成２年に防衛医科大学校を卒業し、平成14年まで陸上自衛隊医官（退官時は、３等陸佐）として勤務していました。学生時代は、ラグビー部に所属し、関東医歯薬リーグの１－２部でプレーして、６年生の12月初めまで公式試合に出場していました。卒後は２年間の各科ローテーション方式の初任実務研修（防衛医大病院）、２年間の耳鼻咽喉科研修、２年間の病理研修（国立仙台病院、現在の仙台医療センター）を終えた後、渡米し、米国ニューオリンズのルイジアナ州立大学医学部で４年間の病理、臨床検査医学のレジデント研修を行いました。その後、自衛隊札幌病院に２年間勤務して、再渡米し、１年間の細胞診断、（ヒューストンのベイラー医科大学で）２年間の神経病理、１年間の分子病理学＆遺伝学の専門フェロー研修をした後、旭川医大に来るまで、ヒューストンメソディスト病院で病理医として、そして、コーネル大学医学部の准教授として約８年間勤務していました。取得資格としましては、日本の病理専門医、臨床検査専門医、細胞診専門医、米国の病理、臨床検査医学、細胞診断、神経病理、分子病理＆遺伝学の計７つの専門医資格を有しています。

米国では、臨床では、幅広い分野の病理診断と分子病理学を通して臨床検査医学に携わってきました。私は、専門医資格を持つ脳神経病理、細胞診断のみならず、心血管病理、呼吸器病理は、その専門グループの一員として積極的に診断業務に関わっていました。さらに、年間約130例ある解剖部門の長として、病理解剖を積極的に行っていました。また、神経病理部門では、脳腫瘍、神経変性疾患、代謝疾患、筋肉、末梢神経疾患の診断のみならず、神経法医学の分野では、年間約2000例を司法解剖するヒューストン監察所の脳神経分野のコンサルタントとしての仕事も行っていました。教育では、米国では、人に教えることが学ぶことであるとの視点に立ち、とにかく丁寧に教えることに重点を置いて、一般病理、臨床検査医学のレジデント、神経病理、細胞診断、分子細胞病理＆遺伝学の専門研修フェローに対して教育を行ってきました。研究面では、動脈硬化の形態病理学的検討、脳腫瘍、神経変性疾患の分子病理学的、免疫組織学的な研究、てんかんの病理組織、免疫組織学的な研究、また、遺伝子検査の細胞診での応用の研究を、肺癌、膵胆道系の癌、甲状腺癌で行っていました。

私は、旭川医大には自分が４年間日本で、16年間米国で学んだ幅広い病理、検査医学の知識を次世代を担う学生、研修医に教育したいと思って参りました。一般病理、細胞診断は、形態学が主体で、形態を中心に教育するのは当然ですが、それに加え、臨床的なバックグラウンド、関連する臨床検査、分子病理的な部分も教育したいと考えております。これからの医師は、日本のみならず世界に眼を向けていくことが不可欠となってきています。新しい知識を英語による情報（論文など）から得ること、また、英語で情報を発信することは避けられない時代となっておりこのトレーニングは学生のうちからやっておく必要があります。私は、英語は決して得意ではないですが、慣れにより、今では複雑ではない論文などはスポーツクラブのトレッドミルで走りながら、TVを見ながらでも読めるようになりました。

私は、世界のスタンダードとしての一般的な病理、検査医学の知識を学ばせることが最大の卒前、卒後教育の目標と考えています。また、他科との協力もたいへん重要で、通常の外科病理の診断のみならず、いろいろな分野の最新の臨床情報を世界に発信するお手伝いが病理医としてできたら幸せだと思います。最後に、カンファレンス、研修医教育など様々なニーズに対応できるように努力いたしますので、皆様のご指導、ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

近況報告

脳性麻痺28年：
からだは動きたいんだ！

常葉大学浜松キャンパス保健医療学部
教 授 **鈴 木 伸 治**
（第３期生）

９月30日、母校旭川医大同窓会事務局の川江実様から全国で活躍する卒業生の一人として近況報告を同窓会誌に寄稿して欲しいとの丁重なるおさそいの電話があり、快諾しました。実は毎年整形外科の脊柱班の小林徹也先生、技官の今井充さんによる側弯症検診（網走）に同行し、現在も旭川医大にお世話になっているばかりではなく、家族のことでも同期の第一内科の川村祐一郎君にお世話になったばかりです。卒後35年たった今も母校は身近な存在です。

私は卒業後、竹光義治教授が主宰する整形外科学教室に入局しました。その後、研修期間中に受講した日本リハビリテーション医学会卒後医師研修会で中村隆一氏の「ファシリテーションは死んだ。これからの脳性麻痺のリハビリテーションはフィジカルフィットネスだ！」という講義に感銘を受け、卒後６年間の研修を終えると道立旭川肢体不自由児総合療育センター（旭川療育センター）に就職し、現在に至るまで脳性麻痺がある人達のフィジカルフィットネスとかかわっています。

旭川療育センターでは養護学校の相撲大会で子ども達が歩けないのにチアノーゼをだしながらも膝立ちで相撲を真剣にとる様を目の当たりにし、その映像記憶はなぜか脳裏に焼き付いたのです。そこに６年間勤務した後、伊豆医療福祉センターのセンター長として赴任し、妻の幸恵、長男の悠平、長女の美穂（全員道産子）と共に伊豆の韮山（本年世界遺産に登録された韮山反射炉の所在地）に引っ越しました。

悠平が韮山バレーボール少年団に入団すると、しばらくして私は保護者会の会長にさせられてしまいました。練習や応援に他の父親がほとんど出てこなかったので北海道にはオヤジの会なるものがあることを思い出し、バレーボール少年団オヤジの会を結成しました。するとオヤジ達はすっかりオヤジの会にはまってしまい､練習の手伝いの後は一杯という具合で､とうとう子ども達をスキーにつれて行こう、ということになりました。当時整形外科教授の松野丈夫先生、技官の今井充さん、それに春光台の元近所の人たちから大量のスキー用具を送って下さり、全員スキーは初めてという子どもたちを八ツ岳まで一泊のスキー旅行につれていくことができました。子ども達はもちろん大喜びで皆一生の思い出になったのではないかと思います。

その後2005年に愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所機能発達学部長として赴任し、しばらくして重症心身障害者施設の診療部長も兼務するようになりました。そこは定年が60歳までででしたが、このまま定年退職してどこかに就職するとしても研究を続けられないのは残念に思っていました。すると常葉大学保健医療学部で運動学、整形外科学、およびリハビリテーション医学の講義ができる医師を募集していることがわかり応募し、昨年９月１日付で採用されました。

今年で28年になりますが、脳性麻痺がある人達のフィジカルフィットネスに関する研究を一貫してやってきました。旭川療育センター時代は東工大から赴任した渡壁誠助手とともに研究をおこない私は旭川医大から医学博士の学位を、渡壁君は北大から工学博士の学位をそれぞれ頂戴しました。伊豆医療福祉センターでは発達障害研究所の三田勝己部長とともに研究を続けました。どれも日本の片田舎でおこなった小さな研究ですが、Bar－OやGageといった名だたる人達のテキストに引用文献としてリストアップされ嬉しく思っています。

発達障害研究所赴任後は理学療法士の里中綾子さんとともに脳性麻痺でも歩けない人達に被験者を拡大し身体活動や体力に関する研究を行いました。これらの研究はArchives of Physical Medicine and RehabilitationやEuropean Journal of Physical and Rehabilitation Medicineに掲載され、

里中さんはこれらの研究により名古屋大学からリハビリテーション学博士の学位を授与され、現在名古屋大学医学系大学院で助教として活躍しています。

最近、名古屋短期大学の寺田恭子教授を中心とする車椅子ダンスの研究を始めました。ほとんど寝たきりの人達を車椅子に乗せてダンスを行うのですが、皆楽しいと言います。一見「やらせ」のような車椅子ダンスですが、酸素摂取量を測ると最大で安静時の３倍以上になり、間違いなく身体活動になっているのです。そしてあの時養護学校で真剣に相撲をとっていた子どもたちの映像が蘇りました。そうか「からだは動きたいんだ！」四半世紀の旅路の果てに辿り着いた結論です。どうか笑ってやってください。

車椅子ダンスの３か月後、６か月後のトレーニング効果を昨年ボストンで開催された第７回World Congress of Biomechanicsで報告してきた際、米国の研究者から「Historical!」という激励の言葉をかけられました。まだ寝たきりの脳性麻痺者の研究を行っている研究者は私たち以外にはほとんどいません。

何かを追いかけることは楽しいし、「続けること」の大切さを後輩に伝えることができれば本稿の責務を果たすことができたのではないかと思い、ペンを置くことにします。

旭川医科大学病院での初期臨床研修プログラムの取り組み

旭川医科大学 呼吸器センター
教 授 **大 崎 能 伸**
（第２期生）
（プログラム責任者・卒後臨床研修センター センター長）

１．はじめに

平成28年度に採用予定の卒後臨床研修医は47名がマッチし、二次募集への応募を含めて、49名が採用予定になりました。同年度の旭川医科大学病院の卒後臨床研修医の定員は、医師臨床研修プログラムが54名、小児科専門プログラムが２名、産婦人科・周産期専門プログラムが２名の58名でした。文科省の発表によると、旭川医科大学病院の募集人数に対する充足率の81.0％は全国の国立大学で10位でした。平成25年度は85.7％、平成26年度は77.8％、そして今回の平成27年度のマッチングでは81.0％と高い充足率を３年間保つことができました。

大学病院は高次機能病院として先進医療を提供することが求められます。同時に、旭川医科大学病院は地域の中核病院としての役割が大きく、救急患者の受け入れ、地域病院の診療連携などが求められています。専門分野での診療を目的に紹介されてくる患者も多いのですが、症状を訴えて直接受診してくる患者も大勢います。このような背景により、旭川医科大学病院を受診する外来患者数、入院患者数は全国の大学病院の中で常に上位にあり、特に、外来患者は病院が想定している患者数を大幅に超えています。

旭川医科大学病院では、多数の臨床研修指導医が熱心に指導する体制が確立され、症例数が豊富であることなど、新人医師の研修に関して恵まれた体制が構築されています。また、研修医が増えたことにより、２年目初期研修医と１年目初期研修医や、同期の研修医同士の情報交換の機会が増えて、研修の質が向上しています。

旭川医科大学病院での初期臨床研修プログラムでは、このような充実した診療環境で、多くの症例を経験しながら、将来の専門性を意識したうえで診療技術を習得することを目的とし、旭川医科大学病院の総合力が十二分に生かせるように工夫しました。来年度以降は、さらに応募人数が増えると予想しており、現在の初期臨床研修プログラムを発展させることで研修が一層充実するように

検討しています。また、平成28年度からは新専門医制度が本格的に開始されます。基本領域は18分野プラス総合診療専門医の19分野ですが、卒後臨床研修センターでは旭川医科大学病院で取得できる18分野について専門医プログラムの作成状況を調査しており、ホームページで公開する予定です。

２．旭川医科大学病院初期臨床研修プログラムの特徴

厚生労働省の初期臨床研修の概要は、内科６カ月、救急３カ月、地域医療１カ月を必修とし、さらに、小児科、産婦人科、外科、麻酔科、精神科から２科を必修選択するというものです。卒後臨床研修センターでは、平成22年度に新しい指針を取り入れた解りやすい初期臨床研修プログラムに変更することにしました。平成22年度の初期臨床研修プログラムを作製するうえで、次の二点を重点的に配慮しました。

ひとつは、内科のローテーションを従来の診療科別から分野別のコースに改めたことです。これは、将来の専門分野での必要性に応じた分野別内科の研修を行い、知識を習得しておくことが有用と考えたからです。内科のローテーション期間を短くして複数の科を研修することも検討しましたが、２カ月で３科、あるいは３カ月で２科を研修するプログラムの効果が優れていると判断し、内科のローテーションは３分野別診療科あるいは２分野別診療科を選択することにしました。幸い旭川医科大学病院ではすでに臓器別診療科が設置されていて、診療科長が指名されています。そこで、その臓器別診療科長を研修の指導責任者とし、研修医はその指導者に研修を申し込むことにしました。

第二点は、実技が中心となる救急診療の研修です。救急診療は厚生労働省が力を入れる臨床研修分野での一つですが、研修医が十分に経験できる症例数が確保できる医療施設は非常に限られています。そのため、座学の救急研修で補っている施設がほとんどであると聞きます。旭川医科大学病院の初期臨床研修プログラムでは、実技中心の救急研修を行うことを目標にしました。救急部と幾度も検討を重ねた結果、３カ月ローテーションで実技中心の研修を行うためには３カ月あたり10名が上限であるという結論に達しました。現在は、増加した卒後臨床研修医に対して、救急プログラム内のたすき掛け研修で対応しています。多くの研修医を採用する研修病院もありますが、年間6,000名以上（平成21年度実績は6,840名）の救急患者を診療し、手術件数が年間6,000例以上（平成25年度実績は6,795例）ある医療機関はそれほど多いと思われず、十分な救急診療の経験を積むことができないでいる他施設の研修医は多いと思います。初期研修２年間のうち、最初の１年目は医師としてのスタートで特に大切です。旭川医科大学病院の初期臨床研修プログラムは、実技を通じて臨床医としての技術を早く身につけることができるように配慮しています。

旭川医科大学病院での初期臨床研修プログラムでは，１年目の３ヶ月間の選択コースで将来の専門に考えている分野を最初にとることができます。これは、興味のある診療科を早く経験できるように工夫した結果です。また、２年目のローテーションは、必修である１カ月間の地域医療以外を研修医の希望に基づいて自由に組めるようにしました。卒後臨床研修制度は総合力のある医師を輩出することを初期の目的とていましたが、専門医育成の開始が遅くなることで、我が国の医療水準が世界に遅れることが懸念されました。大学病院の使命の一つはレベルの高い専門医の育成であり、大学病院を選択する研修医の目的もここにあると思われます。この目的のために、旭川医科大学の初期臨床研修プログラム適していると思います。

３．これからの課題

平成28年度にマッチングする初期臨床研修プログラムの課題について考えてみたいと思います。平成29年度プログラムの募集定員は平成28年度プログラムよりさらに増加することが見込まれます。来年度のマッチングに応募する希望者が今年度よりも増加することを見込んでいるからです。旭川医科大学の初期臨床研修プログラムでは、すでに将来の初期研修医が増加することを見込んで作られており、平成27年度プログラムからたすき掛け研修を大胆に取り入れています。特に、将来の専門分野が決まっていて、その分野の責任者と相談した場合は、長期間のたすき掛け研修が認められ

ます。専門分野が決まっていない場合でも、卒後臨床研修センターの内科系と外科系医局長に相談して、２年目のたすき掛け研修ができる場合があります。この制度は、旭川医科大学の初期研修プログラムに属しながら、地域の病院で経験を積むことができることを意味しています。また、専門分野の責任者と相談した場合に、旭川医科大学のプログラムに属したままで１年目の研修を他病院で受けることも認められる場合があります。さらに、他病院のプログラムを選択して１年目を研修して、２年目に旭川医科大学で研修する逆たすきが認められる場合もあります。平成29年度プログラムはこの制度をさらに充実させて、円熟した初期臨床プログラムを提示したいと考えています。

旭川医科大学病院での初期臨床研修プログラムは柔軟性、研修医の将来を考えた展開、医師の育成などが盛り込まれ、旭川医科大学病院の総合力が発揮できるよう考えられたプログラムです。しかし、このプログラムの内容が旭川医科大学の学生や職員に十分理解されているか確信できない部分もあるかと思います。今後は、本学の学生のみならず、全国の医学生に旭川医科大学の特徴を生かした初期臨床研修プログラムを積極的に紹介していきたいと考えています。また、旭川医科大学での初期臨床研修プログラムが成功し、多くの後輩に経験を引き継いでもらうためには旭川医科大学病院で指導している臨床指導医の理解と協力も不可欠であると思っています。

海外研究留学中です

旭川医科大学 小児科学講座
長 森 恒 久
（第23期生）

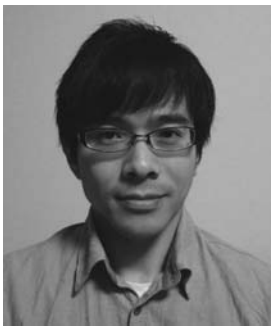
平成27年６月より，小児科学講座 東 寛教授の御承諾を頂き英国スコットランド，University of Dundee内にあるMedical Research Council Protein Phosphorylation Ubiquitylation Unit（MRC－PPU）で研究留学の機会を頂いております。卒後14年目からの海外留学は遅めかもしれませんが，小児科の幅広い一般臨床，特に感染症や免疫疾患を診療する中で，臨床的how toだけでなく感染免疫や小児の免疫学的発達についてwhat is happeningを知りたいと考えるようになり留学を希望しました。留学先であるMRCは大学に所属すると同時に国立の研究機関でもあり，欧州最大級の産学連携施設として（田舎にあるにもかかわらず）優れた研究を行なっている施設です。Sir Philip Cohen博士は自然免疫に係るシグナル伝達の詳細解明，蛋白リン酸化酵素阻害剤を中心とした新薬開発にも既に大きな実績のある方です。全く面識の無い状態からメイルをやり取りし，上原記念財団の助成金を獲得して留学を許されました。出発の空港を成田と羽田で間違えるなどのドタバタはありましたが，滞りなく受け入れて頂き元気に働いています。

こちらでのラボは，ボス以外ほぼ外国人で，インド，スペイン，ドイツ，中国から研究員を入れています。皆いい人達ですが，数年間の契約の間にbig journalに業績を作りキャリアアップしようと切迫感を持って働いています。日本人の医師は施設内でも私一人で，そもそも医師が基礎研究をする意義を（特に科研費システムがしっかりしていない国の人達に）理解してもらうこと自体が大変だったりしました。正直なところ，現時点では周りに比較すると基礎知識も実験力も語学力も不十分な事に大変なストレスを負っています。が，あらかじめその覚悟は出来ていたので，落ち着いて一生懸命に取り組むことで周囲の理解は得られていると思っています。ただし，多弁なネイティブスピーカの英語とその“ノリ”に関しては早々に習得を諦めました。

現在私はABIN2という自然免疫反応の調整を行なうユビキチン結合蛋白の新規機能検索をテーマに頂いています。ユビキチン結合能喪失型ノックインマウスの表現型からその機能を探索する，というと聞こえが良いですが，悔しい事に今はまだボスやバディという名の指導役が指定する実験を行い，その結果からまた次の実験を指定される，という事の繰り返しです。マクロファージや樹

状細胞の培養から免疫沈降反応，刺激してウェスタンブロットの流れをとにかくやり込んでいます。ちなみに私のバディは同い年のインド人で，気が合い助かっています。（同期の仲間と行った卒業旅行での経験が大活躍していますよ！）ボスは非常に温和な方で，驚くほど丁寧に指導して頂けます。同時に，好奇心を前面に，悪気無く大変な仕事量を要求される方でもあります。Weekly Updateという名目で，毎週何らかの実験結果を載せたレポートを日曜日までにメイルし，週明けに１対１で話し合いを持ちます。従って土曜は実験の仕上げとレポート作成に費やされ，何かトラブルがあれば日曜もつぶれるという事になりますが，往々にして実験にトラブルがつきものなのは言うまでもないことと思います。

さて，私の留学はまだ始まったばかりですが，大学卒業後初めて病棟を離れ基礎研究に取り組む時間を頂き，既にデータの積み上げ方やトラブルシューティングに関する貴重な経験を次々と得られています。また臨床と研究について，医師のキャリアについて，英国と日本の社会や組織の違いについてなど，ものを考えるきっかけも多く作れているように思います。自分のテーマの周辺を一通り勉強すると，むしろ臨床的事象との関連を考えはじめ，臨床研究への応用に意欲が湧いてきます。最終的には研究結果をpublicationして帰る事が目標になるのですが，その後も続く小児科医としての人生に良い影響を及ぼせる様に，ここで充実した時間を過ごしたいと考えています。



海外留学ご報告

呼吸器センター
南　　幸　範
（第29期生）

2015年４月から米国University of Pittsburgh Medical Center, Pulmonary, Allergy and Critical Care Medicine, Wenzel Lab.に研究留学しております。こちらに来て半年が過ぎ、こちらでの生活に慣れてきたところです。まだ半年ですがこれまでの留学生活についてご紹介いたします。

まずはPittsburghについてですが、米国Pennsylvania州にあるかつては鉄鋼の生産で栄えた都市です。鉄鋼業が衰退した後は、ハイテク産業、保険・医療、教育に産業を転換させ発展しました。University of Pittsburghの他にも世界的に有名なCarnegie Mellon UniversityやDuquesne Universityなど多くの大学があり、学術都市としても有名で、米国以外からも多数の学生、留学生が来ています。もちろん日本からの留学生もいますが、中国を中心とした他のアジア諸国からの留学生のほうが多い印象です。市の人口は約30万人で、数字的には旭川とほぼ同じくらいです。MLBのパイレーツ、NFLのスティーラーズ、NHLのペンギンズがあり、スポーツでも有名だと思います。ちなみにイチローが遠征に来たときの試合を生で観ることができました。しかもすぐ間近で。

さて、ラボについてですが、UPMC Montefiore内にあり、臨床と研究施設が混在しておりTranslational researchが盛んで、私もそのような環境の中、気管支鏡で得られた気道上皮細胞を用いて研究しています。私のボスであるDr. Sally E. Wenzelは気管支喘息の研究・治療では知らない人がいないのではないかというほど有名な方です。現在のラボのメンバーは、ボスを除いて私を含め８名の研究者（臨床にも携わっている者も含め）とラボテクニシャン３名で構成されています。今年の夏まで中国の精華大学からの留学生もいました。日本人は私のほかにもう１名おります。ですが、ラボでは英語のトレーニングのため英語しか使用していません。

ラボのスケジュールですが、週一回大体木曜にミーティングがあり、データの提示と今後の予定をプレゼンテーションします。数名のグループに分かれてプレゼンテーションするので自分のデータ提示は月に一回程度です。加えて月一回持ち回りでJournal Clubが当たり、主に自分の研究に関

係のある論文の解説をします。私はまだ当たっていませんが、来年早々に当たる予定です。これに加えて、ボスとの１対１のミーティングが２週に１回のペースであります。これはさすがに緊張します。このような感じのスケジュールですが、ボスが多忙なためかなりの確率で急遽変更ということが起こります。出勤時間は決まってはいませんが、９時には出勤しています。これでも早いほうです。こちらに来た当初はまだテーマが確定しておらず、そのためやれることがあまりなかったので17時すぎには帰宅しておりましたが、今はそこまで早く帰宅できていません。大体19時過ぎくらいでしょうか。ラボに最後までいることが多くなりました。細胞の培地交換があるときは土日のどちらかはラボに行っています。

私の研究テーマですが、喘息患者においてある酵素が気道上皮の線毛運動や痰の産生に大きく関わっていることがわかってきており、その酵素阻害薬を用いてそのメカニズムや実際の効果を喘息患者または健常者から得られた気道上皮細胞を用いて確認しています。自分のラボだけでは確認できないこともあるため、他のラボに行って設備をかりたりもしています。今は少しずつ結果が出てきているところです。

個人的な話になりますが、こちらには妻と二人で来ております。私がラボに行っている間妻は主にどうしているかと言いますと、英語のクラスに参加し英会話を勉強したり、教会で聖書を用いた英語の勉強をしたり、ボランティアに参加して日本語を教えたりしています。また、海外留学生・研究者が多いこともあって、主にその奥様方で構成されている女性の会というものにも参加しています。そこは様々な国出身の女性が参加しているようで、その中でも英語の勉強会があります。また、その会が主催する近隣へのピクニックなどもあり、私がいない間も暇になることはあまりないようです。同様な状況でこちらに来ている方も多くいるため、心強いです。先にこちらに留学されている腎泌尿器外科の和田直樹先生にはこちらの生活のセッティングの際、また今現在も色々と大変お世話になっております。この場をお借りして、お礼申し上げます。

海外留学は、研究だけではなくその国の文化に触れ、そのことによって日本、旭川をあらためて知る良い機会だと思います。こちらの方々と話していて自分はなんて日本のことを知らないのだと痛感しています。残りの一年半様々なものを吸収し、また日本、旭川について知り、帰国した際に役立てられればと考えております。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった大崎能伸教授、呼吸器センターおよび循環・呼吸・神経病態内科学分野の先生方に深謝いたします。

海外研究留学報告
～米国オーガスタ～

熊　井　琢　美
（第30期生）

同窓会員の皆様、常日頃より大変お世話になっております、30期の熊井です。2014年６月より、本学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座、原渕保明教授および病理学講座免疫病理分野（第二病理）、小林博也教授の御高配を賜り米国ジョージア州オーガスタ市にありますジョージア州立大学（Georgia Regents University、以下GRU）にて研究留学をさせて頂いております。GRUでは癌研究所内の癌免疫プログラムに所属しており、ディレクターの一人であるエステバンセリス教授にご指導頂きながら研究に励んでおります。セリス先生は小林教授のMayo Clinic時代のメンターであり、癌ペプチドワクチンの第一人者でもあります。自由に研究させて頂いていた日本の環境とは異なり、基本的にはボスの仮説を実行していくスタイルのためかなり勝手が違いますが、一日本人として、

また本学の名に恥じぬよう、悪性腫瘍患者に少しでも福音をもたらせるよう粉骨砕身務めて参ります。

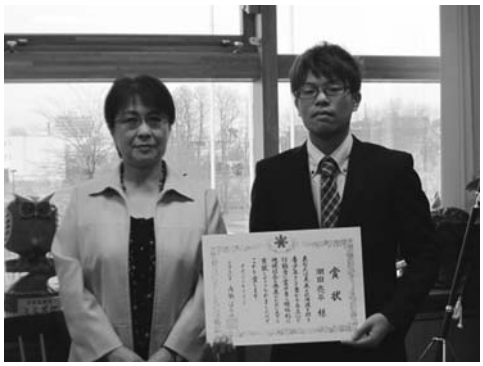
ラボはエジプト人、ウクライナ人、アメリカ人、中国人、そしてメキシコ人のボスという国際色に富んだ構成であり、世間話に政治や宗教の話が多く含まれるため国際情勢からは目が離せません。その一方で、多くの料理のレシピや他文化の知恵を知る機会に恵まれており、国際的な交流が留学の醍醐味の一つと実感しています。今やインターネットが普及しておりアマゾンで何でも手に入るので、一昔前の留学生活とは隔世の感があるかと思います。アパートの入居も管理人とのチャットを通じてあっさりと決まりました。オーガスタはゴルフトーナメント以外には何もない小さな街ですが、幸いアジア系の食材店がいくつかあり魚介類以外の食材は概ね入手可能です。ただし、美味しいラーメンは都会に行かなければ食べられないので、小麦からラーメンを作り、うどんやパスタを打ち、ピザやパンを焼き…と料理の幅が大分広がりました。七面鳥を焼いたり、牛の舌や大腸を捌いたり…きっと、留学あるあるですね。生活のセットアップに関する留学マニュアルを作りましたので、もしアメリカに御留学を考えておられる先生がいらっしゃればご一報頂ければ幸いです。

割と忙しめのラボにいるのでそんなに遠出は出来ていませんが、ビーチボーイズや少年ナイフのライブを聴いたりアメリカ空軍のパーティーに招待されたりとそれなりに充実した毎日を送っています。美術館好きが高じて東海岸の多くの美術館に行きましたが、今のところのおすすめは最近建て替えられたニューヨークのホイットニー美術館です。展示方法が洗練されていて、モチベーションが上がる場所でした。６月には原渕教授が激励にいらして下さり、リフレッシュすると共にまた気持ちを新たに研究に邁進しております。私のような若輩者にこのような素晴らしい機会を与えて頂き、原渕教授と小林教授には本当に感謝しております。同時に、ある程度若い内にこのようなチャンスを得られるという意味でも母校、同窓の有り難さを痛感しています。

近年、免疫チェックポイント阻害薬（PD－1、CTLA－4）の開発に伴い、癌免疫は非常にホットな領域になっています。現在の私の主たる研究内容は癌特異的CD8もしくはCD4T細胞を標的としたペプチドワクチンの最適化です。日本ではペプチドエピトープの探索を主に行っていましたが、常々これらの発見をどうすれば多くの患者に応用できるかと考えてきました。実際に患者に応用するには金銭面や薬事面での障壁を乗り越えねばならず簡単な道程ではありませんが、まずは基礎的データを積み上げることが肝要と思っています。ペプチドワクチンは標的にするエピトープペプチドを変更するのみで固形癌や肉腫、血液悪性腫瘍といったいかなる悪性腫瘍にも対応可能な戦略です。帰国後は多くの科とコラボレーションして様々な悪性腫瘍に対するペプチドワクチンやチェックポイント阻害薬を含めた免疫療法の基盤研究を重ね、本学が癌免疫において新知見を発信し続けて世界をリードしていく、“オール旭川医大”体制を夢見ております。もし免疫療法に関する研究に興味がある方がいらっしゃれば、実現可能な方策についてディスカッションさせて頂ければ幸いです。

最後に、留学はもちろん楽しいことばかりではなく、生き馬の目を抜くような集団の中でいかにして頭角を示すかが研究のイニシアチブを握る鍵になる場合があります。そのためには日々、勉強です。また、留学中には自国の歴史や文化を説明する機会が多くあります。これもまた日々、勉強です。仕事における知識・技術が醸成されると同時に、自国や他国の文化、常識についても造詣を深められる留学。もし同窓会誌をお読みの若い先生がいらっしゃいましたら、医学の発展とまたとない経験のためにも、是非留学をお勧め致します。

旭川ウエルビーイング･コンソーシアム学生自主組織はしっくすの活動で学生表彰を受けました



潮　田　亮　平
（医学科５年）

「はしっくす」とは旭川市内の大学・短大・高専の学生により組織されている、旭川ウィールビーイング・コンソーシアム学生自主組織です。はしっくすでは、「学生・若者の視点から地域貢献する」、「将来，地域に貢献できる人材を育てる」、「相互交流によって，互いに影響し合う関係の構築」の３点を目標とし、地域活性化のためのイベントを企画・運営しております。私はこの団体のメンバーとして平成23年４月より活動しており、平成25年４月から平成26年３月までの期間、代表を務めておりました。

代表期間中、私が最も力を注いだのは中高生や大学生といった世代の異なる子どもたちが交流する異世代交流事業です。旭川市内には地域活性化に貢献することを理念においている中高生団体が複数存在しており、それぞれの母団体が異なるため、別々に活動を行っておりました。しかし、それらの団体間のネットワークを構築することで、個々で活動するよりも大きな取り組みができるのではないかと考え、異世代交流事業を年間通して計３回実地しました。本事業を通して、交流だけではなく、イベントの企画段階から協力して行うことができ、中高生の自主性や価値観を育むのに貢献することができました。また、事業計画の中で旭川市子育て支援課から新たにご協力いただいたことによって、活動の幅が広がり、大学生の企画力や外部対応等をご指導いただくことができました。

具体的な活動内容としては、平成25年で第４回目となったスノーキャンドルイベント「あったかいね，あさひかわ」を企画運営いたしました。旭川の冬の寒さに負けず、旭川の暖かい魅力を市民や観光客の皆さんに知って頂くため、総勢100名を超える中高生と一緒にスノーキャンドルや雪だるまの作成、訪れた市民の方々とサンタの折り紙を使ってクリスマスカードを作るクラフト体験、駅構内での甘酒の無料配布を行いました。また、イベントを余すところなく楽しんでいただくために、訪れていただいた方にスタンプラリーを行うなどの工夫も行いました。以上の取り組みを通して中高生との交流だけではなく，事業実施場所を買い物公園通りからＪＲ旭川駅としたことで中心市街地の賑わい作りに貢献することができました。他にも，平成23年にＪＲ旭川駅がリニューアルした際には「ウォールアート夢の発着点」を企画運営し，中高校生と大学生がテーマに沿ったフリートークを行う「かたるべ！」を定期的に開催するなど，年間を通じて異世代交流や中心市街地の賑わい作りに取り組んできました。現在も，「市民の企画提案による協働のまちづくり事業」や「旭川市庁舎整備検討市民懇話会」等の市民参画委員として参加しており、市政やまちづくりに関与しております。

以上の活動が評価され、平成26年度北海道青少年顕彰、及び学生表彰を受けることができました。このように晴れがましい栄誉を得ましたことは、ひとえに、活動を通して私に関わってくれた人々全てのご指導、励ましの賜物と心から感謝しております。私の夢は、医療を通して自分の働く地域を元気にすることです。純粋な疾患に対する治療だけではなく、保健福祉や行政等多方面から地域を元気にしていきたいと考えております。これらの学生期間中に体験できた貴重な経験を、少しでもそれらに活かしていきたいので、今後とも一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

会頭賞（学生発表部門）受賞のご報告
～於第66回日本東洋医学会学術総会～

橋　本　　亮
（医学科４年）

今年度富山で行われました第66回日本東洋医学会学術総会において、演題「漢方医学を自主学習する医学生・実態～全国医学部での課外活動調査から～」を発表させていただき、学生発表部門の会頭賞を受賞いたしました。全国の漢方医学教育に携わる方々から、このようなかたちで発表を高く評価していただいたことは、私たち旭川医科大学漢方研究会として大変光栄に存じます。

当研究会は発足して10年足らずですが、学生が自主的に漢方や東洋医学全般を学ぶ場として学内外で様々な活動機会を提供しています。日本東洋医学会学術総会学会でのポスター発表には、代表である会長をはじめ数人が参加し、今年度で７回目となりました。今回は、我が国の漢方医学教育の現状を、課外活動である学生研究会という視点から調査研究し発表させていただきました。以下発表内容の概要をご紹介いたします。

「医学教育モデル・コア・カリキュラム」の到達目標に「和漢薬を概説できる」が追加されて十数年経ちましたが、現状の卒前漢方医学教育は十分とは言いがたく、意欲ある学生は自主学習で対応しています。一方、課外活動での研究会や勉強会は漢方に関心を持つ学生にとって、数少ない自主学習と場となっていると考えられます。そこで、当研究会は漢方医学や東洋医学の研究会・勉強会に所属する全国医学部の医学生に対して、アンケート調査を行い、漢方医学に関する課外活動の実態について考察しました。

アンケート結果から、学生研究会には入学以前から漢方医学に関心を持ち、卒後も臨床現場で漢方を処方したい学生が多く所属していること、所属学生の大学漢方医学教育に対する評価は低く、コマ数・教育内容ともさらなる充実を求める声が多いということなどがわかりました。これを受けて、私たちは現状の漢方医学教育に対して２つの「提言」をさせていただきました。一つ目は能動的学習を促進するために漢方医学教育へPBL導入を行うこと。もう一つはボトムアップ型医学教育の場として学生研究会を位置づけ、積極的に支援を行うことです。発表では、特に後者の提言を強調させていただきました。

自身の経験と今回の調査結果から、学生研究会での活動のメリットとして、カリキュラムにとらわれず漢方を広く深く学ぶことができること、卒後も漢方を学続ける強い動機付けとなること、将来一般市民や患者さんに漢方の利点を伝えられる説明能力がつくことなどが挙げられます。しかしながら、学生研究会の多くは「恒常的な人員不足、活動場所など様々な運営課題に悩まされている」ということも調査から明らかになりました。旭川医科大学漢方研究会も例外ではなく、所属学生のほとんどは他の部活動との掛け持ちであり、学業との兼ね合いもあって活動基盤は必ずしも磐石とは言えません。学生研究会の存在しない大学では、学習環境に格差があると言っても過言ではありません。今後も自主学習の場を維持・発展していくために、学内外から継続的に支援が必要だと思われます。

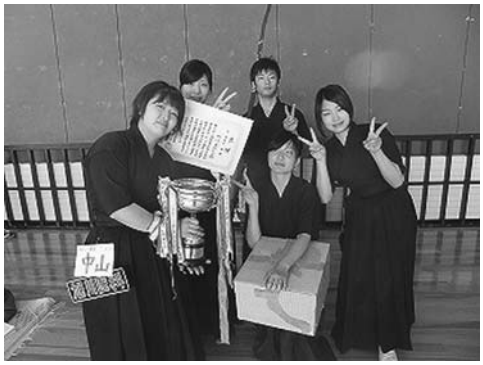
結論として、恐れ多くも「学生研究会を中心とするネットワークは将来の漢方医学界を支える基盤として認識すべき」と発表の最後に述べさせていただきましたが、これは当事者としての危機感と期待を持っているからこそのメッセージであります。漢方医学教育に関わる聴衆の方々にこうした思いを訴えることができたのも、一つの成果だと考えています。

今回の調査を通じて、漢方医学・東洋医学系の学生研究会が全国各地に多数存在し、地域ごとのネットワークも形成されつつあることがわかりました。今後は、全国規模で積極的な交流が行われ

ていくものと思われます。当研究会も昨年度から北海道・東北合同東洋医学研究会に参加するなど、積極的な学外活動を進めています。他大学に漢方を学び合い切磋琢磨し合う同志がいることは心強いですし、医師となってからも卒前でのこうしたつながりが活かせると意義深いと思います。

臨床現場では、漢方方剤の処方経験のある医師は９割以上に達しています。多くの先生方から、現場に出る前に漢方を学生時代に自主的に勉強した経験は、医師になってから役に立つというご意見をお聞きしております。拙稿をご覧になった同窓会の皆様におかれましては、旭川医科大学漢方研究会および、旭川医科大学で漢方を学ぶ学生にどうか暖かいご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。最後になりましたが、旭川医科大学漢方研究会顧問の加藤育民先生（旭川医科大学産婦人科学講座、第14期生）と、毎度学会や勉強会などでお世話になっている橋本喜夫先生（旭川厚生病院、第５期生）には、この場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。

第61回北海道地区大学体育大会
弓道部 女子団体優勝



阿　部　史　華
（医学科３年）

平成26年７月に行われました北海道地区大学体育大会において、私たち旭川医科大学弓道部の女子団体は二連覇を果たしました。誰もが頭に「二連覇」という単語を思い浮かべての大会は、前年度とはまた違った緊張感を伴ったものとなりました。

旭川医大弓道部は、冬期はオフシーズンと称して正規練習が一切なくなります。翌春からの大会の数々へ向けて、冬期には各自のペースで自主練習を行い、シーズン中にはゆっくり向き合う余裕のなかった自身の射の改善点を追及していきます。各自のペースでとはいいつつも、積雪のため練習する前の雪掻きにとても時間がかかり、なかなか満足に的前での練習時間は取れないというのが現状です。そんな冬期を乗り越えて迎えた春、新歓に力を入れて新入部員も迎えた後すぐに、交流試合や公式戦が連続で押し寄せてきます。部活動を再開してからしばらくの間は、誰もが少なからず、本来の調子を取り戻すのに苦労することとなります。本大会の直前にはもう一つ、こちらも全道の大学が集まる公式戦がありました。その大会では団体の調子が崩れてしまい、結果も思わしくなく、続いて本大会に臨むまでのわずかな練習期間の雰囲気は、団体を結成した当初、あまり前向きなものとはいえませんでした。

医学部の弓道部でありながら、北海道内の強豪と呼ばれる全学の弓道部にも勝つことができるということを、前年は同大会以外の大会でも示すことができました。前年の強さを偶然のものとしないため、また、本大会が引退試合となる看護科の先輩二名と共に三人団体を組むことになったということもあり、私の中に本大会の二連覇を狙っていきたいという強い思いが芽生えました。

雰囲気の暗かった団体練習も、大会直前になるにつれてどこか吹っ切れたようになり、本番では前向きな雰囲気を取り戻すことができました。弓道は射技の向上を目指すことも大切ですが、大会結果の多くは選手の精神状態に左右されます。本大会の団体メンバーは全員が高校からの経験者で大会経験も豊富だったため、直前期に調子を崩していたとしても、本番での強さを発揮できる可能性を信じることができました。そうして励まし合いながら試合に臨んだ前向きな姿勢が、二連覇という結果をもたらしてくれたのだと思います。

結果が出た直後、優勝が嬉しいという気持ちと共に、高校の弓道部時代から知っていた看護科の

先輩方と同じ団体で弓を引くというとても楽しい時間が終わってしまったことに、寂しさが込み上げてきました。引退される先輩方を、二連覇という華々しい結果と共に送り出すことができて本当に良かったです。

本大会終了後から現在に至るまでに、射技・精神面・指導力など様々な面でとても頼もしかっ経験豊富な先輩方は、医学科、看護科共に次々と引退されてしまいました。現在の弓道部は、一・二年生の大多数が大学から弓道を始めた部員で構成されています。後輩たちの経験はまだまだ浅いですが、誰もが熱心に練習に取り組み、射法を覚え、日に日に逞しく成長しています。団体戦で信頼するメンバーと共に弓を引き、勝利に近づく楽しさを、ぜひ後輩たちにも味わって欲しいです。また、強くなった後輩たちと一緒に、私も再びその気持ちを感じられたらと思っています。経験者の強い先輩方に憧れるに留まらず、後輩たちが、自分たちもあの先輩方くらいにはなってやろうというような強い気持ちを持ってくれたら嬉しいです。そのために、私が今まで経験してきたこと、先輩方から学んだ多くのことを、しっかりと後輩たちへ伝えていきます。

本大会に向けて、指導してくださった師範の先生、引退された先輩方、声援をくださった卒業生の皆様に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。応援してくださる方々の期待に応えられるよう、これから先も部員一同で練習に励んでいきたいと思います。

医大祭2015を終えて

医大祭実行委員会
委員長 **飯　田　敏　史**
（医学科４年）

2015年度医大祭実行委員会委員長の飯田敏史です。第41回旭川医科大学医大祭「医祭楽祭～いっさいがっさい～　ALL FOR ONE（41）」が６月６日(土)、７日(日)に行われ、無事に終了致しました。

今年度の医大祭のテーマは「医祭楽祭～いっさいがっさい～ ALL FOR ONE(41)」というものでした。このテーマに私たち実行委員会は、「旭川医大の学生は勿論、それだけではなく、地域住民の方々、医大祭に携わるすべての方々と共に、今まで以上に一丸となって一緒に医大祭を作り上げていきたい」という思いを込め、医大祭を運営して参りました。このテーマに沿って、地域住民の方々も巻き込んで楽しめる催し物を医大祭の為に、私たち学生が全力で用意しました。いくつもの部活動、団体が作り上げた模擬店、コンサート、ライブ、取りこぼすことなくお楽しみ頂けたのでは無いかなと思っております。

６日(土)に行われた講演会では、産婦人科女医で性科学者である宋美玄氏を講師としてお迎えし、「女性のカラダ・悩み」に関して講演していただきました。宋美玄氏はフジテレビ「とくダネ！」のレギュラーコメンテーターを務めている他、「女医が教える本当に気持ちのいいセックス」（ブックマン社)、「産科女医が35歳で出産してみた」（ブックマン社）等の著書も多数ある著名な方です。講演会中には、参加者の為に気軽に質問ができる機会を設けて頂き、様々な質問にも、一般の方々にも分かり易いように噛み砕いてお答え頂きました。宋氏の気さくな性格が伝わる、活気のある講演会であったように思われます。著名な現役産婦人科医の講演は、市民の皆様は勿論のこと、学生、医療従事者等、多くの方々にとって有意義な時間となったのでは無いでしょうか。

医学展示では、医大祭テーマに沿った企画を多数用意致しました。今年も例年に引き続き旭山動物園さんとのコラボ企画を行いました。コラボ企画内では、旭山動物園飼育スタッフ責任者の中田真一さんに講演をして頂くことが出来ました。旭山動物園にカバ館が出来た当初の頃の様子やチンパンジー等の動物の日々の様子を実際の動画を交えながら紹介して頂けたのが、大変興味深かった

です。当日は、大人の方々だけではなく、動物に興味を持たれているお子様連れの方々も多く来場されており、年齢層問わず御楽しみ頂けたのではないかなと思っております。

公開講座では、『「臓器はいかに再生し、維持していくのか？」生命の母なる海＝毛細血管から見えてくること…』と題し、講義が面白いと本学の学生からも評判の高い川辺淳一先生に講義をしていただきました。毛細血管の専門的な知識を市民の方々にもわかりやすく説明して頂きました。

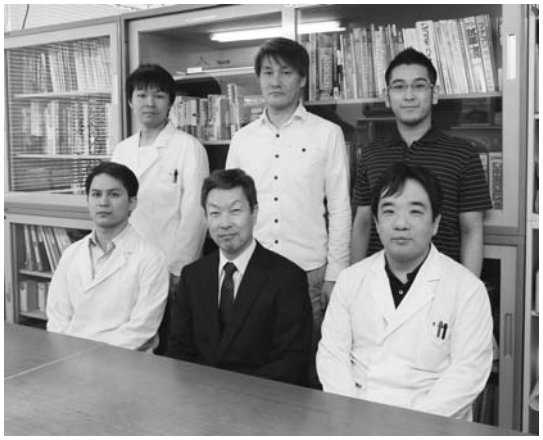
毎年恒例となりましたお笑いライブでは、「NON STYLE」、「ピスタチオ」、「ラバーガール」、「ゴージャス」、「すずらん」の総勢五組の芸人さんをお呼びすることができました。例年は、当日券も売り出しているのですが、チケットは前売りの時点で完売となりました。体育館が多くの市民の方々で一杯となり、大盛り上がりのステージとなったように思われます。会場の混雑を上手く誘導することが出来るのか等、多くの不安は有りましたが、大きな混乱は１つも無く、盛況のうちに無事にお笑いライブを終えることが出来ました。

他にも、フリーマーケット、青空市、ゲーム大会、花火、募金活動、ロビーコンサート等、市民の皆さんも楽しめる数多くの催し物を用意させて頂きました。どれも、医大祭実行委員会が、約一年間掛けて用意をしてきたものです。何度も会議を重ね、試行錯誤し、医大祭の為に全力を注いできました。その結果、今年度の医大祭のテーマである「医祭楽祭〜いっさいがっさい〜 ALL FOR ONE(41)」に沿って、これらの催し物に地域住民の方々を巻き込み、皆様との交流を深められたのではないかと感じています。大きな混乱、事故も無く、医大祭全日程を終えることが出来、とても嬉しく思います。

医大祭がこのように盛況のうちに終えられたのは、偏に、医学科同窓会長の千葉教授を始め、医学科同窓会の皆様の医大祭への資金援助等のご支援が有ったからこそだと思います。医大祭は、来年度以降も続きます。医大祭実行委員会を下の代に引き継ぐ為、担当は変わってしまいますが、今年度以上の医大祭を後輩達が作っていってくれると思います。医学科同窓会の皆様とも更に交流を深め、医大祭を企画していけたら、より魅力のあるものを開催できるのではないかと思います。今後も、医大祭実行委員会への変わらぬご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

教室（講座）だより

解剖学講座 機能形態学分野（旧解剖学第一講座）



教授 吉田成孝

2014年４月から技官の東真史2015年４月から助教の野村太一が加わり、吉田、准教授の板東良雄、助教の田中達英、技官の羽澤和美の６名の体制なりました（写真）。今年度（2015年度）の解剖実習（形態学実習）は、４人の教員での担当しており、さらに充実した実習となっています。

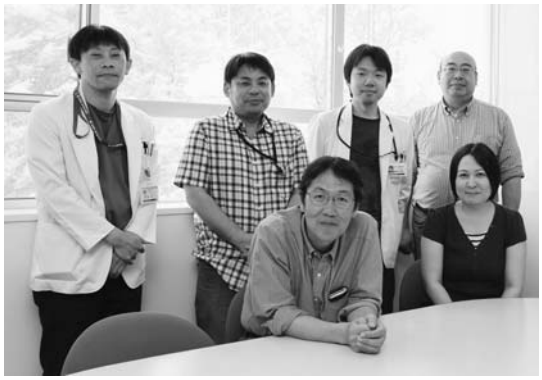
教育の担当はいわゆる“マクロ”で、授業科目「機能形態基礎医学」と「形態学実習」が中心で、系統解剖学の中で中枢神経解剖学を除いた分野を担当しています。また、「医学英語ⅣＡ」では本年10月開講分は１名の学生が受講しています。この他に、基礎医学特論および選択必修科目での授業もあります。解剖学教育では「構造の全体像が具体的に把握できることを目指す」ということを教育目標としています。2013年２月から９月までの改修工事により、換気の際に冬季でも暖められた空気が入るようになり、快適な環境で実習を行うことができています。教育用の映像コンテンツも、ハイビジョン収録で充実した内容のものが揃い、学生の理解に役立っています。肉眼解剖学実習は「形態学実習」として展開していますが、放射線医学講座の協力も仰ぎ、肉眼解剖学と画像の読影を合わせた実習を行っています。また、組織学のリメディアルということも含め、組織学も実習の一部としています。看護学科の解剖教育においては、形態学実習を看護学科の平先生と協力して実施しています。解剖学関連の講義は機能形態基礎医学の一部として行っています。具体的なイメージが構築されるように実習と補完しながら展開しています。

本講座は学内での教育担当に留まらず、地域の看護系およびコ・メディカル教育にも積極的に対応しています。解剖学の講義は旭川大学、富良野看護専門学校、旭川医師会看護専門学校、北海道医学技術専門学校への講師派遣を行っています。さらに、解剖実習見学会を毎年２日－３日間にわたり開催し、旭川市をはじめ、深川市、富良野市、名寄市の看護系をはじめとする短大および専門学校から９校400人以上の参加があります。2015年も７月10日、13日、14日の３日間にわたり実施しました。北海道赤十字看護大学（北見市）からの見学生の受け入れも行っており、本学の学生と熱心にディスカッションをしながら、実際の人体の構造を学んでいます。やはり、実際の御遺体を見ての実習は教育的効果も高くなります。さらに、医療関係専門職の方の実習見学も行っており、昨年は柔道整復師の方々に見学をしていただきました。

研究面では「中枢神経傷害時における細胞外環境の変化」を教室のテーマとして研究生活をおくっています。中枢神経に様々な損傷や障害が生じたときに細胞外マトリックスや細胞接着因子が大きな変化をし、病態と深い関連があることがよく知られています。さらに、これらの蛋白質を修飾する因子としての細胞外蛋白分解酵素の病態への関連に注目し、最終的には細胞外環境の変化と病態の治療ということを見据えながら研究に励んでいます。特に、グリア細胞および免疫系の細胞が傷害後の中枢神経系の細胞外環境づくりには重要なはたらきをしています。グリア細胞の一つであるオリゴデンドロサイトが発現する細胞外の蛋白分解酵素（プロテアーゼ）に大きな変化が生じることを見出しています。これらの研究結果はGlia誌を始めとする専門誌に発表しています。さらに、最近は脱髄を早期から形態学的に鋭敏にとらえる走査型電子顕微鏡の新たな手法を開発しました。これまで考えられてきた脱髄の進行やそのメカニズムを見直すことができるのではないかと、研究を行っています。さらに、別のグリア細胞であるミクログリアによる脱髄と再髄鞘化の制御に関する研究も行っており、この面での成果も発表しています。また、受託研究や共同研究にも積極

的に取り組み、製薬企業等との連携も深めています。国際協力として、日本学術振興会の論文博士号取得希望者に対する支援事業（RONPAKU）に2013年度に採択された中国人け研究者You Huaの論文指導に当たり、今年度中の博士号取得を目指しています。また、医学部学生の国際交流を行っているIFMSA留学生も毎年受入れ、研究指導を行っています。今年８月にはチェコ共和国から学生を受け入れました。臨床の大学院生を始め基礎研究に興味を持っている方でしたら、教室のテーマにはこだわらずに柔軟に研究テーマを考えます。研究に興味がおありになる方はどうぞ、気楽に声をおかけ下さい。

解剖学講座 顕微解剖学分野（旧解剖学第二講座）



教 授 **渡 部 剛**

解剖学講座講座顕微解剖学分野の平成27年10月に於ける陣容は、渡部 剛教授、甲賀大輔准教授、春見達郎助教、暮地本宙己助教（本学28期）それと事務補助員の武田和恵の５名です。

この２年間での変化は、まず何と言っても、長年、本講座/研究分野で活躍していただいた平 義樹講師（本学９期）が、平成27年４月１日付で看護学科形態機能学領域・准教授に昇進・転出した事でしょう。平先生には、組織学実習、骨学実習、神経解剖学・同実習など学生教育の面で大きく貢献していただきました。平先生には、この３月に定年退職された石川一志先生の後を引き継ぐ形で看護学科での解剖生理学関係の講義・実習を御担当いただくこととなっておりますが、これで医学科と縁が切れたわけではなく、平先生が得意とされている神経解剖学と脳実習については、今後も平先生に主導的な役割を果たしていただくよう、無理を言ってお願いしております。平先生には、今後、旭川医科大学がますます発展していくよう、医学科と看護学科を繋ぐ架け橋としての活躍を期待しております。

平先生の後任には、早速、平成27年５月１日付で、新潟大学大学院医歯学総合研究科・顕微解剖学分野の甲賀大輔講師を准教授としてお招きいたしました。甲賀先生とは、かれこれ10年ぐらい共同研究をしており、機会があればぜひ本学にと思っておりましたので、ちょうど良いタイミングでした。甲賀先生は組織学の研究・教育に関して伝統のある新潟大学医学部・旧第３解剖で走査型電子顕微鏡観察技法を極めた研究者です。今や絶滅危惧種ともいえる走査型電子顕微鏡の使い手として、決してひいき目ではなく、おそらく日本でも世界でも５本の指に入る研究者ですので、今後、旭川でも大活躍してくれるものと期待をしております。

臨床講座からは、平成27年度より腎泌尿器外科学講座の堀 淳一先生（本学23期）が学位取得のための研究をするということで本講座/研究分野に加わりました。堀先生には、前立腺癌の抗ホルモン治療薬として広く使われているGnRH誘導体が下垂体に与える影響を、動物実験で明らかにしていただこうと考え、目下、ラットでの標本作成・解析に汗を流していただいています。臨床とは勝手が違い戸惑うことも多いかと思いますが、基礎的にも臨床的にも興味深い成果があがることを期待しております。

教育については、平成26年にバーチャルスライドシステムが病理学講座と解剖学講座の教育向上のために導入され、平成27年度の組織学実習から本格的に自己学習支援の目的で活用させていただいております。従来は顕微鏡実習室に夜遅くまで居残り顕微鏡に向かわなければ実習試験の試験勉強ができませんでしたが、今ではすべての組織標本の画像を高解像度で電子データ化し専用サーバーで公開していますので、学内であれば手元のPCやタブレットですべての組織標本を観察する

ことができます。ただ、いつでもどこでも標本を見れると思うと逆に実習時間内の観察がおろそかになる学生も増え、今年度の組織学実習の成績は出来不出来の格差が非常に広がってしまいました。しかし、いったん便利になった学習環境を再び以前の状態に戻すわけにもいかず、どうしたものか思案中です。いずれにせよ、今後も、必要に応じてフィードバックをかけながら、教育内容のブラッシュアップに努め、解剖学の分野でより質の高い教育を提供できるよう心がけていきたいと考えております。

生理学講座 自律機能分野（旧生理学第一講座）

講 師 **宮 津 基**

高井 章教授が2001年10月に名古屋から赴任して以来、はや14年の月日が流れました。時の経つこと、光陰矢のごとし、ただそのはやさに驚くばかりです。本講座の2015年10月現在、高井 章（教授）、宮津 基（講師）、竹谷浩介（助教）、金子智之（助教）、佐々木恵子（事務）の５人で力を合わせて、教育・研究・大学運営に携わっています。眼科所属の大学院生でありました石田美織さん（29期）が2015年５月に学位を取得されました。

教育に関して、第２学年の機能形態基礎医学・第３学年の生理学実習を担当しています。機能形態基礎医学では人体の正常構造と機能、それらの破綻によって生ずる疾患のなりたちを関連づけて理解させることを目標として、従来の生理学の植物機能に関する項目を分担しています。３年次以降の臨床医学科目の履修のために、本科目で学習することのすべてを基礎知識として修得させるべく奮闘しています。生理学実習では前年の「機能形態基礎医学」の講義で学んだ健康な人体機能のメカニズムについての理解を深めるため、複数の項目について学生自らが被験者となって実験を行い、生身の身体における動的な変化を数値的に捉え、教科書のみでは得られない立体的な知識の定着を図っています。高井教授は、医学科のみならず看護科の生理学の講義・実習も担当されております。

研究に関しては、高井教授の指導の下、宮津と、竹谷、金子の両助教らに加え学外の共同研究者らと、 ２つの主要な研究を展開しています。一つは、平滑筋収縮の分子機構に関する研究で、もう一つはプロテインホスファターゼ（PP）関する研究です。前者については①イオンチャネル、②収縮タンパク質、③*in vivo*評価系に焦点をしぼり研究を進めています。①については副交感神経の効果器である眼球毛様体筋の収縮に関与する、ある種の非選択性陽イオンチャネル（NSCC）の研究に長年取り組んでおり、単離毛様体平滑筋細胞を用いた電気生理学的実験により、ムスカリン様受容体刺激が２種のNSCCを開くことを明らかにしてきました。このCa^{2+}透過性チャネルは、血管平滑筋においてみられるような電位依存性のCa^{2+}チャネルとは異なり、脱分極刺激で活性化されることはありません。これらの分子実体に関してはＴＲＰチャネル群、あるいは、Orai1タンパク質がそのチャネルポアを形成すると考えられ、毛様体筋からそれらの遺伝子の発現をRT－PCR法にて確認し、免疫細胞蛍光法においても、それらタンパク質レベルの発現を毛様体にて確認しました。これらの研究については、現在、主に講師である宮津が担当しています。②については、アクチン－ミオシン収縮タンパク質、およびその調節系に注目した研究で、具体的にはモータータンパク質であるミオシンの調節軽鎖のリン酸化状態を定量的に解析しその調節系を探索するという研究です。これまで我々はモータータンパク質についてはその評価法を持ち合わせておりませんでした。助教の竹谷はミオシンモータータンパク質の専門家で、遠近調節を担う毛様体筋が持つ素早い収縮特性と持続性張力の発生機構の分子機構について現在解析を進めています。 ③につ

いては、マウスを使用した*in vivo*での平滑筋評価法の確立を目指した研究で、マウスの対光反射（瞳孔の収縮過程）を指標として平滑筋と、その支配神経の分子機構の解明を目指しています。現在、生理学研究所とのの共同実験により、２種類のTPPチャネルがノックアウトされたマウスの瞳孔径について助教の金子が研究を進められています。もう一つの主要テーマである、プロテインホスファターゼ（PP）関する研究については、①PP2A大量発現系の構築、②PP1の新規阻害作用を持つ天然毒素の探索、③オカダ酸とその誘導体による平滑筋張力増強または弛緩作用に関する研究などです。①については、大腸菌で発現させたPP2Aと阻害物質との共結晶のX線解析を目指したものですが、現在難航中です。②については北海道大学と共同研究を進めています。また、③は、眼科所属の石田美織が、ウシ毛様体筋収縮に対するオカダ酸と他のPP2A阻害剤の効果について詳らかに解析し学位を取得しました。

学会活動については、2015年９月５日(土)に、高井 章教授を当番幹事として第95回北海道医学大会の生理系分科会（日本生理学会北海道地方会）を本校の第５講義室で開催しました。また明年2016年３月22日(火)～24日(木)には高井 章教授を大会長として第93回日本生理学会大会が開催されます。

今後、本講座ではますます研究・教育を発展させるべく、皆で力を合わせ、他の講座の連携を深めながら、真摯な姿勢で日々邁進していきたいと考えています。また、研究に興味のある方は是非、お気軽に講座の方へお立ち寄りください。

生理学講座 神経機能分野（旧生理学第二講座）

教 授 **柏 柳 誠**

2003年12月に本学生理学第二講座（現生理学講座神経機能分野）を担当させていただいてから、12年が過ぎました。長く時間がかかりましたが、ようやく研究成果を複数発表できるようになり、2014年は６報の原著論文を掲載しました。また、2015年度は、４人のスタッフの中で３人が科研費を獲得して研究を行っています。現在、野口智宏講師、笹島仁助教と宮園貞治助教が私とともに教育・研究を担当しております。また、北海道医療大学歯学部の長田和実准教授と恐怖の脳内機構に関する共同研究を科研費の援助を受けて続けています。

2015年度の出来事として、私が日本味と匂学会会長に就任したことがあります。任期は３年間で、800名ほどの小さな学会ですが会長として運営にあたっています。2016年には、アメリカを中心としたAssociation for Chemoreception Sciences、ヨーロッパのEuropean Chemoreception Research Organizationおよび日本味と匂学会が３年おきに持ち回りで開催しているInternational Symposium on Olfaction and Taste（ISOT2016)が、６月に横浜で開催されます。この大会では、匂い受容体を発見してノーベル医学・生理学賞を受賞したBuck博士が講演します。ISOTは、嗅覚と味覚をテーマとして基礎および臨床の研究者が参加する大会で、私は組織委員およびプログラム委員として開催に向けて協力しています。諸先生の中で、嗅覚および味覚に興味をお持ちの方は、参加をご検討下さい。

昨年６月に学位を取得した宇津木千鶴君の研究は、2014年５月31日の北海道新聞でその内容が紹介されました。内容は、咀嚼が脳内の神経新生の変動を介し、嗅覚機能に影響するというものです。また、2014年10月23日には、宮園助教の研究成果が北海道新聞で紹介されました。医療大の長田准

教授との共同研究で、我々が同定した恐怖誘発物質（P－mix）のエゾシカへの作用に関するものです。長田先生は、P－mixの害獣忌避に重点をおいて研究を進めています。私たちは、P－mixが再現性よくマウスに恐怖行動を誘起する特徴を利用して、抗不安薬などの薬理作用の評価、および、ストレスの脳内機構の解明を目指して研究を進めています。マウスをモデル動物としてストレス・恐怖を研究する場合、不動や忌避などの行動の評価が一般的に用いられています。宮園助教は、ストレスにより交感神経が有意になる点に注目して、皮膚の血流量の低下を反映する皮膚表面温度を測定することにより、ストレスを定量的に評価できる方法を確立しました。本学病院で抗不安薬として一番多く処方されているエチゾラムを投与すると、P－mixによる皮膚表面温度の低下が抑制することを見いだし、現在論文を準備しています。

野口講師は、呼吸と嗅細胞の電気的な活動に関する研究を進めています。我々が匂いを嗅ぐときには、吸気中の匂い物質が嗅細胞で受容されることが必須です。受動的に匂いを嗅ぐ状況とより積極的に匂いを嗅ぐ状況では、呼吸のリズムが変わります。このような異なる状況で、嗅細胞がどのように情報を伝えているかを解析しています。笹島助教は、パーキンソン病の発症の因子の一つであり、農薬として広く使用されているロテノンのドーパミン作動性神経に対する毒性誘起機構を明らかにした成果を報告しました。

生化学講座 細胞制御科学分野（旧生化学第一講座）

助 教 **宇和田 淳 介**

生化学講座（細胞制御科学分野、旧生化学第一講座）は、谷口隆信教授の下、加藤剛志准教授、矢澤隆志講師、宇和田淳介助教、角田聡子秘書の５人のスタッフと、留学生のMd. Taliqul Islam君（博士課程）を加えた６人で研究・教育に当たっています。

谷口は会議・講義等で多忙な日々を送りながらも、研究活動に精力的取り組んでおります。近年の研究では、炎症性腸疾患の病態を形成する仕組みとしてチロシンキナーゼ（focal adhesion kinase）の関与を明らかにしました。更に現在は、コリン伝達系による保護的作用に焦点を当てており、炎症性腸疾患の診断・治療に向け研究を発展させるべく奮闘しています。

加藤は、長年続けてきた平滑筋ミオシンの必須軽鎖の機能解析の研究をさらに発展させ、生化学的手法に加えてロータリーシャドウー電子顕微鏡法、バイオインフォマティックス解析などを駆使してミオシンⅡのOFF構造形成に関与する機能部位の解析を進めています。

矢澤は、谷口と共にニコチンの炎症性腸疾患に対する薬理作用を解析する研究に加え、当大学着任以前からの研究テーマである、幹細胞からのステロイドホルモン産生細胞の分化誘導と転写制御を中心とした内分泌学研究を推進しており、精力的に論文を発表しています。

宇和田は、平成26年12月に本学に着任した新顔になります。前任地である福井大学では、ムスカリン性アセチルコリン受容体の分子生物学的研究をテーマとしていました。当講座では、これまでの研究を継続しつつ、その知識・経験を活かしてムスカリン受容体の炎症性腸疾患との関わりについて研究を進めています。

昨年まで当講座に在籍していたバングラディッシュからの留学生Md. Rafiqul Islam Kahn君は、筆頭著者として３報の論文を発表するなど非常に優秀な業績を残し、無事学位を取得して帰国しました。彼の研究テーマであったコリン伝達系と腸上皮バリア機能の関係については、Khan君と同郷のMd. Taliqul Islam君に引き継がれました。故郷とは気候を含め大きく異なる北海道旭川という環境で慣れない面も多かったようですが、彼も２年目を迎えました。Khan君と同様、Taliqul君も勉学と研究に努力し、研究者として成長してくれるよう期待しています。

角田は当講座の事務的な仕事を一手に引き受けています。講座の円滑な運営はその活躍に負うところが大であり、おかげで教室員が各自の教育・研究活動に集中して取り組めています。

以上のように、当講座では様々なバックグラウンドを持った研究者が集まっています。勿論、それぞれが全くバラバラに研究を進めているということではなく、現在は谷口の推進する炎症性腸疾患の分子メカニズムの解明を一つの柱として、お互いの持ち味を活かしながら研究を進めています。これは、学際的な研究が求められる昨今、良い傾向にあると言えるでしょう。これからも教室が一体となって、枠にとらわれない真に独創的な研究を目指します。当教室の研究に興味のある方は、是非ご連絡をお願い致します。

当講座では、この１年で構成員の変化があり、教室の雰囲気も変わってきました。研究テーマも発展的に移り変わっています。一方で、このようなソフト的側面と比較すると、研究設備などのハード面の変化というものは大分遅いようです。実験室にある備品を見てみますと、新しいものと古いものが混在しており、30年近く昔の、先代の藤澤教授時代に購入された測定機械などもあります。その中には今でも現役で活躍しているものもあれば、研究テーマの変遷に伴いほとんど使われなくなったものもあります。先日、長い間使用されていなかった測定機器を起動する機会がありました。スイッチを押し、しばらくして内蔵モニターに表示されたメニュー画面には、現在の日付と、ほぼ狂いのない時間が刻まれていました。私はそれ見て、この機械の健気さと往時の活躍を思い、当時この機械を使っていた方々のことを考え、不思議な感慨を抱きました。研究室は現在と過去の研究の歴史が混じり合った、ある意味ではタイムマシンといえるのかも知れません。当講座のOBの方が訪問されたに際は、きっとそのような目線で研究室を眺め、昔日に思いを馳せ、感慨を新たにされるのだと思います。

最後に、当講座は大学の最上階（８階）の廊下の突き当たりに位置することから、晴れた日には旭岳や十勝岳など大雪山系に連なる山々の絶景を教室の窓から眺めることができます。まさに一大パノラマといえる雄大な景色です。この素晴らしい眺望もまた、悠久の時の流れを感じさせてくれる我々の財産といえましょう。このような壮大な景色と、当講座の築いてきた歴史を背景に、これからも教室員一同で教育・研究に尽力して参りたいと存じます。

生化学講座 機能分子科学分野（旧生化学第二講座）

教授 **鈴　木　　裕**

生化学第二講座は昭和52年に開設され、同年12月金澤徹教授の就任によって開講された。金澤教授は平成11年３月で定年退職され、同年４月１日、本学名誉教授の称号を授与された。同年８月１日鈴木裕助教授が本講座の教授に就任した。平成19年４月より大講座となり、生化学講座機能分子科学分野と改称された。現在の在籍者は、教授・鈴木裕、准教授・大保貴嗣、講師・山崎和生、研究員・Danko Stefania、助教・加藤早苗、事務・中田規和子である。

開講後、本講座職員として在籍し教育・研究に貢献された方々は重川宗一、高桑雄一、桑山秀人、山口基徳、方波見文雄、大宮博士、上堂地美佳、加藤早苗の各氏であり、現在もそれぞれの立場で活躍されている。また現在までに多くの本学卒業生が本講座で研究に取組み、学位を取得している。大学院生として本講座で研究し博士号を取得された各氏は、稲尾茂則（4期、整形外科学講座より）、原久人（5期、内科学第三講座より）、小原充裕（6期、外科学第二講座より）、川島哲也（8期、内科学第三講座より）、久保光司（8期、内科学第三講座より）、久保田達也（9期、内科学第三講座より）、山縣一夫（11期、内科学第三講座より）、中村哲史（12期、皮膚科学講座より）、木村圭介（14期、内科学第三講座より）、齋野朝幸（13期、本講座、現在岩手医科大学解剖学第二講座准教授）、

佐藤克彦（19期、皮膚科学講座より）、王国麗（国費留学生、中国医科大学からの留学生、現在中国医科大学）、劉暁宇（中国医科大学からの留学生、現在大連医科大学）、宮内勇貴（国内留学生、皮膚科より）、吉田雅紀（国内留学生）である。大宮博士氏（4期）は本講座の助手として勤務され博士号を取得された。各氏の成果は、全て生化学領域の代表的国際学術雑誌（J.Biol.Chem.等）に発表されており、生命科学の発展に重要な貢献を果たしている。

本講座では、開講以来Ca^{2+}ポンプをその代表的メンバーとする『Ｐ型カチオン輸送ATPase』の分子作動機構について研究を進めている。現在ではその基礎研究成果に基づき細胞Ca^{2+}代謝異常と病態にも研究を発展させている。細胞膜や小胞体膜に存在するCa^{2+}ポンプは、ATPを分解して取り出したエネルギーを利用して細胞質Ca^{2+}を細胞外や小胞体内腔に汲み上げることにより、Ca^{2+}による細胞機能調節、Ca^{2+}シグナル形成、新規合成蛋白の修飾や細胞内輸送など、小胞体機能や様々な細胞の営み・生存に基本的役割を果たしている。Ca^{2+}ポンプの仲間にはNa^{+}/K^{+}ポンプや胃酸分泌を担うH^{+}/K^{+}ポンプ、ゴルジ体Ca^{2+}/Mn^{2+}ポンプなどがありそれぞれ特異的なカチオンの輸送を行っている。本講座ではCa^{2+}ポンプを中心としたこれらポンプがどのような仕組みで作動して細胞のイオン環境を制御するか、そしてポンプ遺伝子異常がどのような異常をどのような機序で蛋白の発現と機能にもたらすかを明らかにし、さらにCa^{2+}代謝異常による癌化、筋弛緩障害、異常角化（細胞間接着障害）、精神障害、感覚器官障害など様々の重篤な病態の発症機序を分子レベルから理解することを目標としている。Ca^{2+}ポンプのエネルギー変換機序に関する我々の業績は生化学の代表的国際誌の表紙を飾り、Nature, Science, J.Biol.Chem.などにも多数引用されている。また、遺伝子異常による病態細胞分化異常に関する本学皮膚科学講座とのポンプ分子レベルの解析成果は日本研究皮膚科学会のプレナリーレクチャーに選出されるなど臨床面からも高い評価を受けている。鈴木は、2006年６月に『Ｐ型カチオン輸送ATPaseとその異常による病態；*Molecular Mechanism and Regulation in Cation Transport ATPases and Related Genetic Diseases*』をテーマとして京都で国際会議（学術振興会助成事業・国際研究集会）を主催、2011年９月には米国CAでハーバード大学・MGH；Sweadner教授と共に３年に一度の300人規模の国際会議*ASBMB "International ATPase Conference（13th）"*を主催、そして*同Conference（15th）*を2017年９月に日本で主催する（共催者；東大・分生研；豊島近教授・小川治夫准教授）。これらは日本が当該領域の世界の研究拠点として今後もその役割を果たしていくべきことを明示している。すべては初代・金沢徹先生の研究者としての精神を引き継ぎ、地道に研究を展開し続けた成果であり、また大保氏、山崎氏、Danko Stefaniaの高い学識と研究能力、そして努力の賜物である。今後も各氏の研究者としての卓越した個性を活かしながら、地道に研究を続けることにより本分野を発展させていきたいと考えています。

薬理学講座

准教授 **結　城　幸　一**

現在、薬理学講座は、牛首文隆（教授）、結城幸一（准教授）、柏木仁（助教）、今道力敬（助教）の４名で構成されている。また、高畑治（麻酔・蘇生学講座准教授）、藤野貴行（内科学講座助教）、粂井志麻（総合診療部医員）が、これに加わり日々研究に励んでいる。また、高島由紀子（事務補助員）、友成由美（実験補助員）、大久保知子（実験補助員）、渡辺美江（実験補助員）が講座の教育・研究活動を支えてくれている。一方、2014年３月

まで助教であった小島史章は、同年４月に北里大学医療衛生学部准教授となり赴任していった。後任として、今道力敬が2015年４月に福井大学医学部から赴任してきた。本講座の主たる研究テーマは、「プロスタノイドの生理的・病態生理的役割の解明」である。プロスタノイドは、生理的に活性な５種類で構成され、その受容体は、８種類存在する。しかし、各プロスタノイド受容体に対する特異的なアゴニストやアンタゴニストは殆どなく、プロスタノイドの有する生理的・病態生理的役割については、これまで不明な点が多かった。これらの役割を解明する目的で、当講座では、プロスタノイド受容体欠損マウスを用いた解析を行っている。その研究対象は、心臓、腎臓、血管、血小板、脳、肝臓など様々な臓器に渡る。例えば、心臓や脳の虚血障害、腎障害、心血管リモデリング、炎症性頻脈、肝切除後の肝再生、血小板凝集において、どの種のプロスタノイドがどのような役割を演じているかを解明すべく、精力的に検討を進めている。こうしたなか、次々と新しい知見が得られ、論文が権威ある国際誌に掲載されている。

教育活動については、医学科２年生、看護学科２年生を対象に薬理学の講義を行っている。また、医学科３年生を対象とした薬理学実習では、教室員が一丸となり、摘出臓器や個体など複数の系を用いた主要５項目の実験を通じて、学生に薬物投与法、薬効の評価法、データのまとめ方などを重点的に指導している。さらに、医学科３，４年生を対象とした医学英語では、薬理学に関連した医学英語論文の読み方やその内容を理解させ、医学英語に慣れさせるよう指導を行っている。

これまで、学内をはじめ国内外より大学院生を受け入れてきた（岡田優二、肖春陽、馬紅、山田武宏、高山浩二、栗山周子、細木弥生、李暁正、金井麻子、菅野貴康、粂井志麻）。なかなかうまくいかないことも多かったが努力を重ねた結果、学位を取得しそれぞれの分野で活躍している。牛首教授が、平成10年10月に着任されてから18年目、私が赴任してから16年目を迎えている。この間、様々な分野の方々と交流する機会に恵まれ、各分野でどんな疾患が問題になっているのか議論することができた。今後、種々の疾患の原因解明やその治療薬の開発を目指して、より充実した教育・研究活動を展開していきたいと考えている。

病理学講座 腫瘍病理分野（旧病理学第一講座）

学内講師 **山 本 雅 大**

2015年10月現在、病理学講座腫瘍病理分野は、西川祐司（教授）、山本雅大（学内講師）、藤井清永（助教）、大塩貴子（助教）の４名のスタッフと大学院４年の辛氷、大学院１年の金澤悠太、外科学講座消化器病態外科学分野からの研究生の渡邉賢二、技術補佐員の岡田陽子、秘書の千葉弘子の合計８名からなっています。

前回（2013年）の教室紹介からの２年間を振り返りたいと思います。

まず、６年間にわたり当教室の秘書を勤めていた山富えまさんが2014年３月に退職いたしました。山富さんは大胆かつ几帳面な仕事ぶりで、教室の事務を一手に引き受けてくれていました。新しい職場での山富さんの今後の益々のご活躍を祈念いたします。2014年４月より、千葉弘子さんが秘書として教室に加わり、企業で勤めた経験を生かし教室事務を円滑に進めてくれています。

2012年３月まで大塚製薬藤井記念研究所から来て当教室に研究生として在籍していた永濵康晴さんの論文が2014年７月にAmerican Journal of Pathologyに受理され、永濵さんは無事に博士（医学）の学位を取得することができました。西川教授の長年のテーマの肝細胞から胆管への分化転換を慢性肝傷害下にin vivoで証明した重要な仕事となりました。また、永濵さんは、長年お付き合いされていた女性と入籍し、９月には披露宴の運びとなりました。末長くお幸せに。

結婚といえば。腫瘍病理に出入りしていた現在研修医１年目の松尾康博さんと本学６年生の松尾（旧姓小松）美貴子さんが、（おそらく）腫瘍病理で育んだ愛を実らせ、この夏に結婚されました。おめでとうございます。

中国の医科大学を卒業し大学院生として５年近く当教室で研究してきた陳錫さんの論文が2015年４月にCancer Scienceに受理され、同年９月に博士（医学）の学位を授与され中国に帰国しました。日本に来た当初はたどたどしい（それはそれで可愛らしかったのですが）日本語でしたが、学位論文審査の時には日本語で発表し、質疑応答も行いました。陳さんの研究は、肝硬変を経て発癌するマウス肝発癌モデルと肝硬変を経ずに発癌するモデルそれぞれの遺伝子発現プロファイルを比較し、特徴的な発現を示す遺伝子を見出したとてもユニークな仕事です。陳さんは膨大な定量的PCRを根気よく行い、信頼度の高い研究成果を出すことができました。陳さんはPCRなどの細かい作業が上手なだけでなく、視力が並外れてよいため、マウスの総胆管にインクを注入する神業を使って傷害肝での胆管の走行を可視化することに成功し、前述の永濵さんの研究に重要な貢献をしてくれました。帰国後は、研修医としてトレーニングを開始しています。

2014年３月に本学を卒業した金澤悠太先生が新入局員として加わりました。金澤先生は１年間名寄市立病院でローテーションをした後、初期研修２年目の現在は旭川医科大学病院病理部で三代川斉之、武井英博両教授から指導を受けながら、外科病理の研鑽を積んでおります。2015年10月に大学院医学研究科に入学し、2016年４月より当講座で本格的に研究を開始します。実に山本以来14年ぶりの病理プロパーの入局者で、全員の期待を一身に背負って大活躍してくれることと思います。

また、2015年４月より、外科学講座消化器病態外科学分野より渡邉賢二先生が加わりました。渡邉先生は、陳さんの仕事を引き継ぎ、培養細胞を使って肝腫瘍の研究をスタートさせ、現在大量の培養細胞と奮闘中です。最近は、渡邉先生に用事があるときは、細胞培養室を探すようにしています。

山本は辛さんとSleeping Beautyトランスポゾンを使ってさまざまな癌遺伝子を導入する肝腫瘍モデルを使い、誘発された腫瘍の表現型を調べております。藤井先生は専門のプロテオームの技術を用いて、陳錫さんの研究に用いた２つのマウスモデルや前述した山本と辛の癌遺伝子導入モデルで肝腫瘍の代謝状態の網羅的解析を行っており、興味深いデータが出てきております。大塩先生は、MKK7ノックアウトマウスを用い、JNKシグナルの肝傷害からの修復における役割について検討しております。MKK7ノックアウトマウスから肝細胞を分離し、西川教授が長年行ってきたcollagen gel cultureを用いた形態形成モデルで検討しており、示唆に富む結果が得られています。初めは各々別のテーマで研究を始めておりましたが、最近は互いの技術やデータを使って研究が進みはじめ、それぞれのテーマが有機的に結びついてきているのを感じ、今後の研究成果が大いに期待されます。

教育関係では、実習室が改修され、2014年４月より新しい実習室で病理学実習が行われています。以前は、蒸し暑い中、窓を開け扇風機を回しながら，顕微鏡を覗いてもらっていましたが、現在は空調の効いた快適な環境での実習が可能になりました。実習室の改修に伴いまして、バーチャルスライドが導入されました。ガラス標本全体をスキャンしてハードディスクに取り込み，あたかも顕微鏡を覗いているようにパソコン画面上で視野の拡大や移動が行えます。退色や枚数不足などのガラス標本の限界を解決してくれました。教育的症例や希少症例などさまざまな病理標本をバーチャルスライド化し、更に教育に役立てていきたいと思っております。

2013年12月６日、教室の先輩である本学１期生の安藤政克先生（当時旭川赤十字病院病理部長）が逝去されました。先生には講義、実習などで長くお世話になりました。いつも教室を暖かく見守って下った先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

写真は陳さんの送別会の時に撮影したものです（2015年６月24日）。左上より、金澤、渡邉、岡田、辛、千葉、藤井、左下より、山富、大塩、西川、陳、山本（敬称略）です。

以上、２年間の教室の歩みを簡潔に記しました。次回の

原稿を書く頃には、更に発展した腫瘍病理の姿をお伝えできればと思います。

病理学講座 免疫病理分野『免疫病理分野の現在』（旧病理学第二講座）

講 師 **青 木 直 子**
（第16期生）

病理学講座免疫病理分野（旧病理学第２講座）は、2011年７月に小林博也教授（13期）が就任されてから４年が経過したところである。大学院生の卒業や入学にともなってこの２年で教室員の構成はずいぶん変わり、現在は小林教授のもと、青木直子講師（16期）、熊井琢美助教（31期・留学中）、大栗敬幸助教、小坂　朱助教、松本利恵技官のスタッフ６名で運営されている。大学院生は石橋佳先生（救急部・31期）、大原賢三先生（耳鼻咽喉科・30期），平田　結先生（耳鼻咽喉科・32期）が日夜研究にいそしんでいる。さらに免疫病理OBでもある長門利純先生（耳鼻咽喉科・32期）が共同で研究を行っている。長年当講座にご尽力いただいた看護学講座の木村昭治教授は三月に御定年を迎えられた。当講座講師であった及川賢輔先生（17期）が木村教授のご後任として４月より看護学講座の教授に就任されている。当教室の主な担当内容について紹介する。

【講義・実習】平成25年度に担当している講義・実習は，分担を含めて組織学（医学科２年・前期：病理学序論・炎症総論），免疫学（医学科２年・前期），免疫学実習（医学科２年・前期：マウス皮膚移植など），機能形態基礎医学（医学科２年・後期：呼吸器、循環器、腎・泌尿器、性器、感染症、血液疾患），腫瘍学Ⅰ（医学科３年後期）、病理学実習（医学科３年・前期：腎、循環器、呼吸器、女性性器、乳腺、男性性器、血液）、医学英語Ⅳ／医学研究特論（医学科３・４年），基礎医学特論（医学科２年・後期），臨床実習選択（医学科６年・病理）、選択必修コース「EBM・CPCコース」（医学科４年・後期）である。

【病理解剖・CPC・病理診断】大学病院の病理解剖は、腫瘍病理分野と大学病院病理部の３部門で担当している。大学病院全体では、年間30件ほどの解剖があり，初期研修医のCPCレポート作成指導および年間６回ほど行われる臨床病理検討会（CPC）を分担している。また、道北、道東エリアの基幹病院の病理解剖，初期研修医のCPCレポート作成指導も担当している。主な担当病院は、北見赤十字病院、旭川厚生病院、名寄市立病院、遠軽厚生病院、滝川市立病院である。診断病理については、上記基幹関連病院の病理検体の診断を行い、年間約8000件の実績がある。北見赤十字病院・名寄市立病院については、テレパソロジーによる迅速病理の遠隔診断も行っている。

【研究】主として小林教授の指導による癌免疫に関する研究が当教室の主軸をなしている。当教室に新たに加わった新進気鋭の研究者である大栗・小坂は免疫機能制御を介した癌免疫療法の開発を研究テーマとしている。様々な種類のがんで、免疫抑制細胞の存在率と、がんの進行度や予後に相関関係があることが報告されている。担がん状態で誘導される免疫抑制を解除すると共に、免疫細胞を活性化するシグナルを組み合わせることにより、より安価で簡便、かつ効果的な抗腫瘍効果をもたらす方法の開発を目指して

いる。大学院生として二年が経過した石橋は、悪性腫瘍の多くに発現し，その免疫逃避に関与すると言われているHLA－G分子を標的とした免疫療法の確立を目指している。特異的ヘルパーT細胞を誘導し得るペプチドエピトープの同定と，DNAメチル化阻害薬による特異的ヘルパーT細胞の抗腫瘍活性の増強効果の検討を行っているところである。大学院１年目の大原はエピジェネティックな修飾を受けた癌抑制遺伝子p53を特異的に認識するヘルパーT細胞の研究をしている。癌細胞には正常細胞では生じない癌特異的な翻訳後修飾が展開されるため、その修飾ポイントをターゲットにし、様々な癌腫へ対応可能な免疫療法につなげるのが目的である。同じく大学院１年目の平田は免疫チェックポイントであるPD－1/PD－L1経路に着目し、腫瘍細胞の免疫逃避機構について研究を行っている。PD－L1由来のHLA class II拘束性エピトープペプチドを同定するとともに、健常人ヒト末梢血単核球よりPD－L1ペプチド特異的ヘルパーT細胞クローンの樹立、樹立したヘルパーT細胞クローンによる頭頸部扁平上皮癌細胞株への反応性について検討中である。耳鼻科からの大学院生とともに、共同で実験している長門先生（耳鼻科）は超免疫不全マウスを用いてNKリンパ腫の解析を行っている。

癌免疫以外についての研究も行っており、青木は自然免疫で重要な分子であるDAP12会合分子の一つであるMDL－1について、ヒト肉芽腫疾患における機能を検討中である。また神経病理の分野においては看護学講座の及川教授がライフワークであるNeuronal Calcium Sensor protein familyに属する細胞内カルシウムセンサー蛋白質の一つであるHPCAL－1の機能解析をおこなっている。

最後に留学中の熊井より、以下のような充実した近況報告が届いている。「ご無沙汰しております、30期の熊井です。小林教授と原渕教授の御高配を賜り米国ジョージア州立大学の癌研究所に留学させて頂き、はや二年目となりました。研究所があるオーガスタは福岡ほどの緯度に位置しているので、旭川とは打って変わって雪をほとんど見ずに季節が過ぎていきます。思えば雪を見ずに冬が来る年を過ごしたことがなかったので、こちらに来てもう一年半も経過したという実感はあまりなく、いまだに長い秋の中でひたすら実験しているような錯覚に陥ります。

こちらではペプチドワクチンを中心とした癌免疫治療の基盤研究を行っています。どの悪性腫瘍にも応用可能なストラテジーを目指していますので、本学発の新規癌免疫治療に向けて色々な方面でコラボレーションさせて頂ければ幸いです。これらの知識を生かした自己免疫モデルの開発やアレルギー疾患治療への応用と夢は膨らむばかりですが、膨らませた夢に少しでもリアリティを見いだして患者や皆様のお役に立てるよう、もう暫しの間こちらで精進して参ります。」

以上，当講座の担当する講義・実習，病理診断，研究の現況について報告させていただいた。

微生物学講座

助教 **松 田 泰 幸**

当講座は、若宮伸隆教授のもと、大谷克城准教授、森健一郎助教、松田泰幸助教、技術補助員の石井育子、大谷雅江、栗栖郁子、岡本眞由美、太田麻美、曳地奈穂子、事務補助員の松村勝芳、福井智美、韓国からの留学生ファン・インス、バングラディッシュからの留学生ロイ・ニタイ・チャンドラの14名が在籍しています。

当研究室では若宮教授らが発見したコレクチン３遺伝子（CL－L1、CL－P1、CL－K1）について機能解析を行っています。コレクチンは、自然免疫分子として機能し、侵入してきた感染菌の除去に関与すると考えられています。また近年、顔貌異常を特徴とした様々な発生学的異常を示す3MC症候群というヒトの病気に、我々が発見したコレクチンCL－K1が関与していることが報告され、コレクチンが形態形成分子としても機能することが明らかになりつつあります。CL－L1は細胞質局在タンパク質として発見された分子ですが、ヒトの血液中にも存在しており、コレクチンCL－K1と複合体を形成していることがわかってきました。また、CL－L1/CL－K1複合体は、血中において補体や形態形成に関連するプロテアーゼと相互作用していることがわかってきました。現在、分子生物学的および細胞生物学的な手法を駆使してCL－L1/CL－K1複合体の機能解析を進めています。CL－K1については、CL－K1ノックアウトマウスを利用した*in vivo*研究により、CL－K1の自然免疫分子および形態形成分子としての機能を明らかにしようとしています。現在、北海道大学遺伝子病制御研究所との共同研究によりCL－K1ノックアウトマウスの形態観察を行っており、CL－K1欠損による形態形成の異常の有無を調べています。また、自然免疫分子としての機能解析も進めています。CL－P1はノックアウトマウスが誕生しないことから、発生段階において重要な役割を担っていることが明らかになり、胎生致死の機序解明を試みています。また、最近、CL－P1は急性期タンパク質であるCRPと相互作用し、補体系を活性化することがわかってきました。以上のように、当研究室ではコレクチンの自然免疫分子および形態形成分子としての機能を解明すべく、様々な手法を駆使して幅広く研究を展開しています。

平成19年から始まった文部科学省知的クラスター創生事業さっぽろバイオクラスターBio－Sでは「抗酸化作用を持つ機能性素材の開発」をテーマとして、７年間取り組んでまいりました。平成21年８月に「抗酸化機能分析研究センター」が大学の許可を得て微生物学講座内に設立されました。抗酸化機能を持つポリフェノールに着目し、これまで北海道で食される農作物素材に関して解析し、その抗酸化機能を「食品素材抗酸化データベース」 http://food－db.asahikawa－med.ac.jp で公開しています。現在もデータの更新を行っており、生産者から消費者まで様々な立場の方々にご利用していただいております。さらに、平成24年度からは、地域イノベーション戦略推進事業として、さらなる展開をはかり、抗酸化機能分析研究センターは２つの新たな局面を迎えています。一つは、ヒト臨床試験です。北海道で生産された農作物や海産物の加工品で、既に一定の販売実績と食経験があるものを選択し、旭川リハビリテーション病院の協力の下、ボランティアに摂取していただき、食品の健康への有効性を臨床レベルで検証するというものです。北海道は独自の食品認定制度として「北海道食品機能性表示制度」をスタートしたこともあり、ヒト試験の必要性から注目も高まっています。もう一つは、食育への展開です。北海道教育大学旭川校と連携し、上記のデータベースを生かして、北海道産素材の抗酸化機能に着目した、食事メニューの提案などを通じて、地域に食育を展開していくというものです。将来的に、素材ライブラリー、データベース、臨床試験、食育という食料学の拠点となる「食と健康総合研究センター」を構築することで、地域住民の健康増進に寄与していきたいと考えています。

毎週水曜日に開催される教室セミナーでは、医学科の選択科目である、医学英語／微生物と基礎医学研究／微生物学とリンクし、微生物学・免疫学の枠にとらわれない、生命科学全般にわたる論文抄読を行っています。また、学部生や大学院生、当教室員、共同研究者、外部研究者が参加してそれぞれの研究テーマに関する研究討論も毎回行っています。これからも、医学科第３学年、第４学年の学生のみならず、多くの学生が最新の生命科学論文や研究に触れられる機会を設けていきたいと考えています。

講座設立当初から在籍されていた先生方が移動、退職され、現在微生物学講座は若宮教授を中心に、新たなスタッフで講座運営を行っています。先代の東匡伸名誉教授から続く微生物学講座の伝

統を守り、さらにBasic Scienceを世界に発信するという理念を忘れることなく、研究・教育に臨んでいきたいとスタッフ一同考えています。

大学創立40周年の今年、各年代の卒業生もそれぞれの場でご活躍の事と思います。

旭川医科大学と同窓生一同の益々の発展を祈念して、微生物学講座紹介の結びといたします。

健康科学講座

地域保健疫学分野　教 授　**西　條　泰　明**
（第14期生）

本講座は、平成15年４月に衛生学講座（現人間環境保健分野）および公衆衛生学講座（現地域保健疫学分野）を統合、大講座制へ移行に伴い健康科学講座として発足しています。担当する分野は、従来の公衆衛生・衛生学から、疫学・臨床疫学、地域医療問題、産業医学など多岐にわたります。

本講座の母体となった公衆衛生学講座は、金沢大学医学部助教授であった福山裕三先生（現旭川医科大学名誉教授）が土井陸雄助教授（横浜市立大学名誉教授）とともに開講され、本学卒業生を中心に多くの保健所医師を研究生として受け入れ、北海道の疾病に関する疫学研究と健康教育の効果に関する研究に取り組まれました。一方、衛生学教室は河原林忠男先生（平成15年にご逝去）が初代教授として寺山和幸講師（現名寄市立大学教授）とともに開講され、室内空気感染等の研究活動に従事されました。次いで、昭和58年に札幌医科大学助教授であった山村晃太郎先生（平成20年にご逝去）が就任されました。山村教授は騒音の生体影響を中心とした研究に従事され、本学を卒業した多くの医師の学位取得に関わり、本学に貢献されました。その後、平成10年に北海道大学医学部から公衆衛生学講座教授として羽田 明先生、次いで平成12年１月に現在の吉田貴彦教授が東海大学医学部より赴任しています。羽田先生は平成14年に千葉大学公衆衛生学講座教授として移動されましたが、その後、平成15年４月に衛生学講座と公衆衛生学講座が大講座に移行し、健康科学講座として活動を開始しました。その後、当講座は吉田教授のみとなっておりましたが、平成21年９月10日より、西條が准教授から地域保健疫学分野教授に昇任にして、当講座は人間環境保健分野との２分野体制になっています。

現在のスタッフは人間環境保健分野に吉田教授、杉岡良彦講師、中木良彦助教の４人と、地域保健疫学分野に西條（第14期）と吉岡英治准教授、川西康之助教の３人となっており、以上のメンバーで衛生・公衆衛生学領域の教育・研究に従事しています。その他、社会人大学院生に稲積圭一（北都保健福祉専門学校）、田端一基（第19期：旭川圭泉会病院）、大学院生に岡崎秀人が所属し、非常勤事務職員の菊池めぐみが加わります。また、非常勤講師には佐藤広和先生（第７期：札幌鉄道病院健康管理部医学適性科主任医長）には産業医学、山口 亮先生（第10期：釧路保健所）に感染症対策、杉澤孝久先生（第11期：旭川市保健所）に保健所の役割を中心に、それぞれの専門を生かして衛生・公衆衛生学講義を担当していただいています。

本講座の研究としては、毒性学について、砒素曝露の中国でのフィールド調査や、小児の微量金属曝露調査、さらに動物実験による砒素発癌メカニズム研究、ナノマテリアルの免疫毒性研究を行っています。また、シックハウス・シックビルディング症候群、化学物質過敏症については、動物へのホルムアルデヒド曝露の影響といった実験室レベルの研究から、一般居住者の曝露や自覚症状について疫学調査も行っています。さらに、環境省「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」について、当大学の産婦人科学講座や小児科学講座と共に、市内の産婦人科・小児科の医療機関のご協力を得て旭川地区の担当をしています。臨床講座・医療機関と連携した臨床疫学研究を行っており、大学における倫理指針・利益相反についても対応しております。職域での循環器疾患の疫学研究、職業ストレスやメンタルヘルス、自殺予防のための研究小児の環境曝露に関する疫学調査、地域医療、機能性食品、ヘルスツーリズムなど多岐にわたる研究を行っています。

その他の活動としては、JICA地域別研修「アフリカ地域 地域保健担当官のための保健行政」を吉田教授が中心として行っています。

最近の学会開催については、平成27年度日本産業衛生学会地方会（H27.10.17、会長：吉田、写真参照）を開催し、第67会北海道公衆衛生学会（H27.11.21、会長：西條）と第86回日本衛生学会学術総会（H28.5.11-13、会長：吉田）が開催予定となっています。

寄生虫学講座

教 授 **迫　　康 仁**

2013年５月より本学寄生虫学講座を担当させていただいてから２年が過ぎました。その間、助教の柳田哲矢先生が2014年３月に山口大学共同獣医学部寄生虫学分野の准教授として異動されました。また、その後任として、JT生命誌研究館（大阪）の研究生であった佐々木瑞希先生が2014年５月に着任されました。さらに、2011年に大学院を修了し、学位取得後カメルーンに帰国されていたウカウア　アガサ先生（医学薬用植物研究センター）が日本学術振興会外国人特別研究員として2014年４月から２年間の予定で本講座に在籍しています。2015年10月現在の講座構成員は、迫 康仁、中尾 稔（准教授）、佐々木瑞希（助教）、伊藤 亮（客員・名誉教授）、ウカウア　アガサ（外国人研究員）ならびに酒井まゆみ（事務補助員）の６名です。

教育に関しては、第２学年の免疫学（分担）、免疫学実習（分担）ならびに寄生虫学、第３学年の寄生虫学実習ならびに医学英語、第４学年の医学英語を担当しています。特に寄生虫感染症は、現在の日本では大変稀な疾病と思われがちですが、昨今のグローバル化に伴ったヒトの移動による「寄生虫疾患の流行地（主に低所得国）から先進国への病原体の流入、あるいは、流行国内での病原体の拡散」が問題となっております。この様な状況を学生に理解させた上で、寄生虫という特異な生き物が引き起こす疾患の知識を修得できるように奮闘しています。

研究に関しては、①北半球に分布し、日本では北海道の風土病として今日も毎年20名前後の新規患者が報告されている多包性エキノコックス症、②全世界、特に牧羊地域に後発し、日本では輸入感染症として知られている単包性エキノコックス症、③エキノコックスに近縁のテニア条虫が引き起こす疾患であるテニア症・嚢虫症を研究標的としています。エキノコックスの幼虫（包虫）は主に肝臓に寄生し、重い肝機能障害を引き起こします。一方、テニア条虫の幼虫（嚢虫）は、筋肉、皮下、脳に寄生します。特に嚢虫が脳に寄生することにより惹起される脳嚢虫症は、WHOが「毎年少なくとも５万人が死亡している」と報告している疾患です。これらの寄生虫感染症は、十分な衛生環境（上水道、下水道の完備）が確保困難な経済的発展途上国を中心に地球規模で蔓延しています。また、慢性疾患であり、致死率がそれほど高くないため、世界からあまり関心が向けられず十分な対策がとられて来なかった「顧みられない熱帯病」でもあります。

我々は、この10年以上、これら寄生虫感染症の撲滅を最終目標とし、多くの海外研究機関と共同研究を行っております。主に、①ヒトならびに家畜の血清検査法の開発、②寄生虫DNAの検出法ならびにそれを用いた鑑別同定法の開発、③開発した検査法を用いた流行地域の調査ならびに感染伝播動態の解析、④各地に分布する寄生虫の遺伝的多様性の解明、⑤寄生虫の持続寄生機構の解明などの研究に取組んでいます。特に、多包性ならびに単包性エキノコックス症および嚢虫症に対する血清検査法に関しましては、産官学連携事業として、文部科学省「橋渡し研究支援推進プログラ

ム」事業（北海道臨床開発機構）ならびに「JSTアジア・アフリカ科学技術協力の戦略的推進」事業のサポートを受け、イオンクロマトグラフィー法を基にした簡便で迅速な検査キットをアドテック株式会社（大分）と共同開発することが出来ました。さらに、これらの検査キットは2012年２月から研究用試薬として株式会社ICST（埼玉）よりADAMUシリーズとして上市されております。DNA検査法に関しましては、一般的な核酸増幅検査法であるPCR法を用いた検査法が既に報告されていましたが、それを用いた検査を実施するには高価な機器が必要であり、寄生虫感染症が蔓延している流行地域では導入が困難でした。そこで、高価な研究設備が無くても実施可能であるLAMP法を基にした核酸増幅検査法を開発し、その核酸増幅に必要な温度を保つことが出来れば、魔法瓶を用いても検査を実施することが出来ることを報告いたしました。開発したこれらの検査法は、簡便で、誰でも実施することが出来る方法であり、検査環境の整っていない流行地で当事国の研究者自身が実施できることに意義があると思っております。

寄生虫感染症は日本では殆どなくなりましたが、海外では今でも猛威を振るっております。我々は、日本の技術を提供するだけではなく、流行地の研究者が自立して対策事業を展開できるように、若手研究者の育成などにも尽力して参りました。流行地における寄生虫感染症対策と若手育成への業績が認められ、2014年11月、伊藤亮客員・名誉教授が米国熱帯医学・衛生学会国際名誉会員に推挙されました。

今後も、寄生虫感染症の撲滅を目指して、国内外の研究者と研究活動を展開するとともに、その国際研究で得られる知見を教育現場に還元して行きたいと考えています。

法医学講座

教授 **清　水　惠　子**
（第17期生）

日本法医学会100周年記念誌に掲載予定の講座紹介を以下に記す。開学以来の法医学講座の歴史が概観される。

沿革

国立旭川医科大学は，新設国立医科大学の一番目として昭和48年（1973）9月29日設立認可，同年11月5日第1期生入学式挙行。法医学講座は昭和50年（1975）4月開講，石橋　宏が北海道大学より初代教授として赴任し，昭和61年（1986）7月から平成4年（1992）3月まで副学長を務めた。二代目教授は平成4年（1992）11月に，島根医科大学教授であった塩野　寛が就任し，平成15年（2003）8月から旭川医科大学教育・厚生補導担当副学長，平成16年（2004）4月から国立大学法人旭川医科大学理事・副学長を平成19年（2007）6月まで務めた。平成16年（2004）4月に大学は法人化され，国立大学法人旭川医科大学となった。平成17年（2005）11月から，旭川医科大学の卒業生（17期）である清水惠子が三代目教授となり現在に至る。

塩野　寛は，平成12年（2000）から平成15年（2003）まで日本法医学会理事長，平成16年（2004）には第88次日本法医学会総会（旭川医科大学）会長を務めた。北海道科学技術賞を平成14年（2002），北海道警察本部長感謝状を平成15年（2003），法務大臣感謝状及び警察庁長官感謝状を平成19年（2007），日本犯罪学会賞を平成21年（2009），北海道医師会表彰を平成24年（2012）に受賞した。清水惠子は，北海道医師会賞・北海道知事賞を平成19年（2007），旭川医科大学医学部医学科同窓会特別奨励賞を平成23年（2011），北海道警察本部長感謝状を平成25年（2013）に受賞した。

研究

石橋　宏は，「スーパーインポーズ法による個人識別」と題して，昭和61年（1986）第70次日本法医学会総会（名古屋市立大学）で特別講演を行った。石橋　宏教授時代の教室の研究テーマは，

（1）T式（Lewis式）血液型に関する研究，（2）ミイラ化した皮膚に残存する創傷に関する法医病理学的研究，（3）高温下における毛髪の形態学的研究，（4）焼骨の人獣鑑別，（5）人骨のハバース管における経年及び環境（地上，土中，水中）変化など骨組織微細構造の法医学的研究，（6）モンタージュ法を利用した顔貌類似性証明に関する研究，（7）スーパーインポーズ法に関する研究が，主なものであった。

塩野　寛は，「DNA多型を用いた個人識別 ― 法医学試料の戸籍を探して ―」と題して，平成8年（1996）第80次日本法医学会総会（京都府立医科大学）で特別講演を行った。塩野　寛教授時代の教室の研究テーマは，（1）DNAによる個人識別，（2）血液型・血清型からの個人識別，（3）皮膚紋理の個人識別と臨床応用，（4）凍死の診断の確立のための研究が，主なものであった。

清水惠子が主催する教室の研究テーマは，（1）DNA多型解析に基づいた高感度な個人識別法の開発，（2）薬毒物の分析と体内分布・危険ドラッグのメタボローム解析と体内動態予測，（3）医薬品の不正使用（Date rape drug），（4）パラコートの細胞障害機構の解明，（5）凍死の法医学的診断研究が，主なものである。

大学院博士課程に関しては，平成11年（1999）3月に旭川医大卒業生の清水惠子が，講座開設以来，初めて学位（博士課程）を取得した。その後，平成14年（2002）3月に水上　創（東京都監察医務院，東京医科大学を経て，金沢医科大学教授），平成15年（2003）に小川研人（歯科医），平成16年（2004）6月に吉田将亜（旭川医科大学歯科口腔外科講師，病棟医長），平成23年（2011）3月に浅利　優（旭川医科大学法医学講座准教授，博士（薬学）），平成26年（2014）3月に岡　久美子（旭川医科大学歯科口腔外科助教）が，学位（博士課程・医学）を取得した。

過去に法医学講座教官及び教員として在籍された方々は以下の通りである。藤田昌宏助教授（病理部兼任，昭和52年（1977）8月1日から昭和61年（1986）7月31日，国立札幌病院病理部長），安積順一准教授（平成16年（2004）7月1日から平成19年（2007）5月7日，札幌国際大学教授），渡邊智准教授（平成19年（2007）4月1日から平成20年（2008）6月30日，札幌医科大学医学部医学科基礎医学部門法医学講座准教授），間瀬田千香暁准教授（平成21年（2009）4月1日から平成26年（2014）3月31日，定年退職），矢島大介准教授（平成26年（2014）4月1日から平成26年（2014）12月31日，千葉大学附属法医学教育研究センター特任准教授），谷井広樹助手（6期（昭和59年（1984））卒，昭和59年（1984）4月1日から昭和63年（1988）3月31日，開業），福島　亨助手（9期（昭和62年（1987））卒，昭和62年（1987）4月1日から平成10年（1998）9月30日，道立倶知安保健所長），佐々木雅弘助手（平成5年（1993）7月1日から平成12年（2000）3月31日，米国UCSFへ転出），上園崇助手（平成10年（1998）11月1日から平成14年（2002）3月31日，帝京大学薬学部薬学科准教授），丹　祐夏助教（平成19年（2007）7月16日から平成19年（2007）10月31日，皆野病院皮膚科），大村友博助教（平成21年（2009）4月1日から平成24年（2012）3月31日，京都大学医学部附属病院薬剤部助教），岡　久美子助教（平成24年（2012）4月1日から平成25年（2013）3月31日，旭川医科大学歯科口腔外科助教）。

平成27年（2015）における，法医学講義及び実習・演習の非常勤講師は，塩野　寛旭川医科大学名誉教授，松原和夫京都大学医学部附属病院薬剤部教授（前旭川医科大学病院薬剤部教授），坂上和弘（国立科学博物館人類研究部人類史研究グループ研究主幹），槇野陽介（東京大学大学院医学系研究科法医学・医事法学講師），笹森　学弁護士（札幌弁護士会）である。

実務

平成22年（2010）より，土日祝祭日に道内三法医学講座が交代で休む代わり，常に司法解剖が可能な状態を維持する為に，全道解剖当番制が敷かれたことから，平日に担当している北海道警察旭川方面，北見方面，釧路方面に加え，全道当番日には，札幌方面及び函館方面の法医解剖も施行されることになった。

清水惠子は，平成23年（2011）東日本大震災発生直後3月，4月，6月と3回に渡り，警察庁の要請

を受けた法医学会からの検案医として被災地に派遣された。大学院卒業生の小川研人（歯科医）と当時大学院生であった岡　久美子は，被災地での遺体の個人識別を目的とした歯牙鑑定業務に携わった。浅利　優は，平成16年（2004）より，厚生労働省から，戦没者遺骨のDNA鑑定を委託されている。

現在，LC/MS/MS，GC/MS，GC，LC，DNAシークエンサー，血液ガス分析機，分光光度計，CTスキャナー等の各種機器が導入され，法医実務の充実が図られている。

平成27年（2015）4月現在，司法解剖及び関連業務に携わる者は，名誉教授塩野　寛（医師・医学博士），教授清水惠子（医師・薬剤師・博士（医学）），准教授浅利　優（薬剤師・博士（薬学）・博士（医学）），助教奥田勝博（薬剤師・博士（薬学）），非常勤技能補助員として，山田ひろみ，土井大輝，非常勤技術補助員として，大谷静治，保科千里，非常勤事務補助員として，北村麻奈，吉田あやか，鈴木朱美である。

開講以来平成2年（1990）12月末まで，

司法解剖：　653体
篤志解剖：　　2体
死体検案：　285体
白骨鑑定：　121体
親子鑑定：　　20件
物体鑑定：　　41件
書類鑑定：　　23件

平成３年（1991）から平成26年（2014）12月末まで，

司法解剖：2,599体
承諾解剖：　155体
新法解剖：　　2体
白骨鑑定：　　20体
親子鑑定：　　22件
物体鑑定：　113件
書類鑑定：　198件
生体検査：　135件
歯牙鑑定：　　51件
戦没者遺骨DNA鑑定

詳細

	死体検案	解剖（司法・承諾・新法）
平成３年（1991）：	不詳	51体
平成４年（1992）：	44体	36体
平成５年（1993）：	34体	45体
平成６年（1994）：	20体	67体
平成７年（1995）：	68体	68体
平成８年（1996）：	68体	60体
平成９年（1997）：	98体	71体
平成10年（1998）：	110体	68体
平成11年（1999）：	139体	88体
平成12年（2000）：	184体	108体
平成13年（2001）：	185体	103体
平成14年（2002）：	231体	118体

平成15年（2003）：	178体	98体
平成16年（2004）：	139体	102体
平成17年（2005）：	163体	103体
平成18年（2006）：	165体	136体
平成19年（2007）：	213体	125体
平成20年（2008）：	247体	130体
平成21年（2009）：	189体	131体
平成22年（2010）：	245体	211体
平成23年（2011）：	196体	241体
平成24年（2012）：	211体	224体
平成25年（2013）：	91体	178体
平成26年（2014）：	171体	194体
合計：	3,389体	2,756体

内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科学分野（旧内科学第一講座）

医局長 **竹 内 利 治**
（第14期生）

2007年に長谷部直幸教授（２期）が３代目教授として就任され、「元気が出る教室」をキャッチフレーズに８年が経過しました。成熟期とも言えるこの時期を迎え、本年10月より竹内利治（14期）が住友和弘（H８年卒）より医局長を引き継ぐことになりました。これまで副医局長が不在で、前医局長が一人でこなしていた仕事はあまりに膨大であったため、今回、教授の采配により副医局長として中川直樹助教（H９年卒)、蓑島暁帆助教（22期）の２人が配置されました。外来医長の山本泰司学内講師(14期)、病棟医長の田邊康子学内講師（15期）らと協力し、より充実した医局運営に努めたいと思います。それでは、最近の教室の動向と取組みについてご紹介したいと思います。

循環器グループ：教室の大きなテーマである高血圧では、CAMUI研究に引き続き佐藤伸之准教授（８期）が中心となり、降圧薬の多剤併用に関する臨床研究ASAHI－AI研究をスタートさせました。2018年に長谷部教授が主催される日本高血圧学会を成功させるためにも重要なプロジェクトであり、是非皆さまのご協力をお願いしたく存じます。

インターベンションの分野では、竹内、蓑島らが中心となり、AMIにおけるポストコンディショニングの臨床研究を行う一方、PCI以外にPTAV（大動脈弁バルーン拡張術）やBPA（肺動脈バルーン形成術）など、大学ならではのカテーテル治療も行い、様々な患者ニーズに応えています。今年度は木谷裕也（32期)、川口 哲（32期）など関連施設で経験を積んだ若手オペレーターが帰局し、その力を遺憾なく発揮してくれています。

またカテーテルアブレーションの件数も着実に増え、元気に復帰された川村祐一郎保健管理センター教授（３期）の指導のもと、田邊、坂本央特任助教（17期）のベテランと杉山英太郎特任助教(25期)、大津圭介特任助教（31期）の若手がうまく調和し、安全で高度な医療を提供しています。

次の大きな目標は道北地区初のTAVI（経カテーテル大動脈弁植込み術）の実施です。PCIチームと外科医、麻酔科医、心エコー医として赤坂和美臨床検査・輸血部講師（11期）が加わり「旭川

医大ハートチーム」が結成され、現在着々と準備中です！

呼吸器グループ：大崎能伸呼吸器センター教授（２期）の指導のもと、佐々木高明助教（23期）、奥村俊介特任助教（27期）肺癌における分子標的薬耐性機序の解明や肺癌に対する新たな治療戦略の開発を目指す一方、山本、平井理子特任助教（30期）、風林佳大（30期）、鳴海圭倫（34期）らは病棟で肺癌の患者さんと対峙し、丁寧で質の高い診療を行っています。特にレーザー治療装置とがんに集まる薬剤を組み合わせたフォトダイナミック治療は20年以上続けており、機器の開発をも手掛けています。

神経グループ：片山隆行講師（16期）を中心に澤田 潤助教（23期）、齋藤 司助教（25期）らは、パーキンソン病に対する磁気刺激療法の応用、心房細動患者におけるMRI画像所見の検討、筋委縮性側索硬化症の病態に関する研究などに取り組んでいます。また病棟では浅野目明日香（31期）と高橋佳恵（31期）が子育てもしながら仕事も両立し、モデルケースとなっています。

腎臓グループ：藤野貴行学内講師（15期）、留学から帰国した中川を中心に、基礎と臨床どちらにも力を注ぎ業績は好調です。複数の科研費獲得、研究成果の論文化は数多く、大学院生の丸山啓介（32期）はこの１～２年に３本の英語論文を発表し大活躍です。また松木孝樹透析センター助教（24期）が新たに加わり、透析センターの運営に大きく貢献しています。腎生検は今年度50件を見込み、腎疾患以外にファブリー病、IgG4関連疾患、全身性血管炎などにも対応しています。また臨床研究では透析患者の低栄養と心血管イベントに関する観察研究が進行中です。

循環・呼吸医療再生フロンティア講座：長内 忍特任教授（７期）、住友特任准教授が中心となり、CIK（地域医療を考える会）や道内各地への地域医療実習といった活動を通じ、学生と深く交流を図っています。特に昨年度は旭川でフロンティア地域医療ワークショップを主催し、全国11大学の学生80名の参加がありました。本学の入学定員における地域枠が増加する中、地域医療に対する医学生教育はマストであり、本講座が果たすべき役割は益々大きくなっています。

心血管再生・先端医療開発講座：これまで川辺淳一特任准教授（９期）がリーダーとなり、毛細血管周細胞に関する基礎研究で、数々のグラントを獲得してきました。松木、鹿原真樹特任助教（30期）らが血管新生における新規因子 Ninjurin1 の研究、さらにCapSCと名付けられた毛細血管幹細胞の発見と次々に新たな展開を見せています。CapSCは次世代の再生医療として大きな可能性を秘め、現在臨床応用に向けた特許を取得、企業とのプロジェクトも進行中であり、今後是非注目していただきたい講座です。

医療が高度に細分化する中、本講座は循環器、呼吸器、神経、腎臓という重要な内科４分野を広くカバーし、さらに地域医療から高度先端医療まで高いパフォーマンスで維持してきました。これから始まる新・内科専門医制度は、奇しくも当教室が目指す「総合力を兼ね備えた専門医」、「専門性を持つ総合内科医」の育成そのものですが、その実現こそが同窓会の先生方のご支援に応えるものと信じ、教室員一同これからも益々努力を重ねて参りたいと思います。

内科学講座 病態代謝内科学分野（旧第二内科学講座）

医局長 **岡 本 健 作**
（第16期生）

旭川医科大学内科学講座　病態代謝内科学分野は、昭和49年石井 兼央（いしい かねお）教授により「旭川医科大学内科学第二講座」として開講され、昭和63年8月に第二代、牧野 勲（まきの いさお）教授、平成15年12月からは第三代、羽田 勝計（はねだ まさかず）教授に引き継がれ現在に至っています。本教室は、糖尿病・代謝内科学、膠原病内科学、内分泌内科学、消化器病内科学領域の診療および教育・研究を行っています。

臨床においては、卓越した専門性による高度医療の提供のみならず、広い視野とスペシャリティーを兼ね備えた質の高い内科医を養成することを目標とし、羽田教授の指導下で「病める人を癒す医療」をモットーに、「糖尿病・代謝」「膠原病・内分泌」「消化器（肝胆膵）」の各グループが連動して診療を行っています。また、地域・社会のニーズにも柔軟に対応し、関連病院、各地域病院との密接な連携に基づいた「地域に根ざした高水準医療」の実践に努めています。

この2年間の第二内科関連のニュースとしては、2013年度の日本糖尿病学会　学会賞（バーゲドーン賞）、2014年に日本糖尿病合併症学会の学会賞（Expert Investigator Award）を羽田教授が受賞されたことと、この同窓会誌が発行される頃には過去のことになっていると思われますが、羽田教授が当番世話人として2015年12月5日～6日に東京のベルサール汐留で第27回 糖尿病性腎症研究会を開催することです。糖尿病性腎症は我が国における腎不全の原疾患の第一位であり、本症の発症進展防止は重要な課題のひとつとなっております。本症における最先端の研究成果がこの会で報告されることを期待しております。

さて、教室は羽田教授の指導のもと糖尿病・代謝内科学、膠原病内科学、内分泌内科学、消化器病内科学領域の診療および教育・研究を行っています。

臨床においては、各専門領域における高度医療の提供のみならず、広い視野とスペシャリティーを兼ね備えた質の高い内科医を養成することを目標としています。

糖尿病・代謝グループは、道北および道東地区の糖尿病専門医療機関の一中心機関として、地域の医療機関と連携も深めながら日々の診療・研究を行っております。

基礎研究は羽田教授の指導のもと、牧野雄一准教授、滝山由美特任准教授、安孫子亜津子講師、藤田征弘学内講師らが中心となり、羽田勝計教授のライフワークでもある糖尿病性腎症の発症メカニズムや新たなバイオマーカーの解明に力を注いでいます。現在は腎糸球体の可視化を目指した画像処理技術の開発や、Metallothionein－3の糖尿病性腎症における役割の解明などが研究されております。藤田征弘学内講師らは、新たな活性型インクレチン測定法の開発や、GIPによる耐糖能改善効果や膵保護効果機序に関する研究も行っております。さらに、新規治療薬であるSodium Glucose Cotransporter 2（ナトリウム・グルコース共輸送体、SGLT2）選択的阻害薬による腎への影響や代謝改善効果に関する研究も行っており、様々な新知見を解明中です。

臨床研究は安孫子亜津子講師を中心に行っており、皮膚AGEと糖尿病性腎症進行の関連性に関する研究や、シスタチンCに着目した糖尿病性腎症の腎機能評価に関する検討も行っております。全国規模の糖尿病臨床研究・調査にも多数参加しており、わが国初の糖尿病集約的治療の意義を証明するためのJ－DOIT3は、近く介入期間が終了予定であり、その結果が期待されております。地域密着型の多施設共同コホート研究である旭川スタディも結果を解析中です。

診療面では糖尿病患者個々の病態や背景に応じた治療法の選択を重視し、多職種によるチーム医療を行っております。また、外来糖尿病教室、糖尿病教育入院をはじめ、腎症・神経障害・大血管障害合併症の評価/精査・治療、インスリン治療やインスリンポンプを用いた持続皮下インスリン注入療法（CSII）、持続血糖測定（CGM）を用いた血糖コントロール評価と治療への応用、インクレチン関連薬による治療、さらに新規治療薬であるSGLT2選択的阻害薬を用いた治療などを積極的に行い、世界的に大きな問題となっている糖尿病患者の増加、糖尿病合併症の増加に対して対抗すべく、日々奮闘しております。病診連携も積極的に行っており、１週間クリニカルパスによる糖尿病性血管合併症評価入院や2013年から北海道のモデル事業として実施中の旭川地区糖尿病地域連携パスなどを通して、地域の糖尿病患者のさらなる予後改善を目指しております。

膠原病・内分泌グループは、牧野雄一准教授がチーフを務め、難治性慢性疾患に立ち向かっています。特に関節リウマチ治療においては、近年爆発的発展を見せている生物学的製剤（抗サイトカイン製剤）を中心とした治療法を積極的に導入し、関節リウマチの臨床的、機能的、構造的寛解を目指して奮闘中です。また、重症膠原病に対する免疫抑制療法、血漿交換療法など高度専門治療の他、新薬臨床治験の展開など、道北・道東地方をカバーする膠原病センター的な役割を担っています。2013年4月から小林厚志助教が救急部スタッフに加わり、膠原病の急性増悪にも効率よく対応しています。児玉暁医員は新潟県立リウマチセンターでの研修を終えて2015年4月に医局に戻り、その経験を生かして診療、臨床研究、後輩の指導に当たっています。一方、北海道においてやはり専門医不足が問題とされる甲状腺をはじめとする内分泌疾患の診療においても市内関連施設との連携のもと、地域のニーズに応えています。

研究では、牧野雄一准教授、岡本健作学内講師らが炎症性細胞機能制御における低酸素応答性転写因子群（HIF）の役割の解明に一貫して取り組んでいます。最近、膠原病の重症病態の一つである膠原病性肺動脈性肺高血圧症の病態にHIF－3とその塩基多型が関連する可能性を見出し、大学院生の水元克俊先生、藤代大介先生が日夜究明を続けています。

また、大学院生の江口耕平先生は2015年3月まで在籍した小村景司助教とともにメトトレキサートトランスポーター発現制御機構の解明を通じ、関節リウマチ治療におけるメトトレキサートの位置づけをより明確にすることを目指し研究を行っています。吉本良太医員、髙取恭平医員、現在は育休中の髙取清香医員、膠原病・内分泌専門医を目指す研修医など若手医師が増え活気づく中、臨床、基礎研究の更なる充実を目指しています。

消化器グループは消化器領域の中でも肝胆膵疾患を専門としており、麻生和信講師を筆頭に岡田充巧学内講師、北野陽平学内講師らがそれぞれグループをまとめながら診療、研究、教育に取り組んでいます。

胆膵、消化管領域を担当しているのは北野陽平学内講師、山北圭介医員、髙橋賢治医員、岩本英孝医員、鈴木裕子医員の5名のメンバーで内視鏡検査日には和田佳緒利医師も加わり診療にあたっております。国立がんセンター東病院や愛知県がんセンターで研修経験のある医師が複数おり、悪性疾患の内視鏡的治療や化学療法に力を注いでおります。また対象とする疾患は悪性疾患に限らず、炎症性腸疾患以外の良性疾患についても幅広く診療を行っております。

基礎研究の分野ではMayo clinicに留学していた高橋賢治先生が帰局後中心となり、タンパク質をコードしない機能性RNA（non－coding RNA）と、その細胞間情報伝達に携わる細胞外小胞（extracellular vesicle; EV）の２つのテーマに焦点を当てています。膵癌、胆管癌の発癌、進展を制御する新規non－coding RNAの同定及びEVを介した機能解析を目的とした研究を大学院生の太田雄先生とともに進めています。

また、岡田充巧学内講師、玉木陽穂特任助教を中心にNASHの肝発癌機構について研究しております。

臨床研究では麻生和信講師、岡田充巧学内講師、大竹晋医員らが肝癌における造影三次元超音波

の臨床応用について研究を進めています。

最後になりますが、第二内科は今後も診療、研究、教育に邁進する所存でおりますので、同窓会の皆様におかれましては今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

内科学講座 消化器・血液腫瘍制御内科学分野（旧第三内科学講座）

医局長 **盛 一 健太郎**
（第18期生）

当教室は昭和51年４月に初代の故・並木正義名誉教授が内科学第三講座として開講されて以来，消化器病学・消化器内視鏡学を中心として，多くの優れた臨床研究を生み出すとともに，北海道の地域医療に貢献してきた内科学教室です．平成６年12月に高後裕名誉教授が第二代教授に就任されてからは，消化器病学と血液腫瘍学を２本柱として伝統を受け継ぎながら，臨床・基礎研究ともに発展させてきました．

当教室の診療・研究グループは消化管・胆膵，肝臓，血液・腫瘍の３つに分かれています．消化管・胆膵グループは藤谷准教授が，肝臓グループは澤田康司学内講師が，血液・腫瘍グループは生田克哉講師がグループ長として多くの大学院生や若手医師に対して日々臨床・研究両面から熱心に指導しています．グループとしての体制はとっていますが，グループの垣根はなく，臨床・研究面ではいくつもの横断的なプロジェクトをすすめています．近年大学病院の救急患者の受け入れが増加してきた結果，以前にも増して急性期から慢性期まで様々な背景を持つ患者さんを診察する機会が増加していますが，こういった患者さんに対しても横断的に連携できる体制を構築している結果，スムーズに対応できるようになっています．
各グループの最近の活動について紹介いたします．

消化管・胆膵グループ

消化管疾患では消化管癌と炎症性腸疾患を中心に診断・治療・研究を行っています．消化管癌の診断には従来から用いてきた超音波内視鏡，拡大内視鏡，Ｘ線診断に加えて画像強調観察法を用いた精密診断を行っています．治療は早期消化管癌に対しては内視鏡的切除術（EMR，ESD）を積極的に行い，切除不能進行・再発癌に対しては経験豊富なスタッフにより患者さん個人に最適な化学療法を選択するよう日々努力しています．基礎研究では分子生物学的手法を用いた各種消化管癌発生・抑制に関する検討を行っています．潰瘍性大腸炎，クローン病を中心とする炎症性腸疾患（IBD）の病態の解明や診断・治療の開発にも力を入れており，拡大内視鏡や画像強調観察法を用いた精密診断や再燃予測に加えて，免疫調節薬治療・抗TNF α抗体療法・白血球除去療法といった診断・治療法を積極的に実践して良好な治療成績が得られています．最近，当教室の腸内細菌と腸疾患に関する研究から乳酸菌や納豆菌の一種が産生する新規活性物質の同定に成功し，この成果に基づいて新しい腸管保護剤や抗腫瘍薬の開発・臨床応用を進めています．

胆膵疾患領域では代表的な難治がんである膵がん・胆道がんの診断と治療を積極的に行っています．内視鏡を駆使した低侵襲な診断・治療体系の確立を目指すとともに，関連病院との連携のもと多数例による臨床研究を行っています．さらに抗がん剤と放射線治療の耐性機構に関する基礎研究をすすめており，その分子機構に根ざした治療抵抗性の克服を目指しています．また，膵管内乳頭粘液性腫瘍や膵胆管合流異常，自己免疫性膵炎については診断・治療方針に関する新たな知見を国内外に報告すると同時に，これらの発生・進展メカニズムの解析をおこなっています．

肝グループ

多彩な肝疾患に対する診断・治療を精力的に幅広く行っています．ウイルス性肝炎に対する標準的治療に加えて，個々の患者さんの病状に合わせた最適な治療を選択し行っています．進歩の著しいC型肝炎では高齢者へも積極的にインターフェロンフリー治療を導入し，非アルコール性脂肪性肝炎に対しては肝臓に過剰蓄積される鉄分が酸化ストレスの原因となって肝炎を増悪させていることから，抗酸化治療である瀉血（しゃけつ）療法と鉄制限食療法を積極的に取り入れています．この慢性肝疾患における鉄代謝調節異常の病態機序解明は肝臓グループのメインの研究テーマであり臨床に還元すべく日々努力しています．肝臓がんに対しても最新鋭の画像診断機器を駆使して診断・治療を行っています．特に高解像でありながら低侵襲である造影超音波検査を早くから導入して内科的局所治療にも積極的に取り入れて効果をあげています．生活習慣の欧米化に伴い増加している非アルコール性脂肪性肝炎は肝硬変，肝臓がんへ進展する病態であることから本病態の解明，治療法の開発のため臨床および基礎研究を行っています．

血液・腫瘍グループ

急性白血病，慢性白血病，悪性リンパ腫，多発性骨髄腫などの血液悪性腫瘍から貧血，血小板減少症，凝固・線溶因子異常，不明熱，血球貪食症候群といった広範囲な疾患の診断と治療に当たっています．市内からはもちろん，遠方の患者さんの紹介も多く化学療法や移植の件数も年々増加しています．患者さんの増加に対しては関連病院の先生のご協力をいただいているお陰で円滑な連携が成り立っており，対応させていただいております．

主な研究は，トランスフェリン受容体，トランスフェリン受容体２などを代表とするトランスフェリン結合鉄の細胞内取り込み機構や非トランスフェリン結合鉄の細胞内鉄取り込み調節機構の解析，鉄代謝調節因子hepcidinの生理的機能と発現調節機構といった生体内鉄代謝調節に関する研究，血清hepcidinの3 isoform同時定量法の開発，血清中に存在する非トランスフェリン結合鉄（NTBI）の測定系の開発，網赤血球ヘモグロビン含量の鉄欠乏診断能に関する多施設共同研究，といった基礎および臨床研究プロジェクトを並行して精力的に進めています．

第三内科の同門会員数は現在では300名余りの大所帯となっています．同門会員の進路も多岐にわたり，様々な面から医局を支えていただいています．今後も臨床・研究・教育の各分野に対して教室員一同協力して邁進していく所存です．同窓会の皆様におかれましては，今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます．

精神医学講座

准教授 **田　村　義　之**
（第16期生）

当教室は、平成９年９月に１期生である千葉　茂教授が就任されてから19年目を迎えましました。本邦における精神疾患の患者数は、近年、うつ病などの気分障害やアルツハイマー病などの認知症を中心に増加しており、厚生労働省は、平成25年度からがん、脳卒中、心筋梗塞、糖尿病の４疾病に精神疾患を加えた５疾病として重点的に対策を進めると発表しました。このように精神科医療の果たす役割がますます高まるなか、本稿では、この２年間における当教室の近況についてご報告申し上げます。

平成27年11月現在の教室スタッフは、千葉　茂教授（科長、１期生）、田村義之准教授（副科長、16期生）、阪本一剛講師（外来医長、22期生）、高崎英気助教（20期生）、吉澤門土助教（病棟医長、大学院生、28期生）、吉原慎佑助教（奈良県立医科大学、平成22年卒業）、安田麻美助教（35期生）の計７名です。コ・メディカルスタッフは、平成26年４月に精神保健福祉士の武田彩未さんと臨床

検査技師の黒須結唯さん、平成27年２月に医療クラークの佐藤　梢さん、同年４月には精神保健福祉士の高田彩那さんが新たに加わりました。厚生労働省資料「精神障害者に対する支援の在り方について」（平成27年３月）のなかで、精神科医療の質の向上、退院支援、地域生活支援のために多職種との適切な連携を確保することが指針として盛り込まれており、当教室においても常勤の精神保健福祉士が２名体制となり、ますます精神科医療体制の充実が図られました。また、専属の臨床検査技師も４名体制（このうち３名は日本睡眠学会認定検査技師）が維持されています。平成16年３月に専用検査室（２床）とモニタリングルームなどで構成される「精神行動生体現象モニタリングシステム」が導入されてから、この10年間（平成17年１月～平成26年12月）に施行されたポリソムノグラフィ検査数は1762件にのぼります。私たちは、精神行動生体現象モニタリングシステム（ポリソムノグラフィ）を大きな武器として、臨床検査技師の協力のもと、これまでに睡眠障害やてんかんをはじめ多くの精神疾患の診断・治療と新知見の公表を行ってきました。千葉教授以下、各スタッフ（医師）の最近の活動状況の一端をご紹介致します。

千葉教授（１期生）は、全国で講演活動を行う傍ら、平成27年１月６日には、テレビの全国放送「たけしの健康エンターテインメント・みんなの家庭の医学」（朝日放送）に出演され、認知症と誤診されやすい高齢者てんかんの症例を呈示されました。この放送後、全国から多数の問い合わせがあり、このうち何人かは当科に検査入院して頂きました。このなかには自動車事故で起訴され、当科でのポリソムノグラフィ検査によってはじめて「てんかん」と診断された症例も含まれています。また、千葉教授は、同年１月15日に「睡眠とてんかん　その密接な関連性」（ライフ・サイエンス、東京）を上梓されました（図１）。睡眠障害やてんかんは日常診療においてよく遭遇する病態・疾患でありながら、両者の間に密接な関連性があることはあまり知られていません。本書は、この分野に光が当てられた我が国はじめての医学書です。ぜひ興味のある方は手に取って目を通して頂きたいと思います。田村（16期生）は、これまで通り医局長業務を淡々とこなしながら、精神疾患に合併する睡眠障害（とくに統合失調症と睡眠時無呼吸症候群との関連性）の研究を続けています。また、地域での講演活動や論文の執筆（「高齢者にみられる睡眠時随伴症（2015）」、「物質・医薬品誘発性睡眠障害（2014）」など）もコツコツと行っています。「睡眠とてんかん　その密接な関連性」では、第７章「てんかん治療が睡眠に及ぼす影響」を担当・執筆しました。阪本（22期生）は、外来医長業務でストレスフルな状態が続いていますが、熱心に研修医等の指導にあたっています。また、「睡眠とその障害のクリニカルクエスチョン200」（診断と治療社、東京、2014）では、「睡眠薬は怖いという人へのアドバイスは？」、「睡眠薬を最初に処方するときに注意することは？」という章を担当・執筆しました。高崎（20期生）は、名寄市立総合病院での約５年間の勤務を経て、平成26年７月に大学に復帰しました。地域での豊富な症例経験を通して、大きく成長して帰って来ました。現在は、診療に従事しながら、実験てんかんに関する研究論文の執筆に取り組んでいます。吉澤（28期生）は、病棟医長としての重責を担いながらも後輩医師の指導に力を注いでいます。また、大学院生として学位論文執筆のためにいつも関連論文を読んでいる姿が印象的です。平成26年３月には、ドイツ（ベルリン）で開催された国際学会（The 30th international congress of clinical neurophysiology）で興味深い症例を報告しました。最近も全国学会のシンポジストを多数こなし、今後の研究の発展が期待されています。吉原（奈良県立医科大学、平成22年卒）は卒後６年目となり、教室で最も多くの患者を担当しています。論文執筆にも力を入れ、「気分障害を伴う概日リズム睡眠障害に対してramelteonが著効した１例」と題する論文が専門誌（精神神経学雑誌）に掲載されました。最近は精神保健指定医の取得に向けてレポート作成に熱心に取り組んでいます。また、学生教育やリクルートの中心としても活躍しています。安田（35期生）は、平成27年４月に後期研修医として入局した当教室の紅一点（女性医師）です。平成26年９月に開催

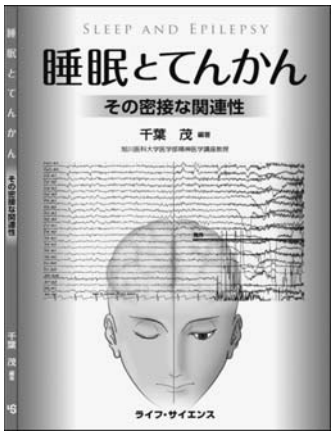


図１

された日本てんかん学会北海道地方会（札幌）では、「抗てんかん薬の薬剤情報添付文書における運転に関わる記載について」と題する発表を行い、大きな注目を集めました。また、平成26年12月に開催された北海道精神神経学会（札幌）では、老年期側頭葉てんかんの症例を報告し、優秀演題賞を受賞しました（図２）。将来、教室を背負って立つ逸材として大いに期待されています。

以上のとおり、少数精鋭の集団として、教室員は一致協力して臨床・研究・教育に真摯に取り組んでいます。また、仕事だけでなく、多職種間の親睦を深めることを目的として、精神科に携わる全ての外来・病棟スタッフが集まり、平成25年から毎年８月に「バジルの会（パスタパーティー）」が催されています（図３）。これからも千葉教授を中心に、楽しみながら教室の発展に邁進していく所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

北海道精神神経学会
優秀演題賞
安田 麻美 殿
演題名 一過性健忘の時期に病態部分発作の重積が認められた老年期側頭葉てんかんの１例
あなたが北海道精神神経学会第126回例会において発表された上記研究を優秀演題と認めここに北海道精神神経学会優秀演題賞を贈呈し 永く栄誉を称えます
平成26年12月7日
北海道精神神経学会
会長 久住 一郎

図２

図３

小児科学講座『小児科学講座の近況』

長 屋 建
（第16期生）

旭川医科大学小児科学講座は初代教授 吉岡一先生、第２代教授 奥野晃正先生、第３代教授 藤枝憲二先生と引き継がれ、現在は平成23年８月より、本学１期生の東 寛先生が第４代教授として着任されている。

小児科学講座は旭川市周辺及び道北・道東という広大な医療圏の小児医療を維持し、さらに発展させるべく、その中心として活動している。大学病院４階フロアーに小児関連の病室を集約し、４階東病棟の周産母子センター（NICU ９床、GCU 12床）および４階西病棟に外科術後など重症患児を診る回復室３床、造血幹細胞移植を行う無菌室４床を配し、小児外科病棟と共に、あらゆる小児疾患に対応出来る小児総合医療センターを形成し、高度先進医療を実践している。

また、病気を治す事だけでなく、院内学級をはじめ、病棟保育士２人が常駐し、長い入院生活を強いられている子ども達の発達支援を欠かさない。クリニクラウンによるサポートも定着している。

周産母子センターでは周産期に抱えるご家族の不安への心理的サポートを担うべく心理士が常駐している。さらに、当院はWHOとUNICEFから「赤ちゃんにやさしい病院（Baby friendly hospital: BFH）に認定されている国内唯一の国立大学病院として、母乳育児の推進と実践を院内外に発信している。この理念のもと、日々の診療においても「子供にやさしいこと」を第一に子供たちと向き合っている。

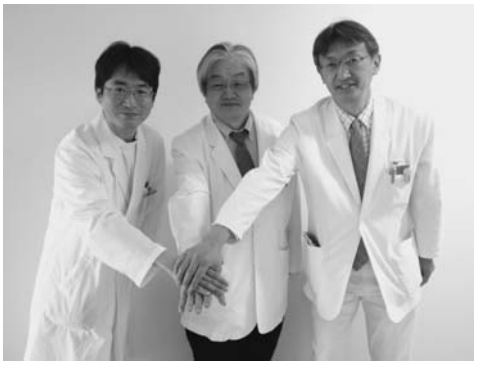
また外来では、発達障害児診療に対応するために子どもの発達診療センターが開設されており、心理士２人と診療にあたり地域のニーズに大きく貢献している。各診療グループによる専門外来も充実しており、小児のほぼ全ての専門領域に対応している。

関連病院への小児科医師派遣は旭川厚生病院、名寄市立病院、遠軽厚生病院、富良野協会病院、広域紋別病院、市立稚内病院、網走厚生病院、札幌徳洲会病院、市立赤平病院、旭川赤十字病院、旭川医療センター、清水赤十字病院、道立旭川肢体不自由児総合療育センター、北海道療育園と多施設にわたっている。発達障害や重症心身障害児者にも重点をおいている事が当科の特徴であり、すべての北海道のお子さんの健やかな成長を守るため日々奮闘している。

また我々は、「病院にやってきた子どもを診る」だけではなく、子どもの健康のため「社会に向けて広く活動していく」ことも大切にしている。乳幼児検診・育児相談をはじめ、地域住民を対象とした小児健康フォーラム､派遣講座を積極的に開催している｡2001年から始まった小児健康フォーラムは今年で17回目を数えており、その時々で話題となっているテーマを取り上げて、市民の皆様に小児の健康に関する情報をわかりやすく提供している。

現在教室には、感染/免疫/腎臓・内分泌・循環器・神経・血液/腫瘍・新生児の６つの診療・研究グループがあり診療に従事しているが、研究面でも全ての教室員は独自の研究テーマを持ちながらもお互いに協力し、活発に活動している。これまでも、それぞれの分野の有名ジャーナルに論文を発表してきたが、さらに今後も世界に向けて情報発信をして行きたい。東教授の掲げる３つのbetter「better patient care, better professionalism, better research－oriented mind」をモットーに、臨床・研究、教育に真摯に取り組み、世界に向けて発信することを自らに課し、また、それを実践できる小児科医の育成に目指している。

外科学講座 循環・呼吸・腫瘍病態外科学分野（旧第一外科学講座）



東 信良、紙谷寛之、北田正博、宮本和俊

当教室は、旧第１外科として、心臓血管外科、呼吸器・乳腺外科、小児外科の４領域の外科学を扱ってまいりましたが、笹嶋唯博前教授の退官に伴い、心臓血管外科の領域を血管外科学分野と心臓大血管外科学分野に分け、それぞれ教授選考が行われ、2012年に東信良（本学７期卒業）が血管外科学分野教授に就任し、2014年３月にドイツデュッセルドルフ大学から紙谷寛之（平成７年北海道大学卒）を心臓大血管外科学分野の教授として迎え、新体制がスタートした次第でありまして、大きな変化をこの数年で経験してまいりました。

血管外科学分野は、東教授率いる緑チームと古屋敦宏講師率いる黄チームの２チームに分かれて診療を行っており、米国留学から帰国した菊地信介助教の他、大阪で心臓血管外科専門医取得後血管外科を学ぶために入局した奥田紘子医員、大阪大学から２年間の血管外科研修目的に派遣されている三宅啓介医員および研修医が２つのチームをローテーションしており、増え続ける血管病の臨床と研究に取り組んでおります。治療内容として、動脈閉塞・動脈瘤ともに、従来のopen surgeryと血管内治療の両立を合言葉に、ハイブリッド手術室を駆使し、適切な治療法の選択・組み合わせ

を行って、多様性に非常に富んだ血管病患者への最適医療の提供に努めております。重症例が後を絶たたない中、旭川フットサルベージ研究会を立ち上げ、旭川市内の種々の関連診療科の多くの同窓諸兄にも助けられながら、地域連携に努めるとともに、最後の砦としての機能を維持し、道内外からの重症例にも対応しております。動脈瘤破裂に対しては、内田恒前准教授（現札幌厚生病院血管外科部長）が築いた緊急ステントグラフト供給システムのもと、救急部とも協力して、即時対応できる体制を整えております。また、ミシガン大学、ソウルカソリック大学とを結んだ３か所の国際webカンファレンスや心臓大血管外科との合同M&Mカンファレンスを毎月行って、外科医教育環境の向上にも努めております。研究面では、東教授が重症虚血肢に関する全国多施設臨床研究を主導するほか、齊藤幸裕講師（外来医長）が血管新生、リンパ管新生、内膜肥厚抑制などを指導し、大学院生の内田大貴助教が静脈グラフト内膜肥厚抑制に関する基礎研究および臨床研究に取り組んでいます。

心臓大血管外科学分野は、紙谷教授の指導力と臨床力の下、木村文昭助教（病棟医長）と森和樹医員（大分大学から出向)、筒井真博医員の４名体制で、多くの救急症例を含む昼夜を問わない診療を行っています。人工心肺を用いる心臓大血管手術は教室始まって以来初の年間200例越えを達成し、北海道ではあまり行われていなかった鏡視下僧房弁手術などの低侵襲心臓外科手術や最高難易度のDavid手術を日常的にこなしており、学生の関心度も高く、心臓外科を目指して入局をきめている学生も増えています。なお、心臓大血管外科と血管外科は共同で、遠軽厚生病院、富良野協会病院、ふらの西病院、留萌市立病院、深川市立病院などに定期的に心臓血管外来を開かせていただいており、多くの手術症例を大学に送っていただくなど、多くの同窓の諸兄にお世話になっていることをこの場をお借りして御礼申し上げます。

呼吸器・乳腺外科は、臨床では呼吸器センター、乳腺疾患センターに所属し、北田正博准教授を筆頭に林論史助教と大学院生１名、研修医２名の５名体制で診療にあたっています。呼吸器外科は、呼吸器内科と連携して年間約120例の肺癌を中心とした手術を施行し、低侵襲の胸腔鏡下手術から縦隔臓器・胸膜合併切除といった拡大手術まで扱い、呼吸器センター大崎教授御指導のもと、光学的診断法の確立にも力を入れています。乳腺外科は３名の専門医を擁し、道北唯一の乳腺認定施設として診療を行い、年間約200例の乳癌症例に対して乳房温存手術を含めた集学的治療を実践しています。大学院生は、継続して２名が第２病理学講座小林教授の御指導の下で学位を取得し、現在１名が研究に従事しており、今後の研究を行う上で重要な人材が育ちつつあると期待しています。

小児外科は、病院診療科として、科長の宮本和俊講師、病棟医長の平澤雅敏助教のスタッフ２名に研修医が加わって診療を行っております。病棟は小児科との共通病床で、NICU，GCUも使って、年間200例前後の全身麻酔手術を行っています。対象は、ヘルニア・虫垂炎の他、新生児症例・重症例が多いことが特徴で、障がい児手術（鏡視下噴門形成術、喉頭気管分離術など）は全道から患者が集まっております。特に、鏡視下手術は、胸部・腹部とも新生児期から行っており、中でも新生児期Hirschsprung病に対する腹腔鏡下Duhamel－Ikeda手術は当科オリジナル術式であり、全国で追試されております。小児外科は北海道でも専門医が非常に少なく、札幌圏以外に専門医が存在する当大学病院は、道北道東地域にとって、また、外科専門医育成において非常に貴重な存在といえます。

以上、各領域で、それぞれの専門医集団がその裁量を発揮し、それぞれ発展を遂げてまいりました。しかしながら、研修医制度の必修科目から外科が外れ、また、諸々の理由で、学生の外科志望者が著しく減少した時期が長く続いたことから、上記のごとく、どの診療単位も、また、どの関連施設もマンパワー不足に悩んでおります。そこで、2012年後半から消化器外科学病態分野（旧第２外科講座）古川教授との間で連携を模索し、2014年の紙谷教授就任後、外科学講座統合・大講座制移行の計画を進めてまいりました。今年の４月には、学長、病院長、看護部長を招いた結団式も執り行い、現在事務方にも尽力いただいて、正式に大講座化が実現する2016年４月に向けて規約整備等の作業が行われているところであります。写真にありますように、３人の外科教授が力を合わせ、

同じ目的に向かって突き進む所存でございます。従いまして、今回のような形で講座紹介を行うのはこれが最後となります。今後は、外科学大講座として、透明性が高く洗練された外科医教育提供を実現して、若い力溢れる新生外科の時代が始まりますので、ご期待ください。

外科学講座 消化器病態外科学分野（旧第二外科学講座）

教室長 **長谷川 公 治**
（第18期生）

外科学講座 消化器病態外科学分野（旧第二外科学講座）は、大学病院の標榜科が2014年１月のオーダリングシステム更新に伴い、「消化器外科・一般外科」から「消化器外科・移植外科」に変わりました。現在古川博之教授が就任して６年が経過しようとしています。スタッフは松野直徒副科長以下15名で手術、病棟業務や教育および研究等を協同して、肝胆膵・移植、消化管の２つのグループで活動しております。

2015年11月現在の構成は、肝胆膵・移植グループは川原敏靖講師（外来医長、順天堂大学卒）をチーフとし、松野直徒講師（東京医科大学卒）、今井浩二学内講師（病棟医長、21期生）、萩原正弘助教（24期生）、高橋裕之医員（27期生）、古郡茉里子医員（弘前大学卒）、消化管グループは長谷川公治講師（18期生）を上部消化管担当チーフ、浅井慶子助教（21期生）を下部消化管担当チーフとし、小原啓講師（15期生）、庄中達也助教（自治医科大学卒）、谷誓良腫瘍センター特任助教（27期生）、宮本正之医員（27期生）、大原みずほ医員（30期生）、および西越崇博医員（35期生）となっております。そして渡邉賢二救急科助教（26期生）が、救急科の診療に従事しながら、病理学講座 腫瘍病理分野で西川祐司教授のもと基礎研究に従事しています。

診療面においては、2012年に総手術件数約700件に達した後は、やや減少傾向となってはいますが、内視鏡外科手術の普及、より安全で低侵襲な手術手技の開発に努めており、消化管グループでは２名の内視鏡外科学会技術認定取得者のもと、食道癌、大腸癌はほとんどの手術が、また胃癌でも約７割の手術が内視鏡下に行われています。肝胆膵・移植グループにおいては近年、一部施設における腹腔鏡手術による死亡事例の報道が世間を賑わせており、強烈な逆風に吹かれていますが、すでに保険収載されている肝外側区域切除や肝部分切除、低悪性度腫瘍に対する膵体尾部切除を中心に、十分な症例検討、インフォームドコンセントのもと安全性に配慮したより低侵襲な手術を追求しています。また臨床研究として倫理委員会の承認を受け、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いた道北初となる直腸癌手術を４例、道内初の肝細胞癌手術を２例に行っています。また生体肝移植手術はこれまでに６例に対し施行しています。

昨今は医療安全管理の重要性が叫ばれておりますが、当科では古川教授着任以来、Morbidity and Mortality Conferenceを定期的に行い、術後合併症につき当事者の責任を追及するのではなく、真摯に客観的に検討を行い、皆で情報を共有し合併症の予防に取り組んでおります。

外科基礎研究においては、松野講師を中心として診療グループの垣根なく、また中国からの留学生である孟玲童大学院生も加わって行っております。外科領域では永遠のテーマともいうべき虚血再灌流障害の機序の解明を、より臨床に近いレベルとして大型動物であるブタを用いて行っています。さらに移植外科領域における臓器保存、機能再生の構築および再生医療への架け橋をテーマに単離型臓器灌流装置を作製、National Projectとして研究を行い国際的な評価を受け、一部は実用

化へ進んでいます。

教育面においてはこの基礎研究と連動し、これまで臨床実習では経験させることが難しかった基本的外科手術手技につき、ブタを用いて多くの手技を経験してもらうことができるようになり、外科的手技に関心の深い学生達から好評を得ております。

最後に、古川教授の掲げる今年の教室の標語は「一丸」でありますが、外科学講座は今年４月１日、循環・呼吸・腫瘍病態外科学分野（旧第一外科学講座）とともに若手外科医の育成、地域の外科医療の維持等を担う一つの大講座としてスタートするための結団式を行いました。講座および診療科の運営に関する様々な体制の整備､新専門医制度に対応した研修プログラムの作成､新たなホームページの作成等を現在すすめているところであります。

整形外科学講座『２０１５晩秋』

医局長　**小　林　徹　也**

現在の大学各グループ医局在籍者は以下の通りです：股関節　松野丈夫(人工関節講座教授)、伊藤 浩（教授)、谷野弘昌、佐藤達也、西田恭博；上肢　研谷 智、入江 徹、三好直樹、奥山峰志；下肢　能地 仁、阿部里見、類家拓也、佐々木祐介；脊椎　小林徹也、神保静夫、妹尾一誠、清水睦也；腫瘍　丹代 晋、柴田宏明；研修医　岡安浩宣、萱場幸太郎（２年目)。

当教室の沿革は、1975年４月、竹光義治先生が九州大学から初代教授として就任後、原田吉雄、佐藤邦忠、安藤御史、安部志朗、平山隆三、小野沢敏弘、市ヶ谷学、柴田 稔、末松典明、後藤英司、山下 泉、佐藤幸宏先生ら蒼々たるメンバーが創設期に活躍しました。「健康寿命」が謳われる中、当時のメンバーが（2015年10月30日現在）いまだご健在でご活躍なのも、当教室の誇れる自慢かもしれません。

竹光義治先生が九州から北海道に赴任した際、腰曲がりの中高齢者が多いことに着目し、旭川、富良野、遠軽、芽室など道内各地で住民調査を開始しました。当時を知る先生の心や背筋に深く刻まれている腰部変性後弯（lumbar degenerative kyphosis；LDK）の思い出は、最近になり成人脊柱変形で注目を集め、当時太いカテーテル針を挿入された背筋データも立派に活用されています。

1997年２月、松野丈夫先生が北大から第２代教授として就任し、着任早々国内・海外の骨軟部腫瘍症例の紹介が急増し、医局員への骨軟部腫瘍の教育にも尽力されました。自ら編纂された骨軟部腫瘍テキストが北米アイスホッケーの表紙だったのは、アイスホッケー部顧問就任を暗示したものと思います。ご専門の股関節疾患に対する人工関節は、当時海外製品が主流で、最も重要な関節面の研磨状態やポリエチレン品質に問題があったため、旭川医大独自の人工関節を開発上梓しました。当時関わった医局員の記憶に深く刻まれている「４－U」人工股関節は、現在もバージョンアップ中です。松野先生自身メイヨークリニックなど米国留学・診療経験が長かった経歴から、教室員の海外留学を積極的に薦め、就任後の留学先は、スタンフォード大、ワシントン大、マイアミ大、ラッシュ大、シドニー大、ピッツバーグ大、アーカンソー大などなど、各地に広がっています。

2012年５月、現任の伊藤　浩先生が第３代教授に就任し、松野先生から引き続き、国内トップクラスの股関節診療、研究を精力的に進めています。着任早々、伊藤　浩先生の得意分野である小児先天性股関節脱臼の手術研修のため、大柄埃及人Ahmed Mahmoud先生が留学に来ており、医局内は国際的、宴席はハラル的な雰囲気が漂いました。現在では人工関節の機能改良も進み、20年程度の耐用性から一生入れ換えが不要な耐久性が期待できるものとなり、あなたの（For you）「４

－U」から、**優**れた術後経過、**優**秀な長期成績、**優**美な歩行獲得で、患者に**優**しい「四－**優**」になるのも、間近です。

昨年から、同門の業績を讃える目的で旭川医大整形外科同門会奨励賞を創設しました。第１回目は、市立札幌病院の山中康裕先生が受賞しました。今後も、学会論文発表をどんどん奨励したいと思いますので、同門の皆さんもどんどん発表頂ければと期待しています。

伊藤　浩先生は股関節のみならず、上肢、下肢、脊椎、骨軟部腫瘍の各専門分野の診療発展を図りたいということで、大学病院を始め、道北道東に広がる地域中核の関連病院人員の充実を進め、教室員のやり繰りが厳しい中、病院機能の維持改善に努めています。整形外科医の派遣依頼は増加しており、広大な北海道の整形外科医療の質の維持向上も重要な使命と捉えて、教室一丸でがんばりたいと思いますので、今後ともご支援ご協力の程、宜しくお願い致します。

皮膚科学講座

医局長　**堀　　仁　子**
（第18期生）

旭川医大皮膚科学講座は、28年間教授職を務められた飯塚　一名誉教授がH26.3に退官され、H26.7から山本明美教授のもと、新体制が稼働致しました。

皮膚科の診療、教育、研究体制の概略をご紹介します。現在堀　仁子講師が医局長、上原治朗助教が副医局長をしています。

外来体制：岸部麻里講師が外来医長をしています。新来は山本教授のほか、本間　大准教授、堀、岸部、ほか菅野恭子助教、上原、大石泰史助教など皮膚科専門医が担当しています。午後の特殊外来は月曜日が悪性腫瘍、火曜日がアトピー性皮膚炎、水疱症、角化症、水曜日が乾癬、膠原病を開いており、専門的な治療を行っています。手術室を利用する術日は毎週金曜日ですが、H26年から、症例数の増加および備品などの経費削減目的で小手術は火曜日の午後積極的に外来で施行しています。専門外来では本間、澁谷貴史助教らが治療の選択肢の広がっている乾癬の生物学的製剤による治療、堀が中心となってアトピー性皮膚炎の患者むけのグループ療法を行っています。美容外来（火水木曜日）では各種レーザーやピーリング、爪外来（おもに月、水曜日）ではワイヤーやクリップなどを利用した陥入爪の自由診療も施行しています。また本院にはナローバンドUVB照射装置も全身用、局所用と装備されており、各種皮膚疾患の治療に役立っています。

病棟体制：井川哲子助教が病棟医長をしています。病棟体制は上原、大石、土井春樹助教を指導医とする主に悪性腫瘍を担当するＡグループと、菅野、岸部、井川を指導医とするその他の疾患を担当するＢグループに分かれています。Ａグループで特に力を入れている悪性黒色腫の治療ではそれぞれ国立癌センターと虎ノ門病院で多数の手術経験をした上原・大石が中心となって拡大切除、センチネルリンパ節生検、リンパ節郭清、化学療法、光線力学的療法などの先進的な医療を提供しています。非常勤医師である大西病院の形成外科医の高橋美有生先生が手術の技術指導にいらしてくださっています。Ｂグループでは自己免疫性水疱症や膠原病の診断と治療、難治性潰瘍の植皮や持続吸引療法、炎症性疾患の光線療法などを行っています。病棟では岩崎剛志、松谷泰祐、斉藤剛史、野崎尋意らが種々の皮膚疾患の病態や治療を学びながら精力的に働いています。

関連施設：長期および短期の出張医ならびに固定医を派遣している関連病院は北見赤十字病院、市立稚内病院、市立深川病院、市立士別病院、富良野協会病院、名寄市立病院、遠軽厚生病院、旭川

厚生病院、旭川市立病院、旭川赤十字病院、北見小林病院、町立中標津病院、函館協会病院です。

病理診断：上記の関連施設の症例を中心として年間2000件余りの検体の病理標本の作製を西倉技官が担当し、教授、本間、堀、岸部、菅野が診断を担当しています。

卒前教育体制：講義は教授、本間、堀、岸部、菅野、上原、大石と非常勤講師の飯塚　一先生、橋本喜夫先生、坂井博之先生、木ノ内基史先生が担当。５年生対象の臨床実習は外来の見学のほか教室員による発疹学、皮膚病理、感染症、皮膚外科学のクルズスを行っています。６年生の選択コースの学生にはアドバンスコース、皮膚病理コース、市内総合病院皮膚科コースがあり、どのコースも充実した研修内容を用意しています。医学英語IVは英語での学会形式の症例や研究発表を目標とした実践的なカリキュラムを岸部が担当しています。

卒後教育体制：毎週木曜日午後５時半からは教授と堀による病理組織カンファレンスが、６時半からは本間、岸部、旭川厚生病院の橋本先生による臨床スライドカンファレンスが研修医を対象として行われています。不定期に関連病院の症例のカンファレンスがあります。月一度の抄読会では毎回数名が特定の疾患の最新の治療についてのレビューを行っています。

地域社会への貢献：「皮膚の日」である11月12日（いいひふ）の前後には毎年、市内で一般市民向けに講演と無料相談会を開催しています。

研究体制と実績：山本が表皮分化異常について、本間がポドプラニン分子の機能について、2015年１月に米国シカゴへの研究留学から教室に戻った岸部が表皮バリア形成および種々の皮膚疾患における角層プロテアーゼの機能解析、堀がストレスとアトピー性皮膚炎の関連の研究をしています。研究生の齋藤奈央は表皮細胞壊死のメカニズムを、井川は表皮剥離機構とアトピー性皮膚炎について、澁谷が乾癬の病態についての研究に勤しんでいます。

女性医師の復職支援体制：その他当教室の特色として、教授が二輪草センター（復職・子育て・介護支援センター）のセンター長でもあることもあり、子育て中の女性医師がほぼすべて復職していることがあげられます。復職後は育児短時間勤務制度を利用しながら段階を経て常勤に戻る女性医師も多く、子供の人数や周囲のサポート体制も皆異なるため、今後の若い先生にはロールモデルとなるパターンが見つかるのではと期待しています。また女性医師の支援のみでなく男性医師のイクメン化サポートも実践しています。

当科の最新情報はホームページ（http://www.asahikawa－med.ac.jp/dept/mc/dermat/）やfacebook page（https://www.facebook.com/DermAMU）で公開しています。ここでは国家試験対策のための学内限定公開の講義スライドや学生さんも自由に参加できる勉強会の日程も更新していますのでぜひご活用ください。

腎泌尿器外科学講座

北　　雅史
（第21期生）

2015年医局ＢＢＱ

1973年９月29日に旭川医科大学設置と同時に開講された泌尿器科学講座（後に腎泌尿器外科学講座へ名称変更）は初代黒田一秀教授から第２代八竹　直教授に引き継がれ、2005年６月第３代柿崎秀宏教授が就任しました。１）腎泌尿器外科としての貢献、２）地域医療との連携、３）世界へ向けた情報発信を理念として日々の診療を行っています。この医局便りは２年に一度とのことなので、ここ２年間の現状を報告します。

現在大学では病棟医を２グループ制とし週2.5日の手術日と外来、病棟患者を対象とした週２回の早朝カンファレンスと週１回の外来カンファレンスを行っています。現在大学には教授を筆頭に松本（近畿大学） 安住、北（21期）、玉木（22期）、橋爪、渡邊（26期）岡崎、小林（33期）の９名＋研修医で診療業務を行っています。堀（23期）は大学院、和田（23期）はpittsburgh大学へ留学中です。研修医制度が開始されて以来長らく新人に恵まれませんでしたが、33期性の２人が入局しひさしぶりにfreshな笑い声が医局に響いています。また年齢が近い医者がいるというのが功を奏したのか、その後入局を表明している研修医が続きうれしい限りであります。

診療面において現在oncologyの領域では腎・尿路のみならず、副腎、後腹膜軟部組織腫瘍も含めた良性、悪性腫瘍に幅広く対応し、開腹、腹腔鏡、ロボット支援手術など様々な術式を用い対応しています。特にロボット支援手術は内外から症例を集め、現在年間50例のペースで手術をこなしており、新たな術者の育成にも力を入れております。ただ高額医療機器ですので前立腺全摘除術のみでコストをまかなうのは難しく、腎部分切除術や他科領域での手術などに対して保険適応の拡大が望まれるところです。また現在では標準術式として欠くことのできない鏡視下手術も積極的に行っており認定医増加にむけて術者を育成しています。そのほか柿崎教授が就任して以来新たに強化された小児泌尿器科における重度の尿路性器先天奇形に対する根治術や難治性の尿路狭窄症の対する根治術、腸管利用尿路再建、人工括約筋埋め込み術、尿路結石治療、不妊治療等々、道北道東医療圏における泌尿器科疾患のほぼ全てを網羅し先端的役割を果たす病院として機能しており手術件数はここ数年では600件前後と10年で1.5倍となっております。近年、泌尿器科領域では排尿障害治療薬や分子標的薬などの新規薬剤の開発が進み、内科的治療の幅が広がるとともに治療の選択肢も多様化しています。これら新規薬剤の臨床データを蓄積すると共に排尿障害の分野では小動物を用いた基礎研究を継続しております。最近では2014年に岡崎統合バイオサイエンスセンターへの国内留学から帰ってきた渡邊が非選択性陽イオンチャネルの一つであるTRPM7の尿路上皮間結合への関与を報告し、腫瘍分野では現在大学院生である堀がGnRH antagonist投与によるラットの下垂体及び精巣・前立腺上皮の細胞内小器官の形態学的変化を検討しています。

2014～2015年にかけて柿崎教授が会長となり2014年９月11-12日には旭川にて第49回日本脊髄障害医学会を、2015年９月７－８日には10th pan pacific continence society meeting（PPCS）を、続く９-11日には第22回日本排尿機能学会を札幌にて開催いたしました。2000年に先代の八竹教授が主催した日本神経因性膀胱学会以来の全国学会であり、またPPCSは当教室初の国際学会でもありました。日本脊髄障害医学会では悪天候のなか約450名が参加し、主要テーマを脊髄障害における医療連携とし、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、リハビリテーション科、神経内科など複数の関係診療科が一同に会し、特別講演と２つの教育講演、４つのシンポジウム、208題の一般演題、と多数の発表と闊達な議論が行われました。PPCSでは日本、韓国、中国、台湾、フィリピン、オーストラリアより約250名が参加し、議論を深めるとともにcontinence分野における各国間の交流をはかりました。引き続き開催された日本排尿機能学会では「Continence Medicine －Its Evolution and Challenge－」のテーマのもと約650名の参加者により３つの招請講演、教育講演、４つのシンポジウム、２つのワークショップと239題の一般演題を開催し盛会のうちに終了することができました。開催に当たりましては同窓、同門の先生方より多大なるご支援をいただきましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

眼科学講座

医局長 **佐 藤 栄 一**
（第18期生）

眼科学講座は初代保坂明郎名誉教授から、平成４年７月に吉田晃敏学長（１期）が眼科学教授に就任されました。今年で23年を迎え、順調に入局者数、関連病院数を伸ばしてきました。現在は、公的病院を中心として29の病院に常勤医を派遣しており、16の非常勤病院を含めると、45の関連病院を有しています。当医局も医師不足は否めませんが、継続的な眼科医派遣ができるよう努めております。

平成27年度の眼科医局の近況をご報告致申し上げます。第119回日本眼科学会総会が吉田晃敏学長総会長（１期）・田川博副総会長そして、石子智士医工連携総研講座特任教授（９期）事務局長のもとで、2015年４月16日から19日の４日間、札幌市で開催されました。4500名の出席者を迎え、無事盛会裏に終了致しました。同窓会の諸先生には多大なるご支援、ご協力を賜り、誠にありがとうございました。医局員一同心より感謝申し上げます。今年の新人入局者は、和田剛成先生（34期；現在、遠軽厚生病院）、横山一弘先生（34期；現在、市立稚内病院）の２名を迎えることができた。学術においては、平成27年日本糖尿病眼学会学術奨励賞『福田賞』を大前助教（27期）が受賞されました。旭川医大眼科の看板研究である網膜循環の基礎・臨床研究や、ブタ網膜摘出血管を用いた基礎眼循環研究が評価されました。今後も益々発展させるため皆で奮闘中です。

現在大学内で奮闘しているメンバーを紹介させて頂きます。

吉田学長は多忙な毎日を送っているなか、月曜日の外来を担当している。廣川博之経営企画部教授（２期）は金曜日の初診を担当し、自らの臨床現場を通して病院経営戦略を練っている。石子特任教授は水曜日の外来を担当し、ポリクリ学生の眼底検査で裂孔、剥離の検出で金の卵を救っている。木ノ内医工連携総研講座准教授（12期）は、ぶどう膜炎専門外来のトップで頑張っている。長岡准教授（16期）は臨床、研究のみならず、数多くの会議出席で多忙。花田医工連携総研講座講師（17期）は角膜専門外来のトップで頑張っている。佐藤（18期）は黄斑外来、未熟児外来を担当し、今年医局長６年目突入。外来医長の川井助教（19期）は、緑内障専門外来を担当。横田助教（21期）は網膜神経保護の研究に没頭。西川助教（21期）は斜視・弱視の専門で、育児と臨床の二刀流をそつなくこなしている。病棟医長の高橋淳士講師（22期）は入退院のコントロールで大忙し。手術件数を大幅に増加した。十川助教（25期）は網膜静脈閉塞症外来、網膜剥離手術で奮闘し、時間外の臨時手術の多くを執刀。中林助教（27期）は緑内障外来、医局ホームページ作成を担当し、眼科ホームページはすばらしく良くなっている。谷助教（27期）は、現在開発中のOCTドップラー血流計に奮闘し、論文量産を計画中。大前助教は、今年の糖尿病眼学会における福田賞を受賞した。石居（27期）は東京歯科大の国内留学から戻り、角膜外来は一層パワーアップした。石羽澤（28期）はOCTangioを用いた網膜血管形態評価の第一人者として研究成果を世界に発表した。伊藤（山形大学出身、28期相当）は育休から復帰し、専門である斜視・弱視外来を担当している。川井尚子（29期）は12月から第二子出産のため産休に入る。川口（32期）、斎藤（33期）は後期研修のため大学に戻ってきた。現在斜視・弱視外来を研修している。大学院生は、善岡（札幌医大出身、28期相当）が慶応大学で行った研究成果を立派に仕上げ７月から戻ってきた。学位発表に向けている。下内（31期）は、網膜神経保護の研究での学位発表に向けて奮闘中。高橋賢伍（31期）は、ブタ網膜摘

出血管を用いた網膜疾患の新治療薬アプローチを行っている。宇都宮（31期）は角膜上皮に対するシェアストレスの役割の解明を石羽澤の指導で行っている。宋（32期）はネコを用いた網膜循環動態とその調節のメカニズムの解明を行っている。

最後になりますが、医局員一同更なる発展を目指し日々の臨床・研究・教育に真摯に取り組んで努力を重ねて参ります。今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い致します。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

講師（学内）**岸　部　　幹**
（第19期生）

今年は、本学４期生である原渕保明教授が就任して17年目を迎えた。この17年間、原渕教授は「臨床および研究に熱い情熱と闘志を兼ね備えた人間味溢れる臨床医師の育成」をモットーに、研究面では投稿論文数の飛躍的な増加、海外留学者の増加、学位論文取得者の増加、また臨床面では手術件数の大幅な増加、先端治療技術の導入など、めざましい進歩を達成してきた。研究面では、１）上気道粘膜免疫学：扁桃病巣疾患の病態解明、シラカバ花粉症や小児中耳炎に対するワクチン開発、２）頭頸部癌における分子腫瘍学的・腫瘍免疫学的解析、３）鼻性NK/T細胞リンパ腫における分子腫瘍学的・EBウイルス学的解析、４）上気道、喉頭の神経生理学的研究、の大きく４つのテーマから構成され、日々研鑽されている。これらのなかで、原渕教授のライフワークの一つである、鼻性NK/T細胞リンパ腫の研究については特にその成果が高く評価され、来年度の日本耳鼻咽喉科学会総会で宿題報告をする運びとなっている。現在、研究員の数も増員し、ますます医局が盛り上がりを見せている。

診療面では、先端医療技術の導入を理念とし、頭頸部悪性腫瘍手術における遊離皮弁再建、人工内耳手術をはじめとする高度な耳科手術、声を改善する音声手術、頭頸部癌手術不能例・進行例癌に対する放射線併用超選択的動注化学療法、鼻性NK/T細胞リンパ腫の治療など、耳鼻咽喉科・頭頸部外科のあらゆる領域において精力的に診療を行ってきた。さらに当科が全国に先駆けて導入した低侵襲手術として、内視鏡補助下甲状腺手術（video assisted neck surgery: VANS）、唾液腺内視鏡手術（sialo－endoscopic surgery: SES）がある。症例数は着実に増加しており、最近では全道のみならず本州からも患者が紹介されるようになった。

現在、大学にいる同窓生について報告する。教授の原渕（４期）は、仕事面はもちろんであるが、趣味の風景写真でも才能を発揮し、今年は第12回丘のまちびえいフォトコンテストでグランプリを獲得した。また、長男の原渕翔平（富山大卒）が入局し、大学での初期研修をそろそろ終了させることもあり、公私ともに非常に充実している。准教授の林（８期）は、学外ではその弁舌を活かして「ランチョンセミナーの帝王」の異名を取り、学内では病院GRM（ジェネラルリスクマネージャー）も務め、多忙に変わりはない。講師の片田（14期）は病棟医長業務に加え、様々な学会のシンポジスト、ランチョンセミナーとして引っ張りだこの状態である。講師の高原（16期）は外来医長２年目となり、臨床・研究ともに中心的な存在で、教授並みに全国を飛び回っている。特に、唾液腺内視鏡手術では、道内から患者を集めている。岸部（19期）は國部（15期）から医局長を引き継いで２年目となり、雑務との格闘の毎日である。また、めまい塾の主任研究員として、めまい症例と奮闘している。上田（22期）は２年前にスイス留学から帰国し、教室の臨床・研究の中心を担っている。留学中のテーマであったEBウイルスに関する研究を発展させている。長門（23期）は１年前にアメリカ留学から帰国し、現在宿題報告にむけて再びベッドフリーとなり、第２の研究生

活をスタートさせた。野村（23期）は甲状腺内視鏡手術で、日本でも年間あたり２番の症例数を誇る術者となった。最近では、海外からの招聘もあり、海外で手術、講義も行っている。駒林（24期）は学位研究が終了し、臨床に戻り、鼻内内視鏡手術を中心に臨床を行う傍らで、学位研究を発展させ宿題報告のデータも挙げている。大高（26期）は学位取得に向けた研究生活（扁桃病巣疾患：IgA腎症の病態解明）が終わり、臨床に戻ってきた。熊井琢美（30期）は米国オーガスタのジョージア州立大学がん研究所に留学して２年目を迎え、腫瘍免疫の研究も仕上げの段階に入っている。大原（30期）、平田（32期）は今年、大学院へ入学し研究生活をスタートさせた。現在、免疫病理学講座で研究に没頭し、宿題報告に向けてデータを量産している。また、吉田（30期）は、昨年寿を目指すため退局して本州へ旅立った。今年、めでたく12月に式を挙げる。道塚（34期）は札幌東徳洲会病院での２年間の初期研修を終え、大学での耳鼻咽喉科研修も終わりに近づいている。研修医では、初期臨床研修２年目の菅原（36期）、林隆介（36期）、初期臨床研修１年目の荒木（37期）、小松田（37期）が大学で研修を積んでいる。来年はこれら研修医に加え、初期臨床研修を修了させ、旭川厚生病院からは河野（36期）、JCHO北海道病院からは保立（36期）も加わる予定である。

続いて関連病院について。JCHO北海道病院（旧：北海道社会保険病院）では、北海道のめまい診療を牽引する金谷（診療部長：２期）を、唐崎（旧姓松井、医長：15期）、保立（研修医：36期）が頑張って支えている。北見赤十字病院では、和田（耳鼻咽喉科部長：９期）のもと、単身赴任である石田（頭頸部外科部長：22期）、新婚の寒風澤（医員：33期）が昼夜問わず活躍している。釧路労災病院では、北南（部長：４期）を石井（部長：17期）、上村（副部長：29期）が支えている。旭川厚生病院では、昨年副院長に昇任し、多忙を極めている畑山（主任部長：６期）を吉崎（医長：22期）、河野（研修医：36期）ががっちりサポートしている。名寄市立病院では、盤石の体制となった齋藤（診療部長：８期）と野澤（主任医長：22期）が日本最北の耳鼻咽喉科常勤医として頑張っている。日鋼記念病院では、大崎（科長：９期）と久保田（医員：29期）で、大きな頭頸部外科手術もこなしている。王子総合病院では、童顔の太田（主任科長：22期）と、強面の佐々木（科長：27期）で頑張っている。帯広北斗病院では、坂東（副院長、頭頸部腫瘍センター長、部長：14期）と後藤（部長、頭頸部腫瘍センター 副センター長：19期）が帯広の頭頸部外科を一手に担っている。札幌徳洲会病院では、執行（部長：16期）と片山（部長：16期）で、同期同士、仲良くやっている。遠軽厚生病院では、森合（主任医長：20期）、と単身赴任の山木（医員：32期）で頑張っている。一人病院としては、岩見沢明日佳病院に金井（４期）、豊岡中央病院に長野（副院長、部長：７期）、森山病院に内田（６期）、札幌東徳洲会病院に國部（部長：15期）が勤務している。

診療所については、下記の通りとなっている。

千葉県鎌ヶ谷市	内藤（１期）
旭　川　市	熊井（３期）、野中（３期）、市川（７期）、金関（７期）、小林（８期）、今田（９期）、大島（10期）
札　幌　市	奥出（３期）、田中（14期）、安部（15期）
室　蘭　市	上戸（６期）、荻野（12期）
富良野市	林（７期）
恵　庭　市	中島（８期）
苫小牧市	安達（９期）
帯　広　市	半谷（９期）
新ひだか町	岩切（11期）
美　幌　町	榎本（11期）
深　川　市	本間（13期）
登　別　市	横山（13期）
士　別　市	荒川（14期）
釧　路　市	浅野目（15期）

北　広　島　市　　安達（16期）

以上、耳鼻咽喉科・頭頸部外科の同窓生は、旭川のみならず全道、全国そして海外で活躍中である。今後もさらなる成果を上げて、また本誌に報告できるよう研鑽していく所存である。

産婦人科学講座

北日本産婦人科学会野球大会

教授　**千　石　一　雄**

初期研修制度の必須化を契機に旭川医大で研修をする学生が減少した。時期を同じくし、産婦人科に関しても全国的に志望学生が減少し、当産婦人科教室においても新入医局員がなかなか増加しない状況が続いている。

そのような厳しい状況ながら、産婦人科診療に使命感を抱き、明日の産婦人科医療を担う若手医師が旭川医大産婦人科および関連施設で活躍している。

今回の同門会誌には従来とは異なり、最近入局した若手産婦人科教室同門を中心に活躍状況を報告する。

今年春卒業し見事国家試験に合格した37期生　石田、早坂は名寄市立病院で初期研修を始めた。９月に福島で開催された北日本産科婦人科学会の野球大会、夜の演芸会においても大活躍を見せた。36期の宇津野は大学で初期研修をしており、同じく北日本産婦人科学会演芸会で体を張って頑張った。竹内は自ら希望した稚内市立病院で生き生きと楽しく研修に励んでいる。全国レベルの漢方の学会において見事な発表を行った。林（小林）は無事第１子を出産し、その後復帰し旭川厚生病院で研修を続けており、すでに欠くことのできない人員となっている。35期村上は後期研修、産婦人科専攻医１年目となり一歩一歩産婦人科医として歩を進めている。33期板橋は名寄、大学での研修後、現在は稚内市立病院で趣味の吹奏楽など音楽と手術の技量アップに励んでいる。松尾は旭川厚生で研修後、10月に遠軽から稚内に移動し、分娩、手術に精力的に取り組んでいる。水﨑は名寄で研修をした後、４月から旭川厚生病院で主に婦人科内視鏡手術の技術習得に頑張っている。３人は来年産婦人科専門医試験を控えており無事合格することを祈っている。

32期生はこのたび全員産婦人科専門医の試験に合格し、今後はさらなるスキルアップとサブスペシャリティーの取得を目指すことになる。中西は名寄市立病院で専門医として自覚を持って産婦人科診療を支えている。水無瀬学は大学で不妊診療に携わりながら、大学院生として精子形成関連遺伝子の同定および機能解析に関する研究を始めている。水無瀬萌も大学周産期で明るいキャラを武器に奮闘している。医局のイベントには欠かせない存在になっている。30期中嶋は１年間の大阪周産母子センターでの研修を終え、遠軽を経て10月から大学で周産期診療の中核を担っている。蓑輪は第１子を出産し、札幌渓仁会に勤務している。29期岡本は現在名寄市立病院で中堅として活躍しており、来春からは婦人科腫瘍医をめざし癌研有明病院で研修を予定している。山下は２年間の大阪周産母子センターでの研修を終え、本年度は旭川市立病院に勤務している。27期小野は名寄市立病院に勤務。いまだに野球大会ではキャッチャーとして大活躍している。寶田は現在大学の婦人科グループで中核として活躍しており、さらに婦人科悪性腫瘍手術の習得を目指し頑張っている。上田は大阪循環器病センターでの研修を終了し、現在は大学の周産期の核として活躍している。また、大学院生として博士論文の作成にも邁進している。大石は11月の出産に向け産休に入っている。妊娠中も旭川厚生病院で周産期診療の中核として活躍していた。27期吉澤は初期臨床研修制度必須化

後初めて産婦人科に入局した貴重な人材であり、出産した後も大学に復帰しママさん医師として子育てと周産期診療を両立し頑張っている。

旭川医科大学産婦人科の将来を背負う若手医師の仲間達の現状を記述した。

先輩の同門も大学や旭川および札幌、道北の関連病院、または旭川で開業医として活躍している。また、大学の関連を離れ九州、京都、岡山の大学病院、札幌や東京の病院の勤務医、開業医として広く全国で活躍している。

残念ながら、産婦人科教室同門でこれまで６人の方が亡くなられている。

他大学出身であるが53年卒の我々が０期生と呼んでいる長谷川天朱、１期　斉藤聡史、３期　斉藤康子、佐藤卓、７期　内潟芳之、13期　碁石勝利　各氏のご冥福を祈ります。

放射線医学講座

講 師　**佐々木　智　章**
（第25期生）

旭川医科大学放射線医学講座は初代の天羽一夫教授のもと開設され、二代目油野民雄教授のもとに大きく発展し、三代目高橋康二教授が2014年に就任された後、現在に至っています。高橋教授は『診療に貢献できる放射線科専門医』をモットーに臨床・研究・教育に力を入れています。

現在、旭川医科大学放射線医学講座は『画像診断・IVR』『核医学』『放射線治療』の三部門体制に分かれております。画像診断・IVR部門は、高橋教授を中心として８名体制で取り組んでおります。画像診断業務はCT、MRI、超音波検査の撮像マネジメントからレポート作成を行っています。画像診断業務では最近は大型機器の更新が相次いだことが大きなニュースです。2013年度より3T MRI装置（GE社製Discovery 750W）、2014-2015年度よりDual energy CT（GE社製Revolution GSI）および256型検出器MDCT（GE社製Revolution CT）が導入されており、これらの機器から生み出される新たな診療情報を有効活用するよう研鑽しているところです。血管造影/IVRにおいては主に肝細胞癌や頭頸部癌に対する経血管的治療、外傷や術後出血あるいは産後出血に対する緊急止血術、膿瘍に対する超音波あるいはCTガイド下のドレナージ、CTを用いての経皮的生検など多岐にわたっており、診療科の垣根を越えたチーム医療の一環として貢献しています。

また大学主導の遠隔医療センターを活用し、主に道東・道北地域の医療を支えているのも当講座の特徴です。これらの道北・道東地域は画像診断医が極端に少なく、遠隔画像診断システムを用いての当講座への読影依頼の需要は増加しつつあり、これに応えていくことが今後も望まれています。

診療に貢献できる放射線科専門医を育成するためには教育も重要と考えています。当講座では、高橋教授の豊富な人脈を頼りに学外の著明な先生方との連携に力を入れています。アイオワ大学放射線科教授の佐藤豊先生、聖路加国際病院放射線科部長の栗原泰之先生、友仁山崎病院病院長（前滋賀医科大学病院教授）の高橋雅士先生に当講座の客員教授をお願いしております。諸先生方は当講座を親身に応援し、時には旭川まで足を運んで下さり、学生や研修医を含め熱心に指導していただいております。

核医学部門は２名の専門医のもと、臓器の機能評価、FDG－PET/CTによる腫瘍診断を中心に展開しています。FDG－PET/CT検査数は年々増加傾向で、各診療科の期待が非常に高いことを

実感します。一方RI病棟を２床有し、放射性ヨードを用いたBasedow病や甲状腺癌治療にも重きを置いております。99mTc－GSAを用いた肝予備能評価、99mTc－MIBIを用いた腫瘍・心筋viability評価、FDG－PET/CTを用いた悪性リンパ腫と良性リンパ節腫大の鑑別、SUVナビゲーターによる測定精度向上の研究などで成果を上げています。

放射線治療部門は３名体制（２名の専門医）で、がん診療の３本柱の一つである『放射線』を用いてがん診療に貢献しています。最近２台のライナック治療装置もVARIAN社CLINAX－iXとCLINAX true Beamへと更新され、今後も放射線治療に対する期待の高さを実感しています。診療では通常の外照射に加え、頭部や体幹部の定位放射線治療、IMRT、腔内照射を行っています。多分割照射法、子宮頸癌高線量率腔内照射法、脳腫瘍に対する定位的放射線治療におけるMRIの有用性の検討などの研究面でも成果を上げています。

放射線科医が全医師数の一割程度を占める欧米とは異なり、我が国では３％程度と絶対的に不足しています。専門医派遣の要請も急増している状況の中で、道北・道東の放射線診療を担える人材育成を今後も目指していきたいと考えております。

旭川医科大学放射線医学講座ならびに皆様の御施設がこれからも発展していくことを祈念致しますとともに、今後とも御指導・御鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

麻酔・蘇生学講座

旭川医科大学麻酔蘇生学講座 岩崎寛教授 退任記念　平成27年3月28日 於：旭川グランドホテル

教授 **国 沢 卓 之**
（第19期生）

麻酔・蘇生学講座の特徴は、歴史が浅い分、若さにあふれ活気があり、ありがたく思います。前任の岩崎寛名誉教授のモットーは『仕事は楽しくしよう』であり、抑圧されて仕事上のストレスを感じる医局員は少なかったのではないかと思っています。これらが影響してか、ありがたいことに近年も、麻酔科医を目指して入局を希望してくれる若者が現れております。将来を考えるととても嬉しく思いますが、手術件数の漸増と業務内容拡大により、仕事量が減らない環境は、開学以来変わらない状況ともいえます。

昭和49年初代小川秀道教授によって開設された麻酔・蘇生学教室は、平成10年に岩崎寛教授体制になり、平成27年10月から私が三代目の教授を拝命致しました。同門会員数も100名を超えるようになっておりますが、先代の偉大な両名誉教授の良さを踏襲しつつ、さらなる発展を目指して、歩みを開始したところです。大学では手術麻酔以外にも、救急・集中治療部門にも積極的に関わり、ペインクリニック・緩和医療にも携わっています。このように、成熟してきた教室は全国の麻酔学教室の中でも高い評価を頂き、特に術中経食道心エコー検査、静脈麻酔、超音波ガイド下神経ブロック、筋弛緩薬については精力的な臨床と研究を行うことが可能となっておりまして、例年、他大学からの研修を引き受けさせていただいております。

現在、大学内で奮闘しているメンバーを紹介させていただきます。

「髙畑准教授（7期）は研究・臨床と努力を怠らない。鈴木准教授（14期）は気道確保のスペシャリストで全国に引っ張りだこである。国沢（19期）は、経食道心エコーと静脈麻酔を日々楽しんでいる。笹川（23期）は、筋弛緩薬・神経ブロック・基礎研究と若手医局員を力強く牽引する。黒澤（23期）は、教室IT関係、新人教育をこなしつつ、医局長として教室の中心である。菊地（23期）

は小児麻酔全てを担っている。三國（24期）は米国のLABを目指して研究に明け暮れる。神田浩嗣（25期）は、心臓麻酔をこなしながら、積極的に研究に取り組んでいる。遠山（26期）は、心臓麻酔の中心として学内外で活躍する。神田恵（26期・旧姓金尾）は、臨床・研究をこなし、女学生の憧れの的である。本田高史（東海大学卒）は、どんな業務も完璧にこなしてくれる。小野寺（28期・旧姓永井）は、産休・育休中も大学に顔を出してくれ、研究やいろいろな業務をこなしてくれている。本田奈緒（28期・旧姓西野）いろいろな経験を積み、どんどん成長していく。菅原（29期・旧姓長谷川）は、静脈麻酔の中心で、講演・執筆と大忙しである。岩崎肇（埼玉医大卒）は、専門の筋弛緩薬に加え、心臓麻酔でも力を発揮し始めた。柏木（札幌医大卒）は、忙しい臨床の中でもしっかり研究を行っている。長島佳代（日本医大卒）は、知識も経験も豊富な上に、新しいこともすぐ吸収していく。佐古（30期）の症例にしっかり向き合う姿は、麻酔科医の鏡である。佐藤慎（31期）は、マルチな才能を遺憾なく発揮する。佐藤泉（31期・旧姓秦）は、多くの領域で成果を挙げている。和泉（31期）はセンスと人柄で皆から頼りにされている。平川（31期）は、臨床業務をそつなくこなし、若手に沢山の気配りをしてくれる。井尻（32期・旧姓石山）は何でも素早く、臨床能力が高く、圧巻である。島田舞衣（32期・旧姓井関）は、静脈麻酔のホープとして期待されている。鷹架博之（33期）は、着実に成長している。山本兼二（鳥取大学卒）の仕事の丁寧さと信頼の厚さは、頭が下がる。朝倉（34期）は、できることがどんどん増え、研究にも積極的である。多田（34期）は、全てに確実で、安心して何でも任せられる。」

「藤田（札医大卒）教授は休日無く全国を駆け巡っている。小北准教授（8期）は集中治療部の中心として運営、教育に従事している。長島道生（22期）は、ICUの副部長として手腕を発揮している。稲垣（27期）は、帰国直後から臨床・研究に従事している。林健太郎（29期）は、救急のみならず心臓麻酔でも存在感を示している。鷹架健一（31期）は、救急・麻酔と何でもそつなくこなしている。」

以下に、教室関連病院等での同窓生の動向を記載させていただきます。

旭川ペインクリニック病院〔的場（5期）、赤間（8期）、寺尾（14期）、岡田（16期・旧姓木村）〕
旭川厚生病院〔大友（25期）、赤坂（27期）、原田（北大卒）、塚田（31期）〕
旭川脳神経外科病院〔横浜（17期）〕
市立芦別病院〔小佐川（13期）〕
遠軽厚生病院〔松本（14期）、金木（30期）〕
神居ペインクリニック〔高田（7期）〕
国立病院機構帯広病院〔朝井（19期）、島田紀子（25期・旧姓池田）、呉（31期）〕
クラーク病院（札幌）〔安田（17期）〕
旭川圭泉会病院〔櫻井（10期）〕
市立旭川病院〔山岸（23期）、松本恵（大分大学卒）〕
市立札幌病院〔斉藤智誉（15期）、遠藤（21期）、勝見（26期）〕
NTT東日本札幌病院〔山澤（6期）〕
旭川医療センター〔渡邉（札幌医大卒）〕
士別市立病院〔西田（15期）〕
新さっぽろ脳神経外科病院〔木村（12期）〕
松田整形外科記念病院（札幌）〔山崎（17期）〕
北海道医療センター〔藤本（9期）太田（22期・旧姓川向）、長堀（島根大学卒・旧姓川原）、
　田中（30期）、三浦（31期）、富田（北大卒）〕
環状通東整形外科（札幌）〔野崎（17期）〕
札幌禎心会病院（札幌）〔岩崎寛（名誉教授）、阿部（25期）、山本邦彦（26期）〕
手稲渓仁会病院〔武田（17期）〕

国立成育医療研究センター〔後藤（27期)〕
静和記念病院（札幌）〔長島君元（15期)〕
医療法人社団我汝会えにわ病院〔岸（13期)、村山（19期)、横田（22期)〕
滝川脳神経外科病院〔中垣（24期・旧姓河本)〕
十勝いたみのクリニック〔野坂（10期)〕
とくひろ整形外科クリニック〔里（6期)〕
豊岡中央病院〔板谷（14期)〕
永山ペインクリニック〔竹田（9期)〕
名寄市立総合病院〔舘岡（18期)、丹保（25期)、衛藤（33期)〕
日本大学医学部内科学系統合和漢医薬学分野講座〔上田（19期・旧姓山本)〕
函館五稜郭病院〔仙石和文（7期)、仙石早苗（9期・旧姓竹内)、黄（11期)、平井（12期)、
松野（25期)、斉藤美也子（14期)、薬師寺（32期)、宋（中国医科大学卒)〕
国立病院機北海道がんセンター〔川原（14期・旧姓五十嵐)、土屋（20期)、森下（20期)、
上村（埼玉医大卒・旧姓新平)、安濃（31期)〕
札幌心臓血管クリニック〔五十嵐（22期)〕
本間クリニック〔本間（13期・旧姓今村)〕
恵み野病院〔高階（31期)〕
留萌市立病院〔川田勝己（13期)、川村（帝京大卒)〕
函館おおむら整形外科病院〔大村（岩手医大卒)〕
札幌南青洲病院〔岩波（10期)〕
諏訪中央病院〔関（31期・旧姓小林)〕
信州大学附属病院信州がんセンター緩和部門〔間宮教授（島根医大卒・旧姓近石)〕
米国留学University of Michigan〔川田大輔（24期)〕
米国留学University of Miami〔高橋（27期)、飯田（杏林大卒)〕
道内〔中尾（18期)、藤原（22期・旧姓相沢)、三田村（24期・旧姓南)、下岡（28期・旧姓岸)〕
道外〔端本（12期・旧姓松山)、李（22期)、柏手（22期)、西尾（22期)、山田（23期・旧姓筱井)、
林大（24期)〕

麻酔・蘇生学教室は、世の中のニーズに伴い成長させていただいておりますので、今後もその成長を続けていけたらありがたいと願っております。

脳神経外科学講座『医局の方向性』

教授 **鎌　田　恭　輔**

春になり若い研修医達が頑張っている姿をみながら、逞しく育ってきている研修医の先生達に囲まれ、粛々と仕事をしています。様々な出来事、困難がありましたが、その同門会や大学関係者を初めとする皆様の暖かいご支援、お言葉と医局員達の協力に支えられて、頑張ってこられたものと感謝しています。

今年度は野呂昇平先生と山口なつき先生の二人が後期研修医として入局してくれました。また、現段階では本年の卒業した３人の学生が入局を表明してくれています。大学に研修医の先生達が大学を選択してくれることはとても嬉しいこと

ですが、その思いに報いるための十分な教育、臨床、研修体制を整えていくことも急務と感じています。研修の充実のためには、学閥などを取り払った研修ネットワーク作り、私の研究専門である脳機能研究は、日本国内のみならずオーストリア、スイス、フィンランドと様々な脳機能解析法を開発しています。この開発アイデアは各国のマニアが集まることで、“国産アイデア”から脱却した大きな可能性を秘めた研究を遂行することができています。本年は１人がドイツ、もう一人はオーストリアに留学してきました。言語の壁を無くし、交渉力を培うことも、今後旭川医科大学で必要な教育であると信じています。臨床は近隣の病院、地域からの信頼を少しずつ杵築上げることで、赴任当初は180件程度であった手術件数は、昨年は340件にまで増えました。これは誠意のこもった治療と真摯な姿勢で近隣の医師のみならず、患者、さらには同じ大学内での仲間同士の信頼関係を構築することが最も重要なことだと信じています。

臨床、研修、教育いずれも仲間との協力体制、信頼関係が大切であり脳神経外科に限りませんが、これらを大切にすることが組織人としての医局のあり方ではないかと感じています。

脳神経外科では脳、脊髄機能損傷を患った患者が多くいます。この失われた神経機能野回復には、今はやりの“iPS”.“ES”細胞のみでは複雑な機能の再建は不可能です。その一方で私の専門としている脳機能データ解析は膨大なビックデータを扱うため、効率的な情報処理方法を開発中です。すでに人工知能（AI）も将棋勝負のみならず、自動車運転、診断など多くの分野で発展してきています。様々な脳情報を得ることができる脳神経外科は多くの手術に加えて、患者の直面した”痛み”とも戦う研究をすることができる高い専門性と広い応用性を有する診療科として頑張っています。若い学生、研修医の皆さんが少しでも興味をもってもらえると嬉しく思います。

臨床検査医学講座

教授 **藤　井　　聡**

臨床検査医学は、検査を通じて医療の進歩に寄与する専門領域であります。臨床においては、検査のオーダ、サンプリング、保存、測定の理解と、検査値の質を高める努力が求められます。検査値の解析にあたっては、生理的変動や病的要因による変動を考慮しつつ、一方で測定の標準化や精度保証システムの充実が要求されます。また、臨床のニーズに応えるため、新たな検査法の研究・開発に常に注力しています。

医学生、看護学生、近隣の検査技師学校生などへの教育では、質の高い検査値を得て、その値を正確に解釈することをハイレベルの授業や実践的実習を通じて丁寧に指導することに主眼をおいています。学生講義・実習は病院の臨床検査・輸血部と一体となって最前線の臨床検査技師の方々にも協力いただいています。臨床検査・輸血部のスタッフ数は、教員４名、臨床検査技師27名、事務職員１名、非常勤臨床検査技師10名、非常勤技能補助員１名であり、年間の検査実績は約347万件と高いコストパフオーマンスを維持しています。中央採血室の採血業務、血液・尿などの検体検査、心電図・脳波・肺活量などをみる生理機能検査、心臓や血管の超音波検査、感染症の診断や感染症関連情報の提供、輸血部門に分けられます。正確・精密な検査結果を日夜迅速に提供し、血液製剤の供給や安全に輸血を行うための検査をしています。

平成12年に自治医科大学臨床病理学講座より赴任された伊藤喜久前教授は平成25年３月に退職されました。尿蛋白検査が研究テーマで、アルブミン・α1－ミクログロブリンなど血漿・尿蛋白標

準品の作製や導入に関わっておられました。

平成26年４月から藤井　聡が着任しました。牧野幹男教授、池田久實教授、伊藤喜久教授が尽力された臨床検査医学の講義・実習の方針を引き継ぎ、生きた検査値の解釈の面白さを伝えるべく実践的実習に加えreversed CPCを行っています。研究では先端機器や最新試薬の性能評価はもちろん、各科の諸先生のご指導を仰ぎ、業務のなかで遭遇する疑問や新しい知見から、臨床検査・輸血に携わる者だからこそできる学術研究を発展させています。これからは疾患の予防、早期診断や鑑別診断に役立つ新しい検査法の開発を目指し、長期間にわたって診療に役立つような新しい検査法を開発していくことが使命と考えます。

赤坂和美講師は平成14年に内科学講座循環・呼吸・神経病態内科学分野（旧第一内科）から異動となって以来、臨床検査技師とともに病院にて心・血管超音波検査を施行しています。平成21年からは病院臨床検査・輸血部副部長としての業務も行っています。心臓や血管疾患の治療に携わる各科からの信頼は厚く、また勉強にくる医師や検査技師からもその懇切丁寧な指導が好評です。

河端薫雄助教は平成６年に病理学講座免疫病理分野（旧病理学第二）から異動となって以来、病院の臨床検査・輸血部での検査業務の傍ら、学生教育や研究にも活躍しています。方法論に明るく、幅広く精緻な知識に基づいたディスカッションを業務や学生教育に活かしています。研究面では蛋白の細胞内凝集等を解析しています。

奥村峰志助教は平成26年６月から臨床検査・輸血部で自己血輸血等を担当しています（整形外科と兼務）。

幸村近前助手は平成14年３月まで当講座で勤務されていました。現在は市立旭川病院循環器診療部長としてご多忙ですが、医学生や看護学生の講義のために時間を割いていただいています。臨床経験に基づいたわかりやすい講義が評判です。

また、旭川厚生病院小児科主任部長の坂田宏先生には、ご多忙な中で医学生の講義をしていただいています。臨床現場最前線での生きた検査の話は、学生の心を捉えています。

紀野修一前臨床検査・輸血部長は、現在は日本赤十字社北海道ブロック血液センター副所長として多忙な業務の中、医学生に輸血医学の講義をしていただいています。

旭川医科大学病院は、日本臨床検査医学会の認定研修施設です。臨床検査医学の研修を希望する先生を受け入れるとともに、臨床検査専門医を目指す方をサポートします。臨床検査医学の研修や新しい検査法の習得や開発に興味のあるかたの来訪を心より歓迎いたします。また、同窓会の皆様が様々な臨床研究を進めるにあたって、検体の採取、保存、整理から必要となる検査項目や測定に関する相談にいつでも対応しています。どうか気軽に相談ください。

皆様のお力添えに感謝をしつつ、これまで以上に教育・研究・診療に努力を重ねたいと思っています。皆様におかれましては、今後とも臨床検査医学講座に対するご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

歯科口腔外科学講座

竹　川　政　範

歯科口腔外科は顎・顔面・口腔の外科的疾患を治療する歯科医師の集団で、本学の卒業生はおりません。しかし歯科大学卒後すぐ研修や大学院での研究を本学で開始したものがほとんどで、旭川医大を思う気持ちは皆様と同じです。このような歯科口腔外科学講座の現状を知って頂きたく、ご紹介をいたします。

同窓の先生方には日頃より心疾患、血液疾患、糖尿病などの基礎疾患を有する患者さんの抜歯をはじめとする歯科診療のご紹介を多数いただいております。このような基礎疾患を有する患者さんの口腔ケア含めた歯科診療は、私ども歯科口腔外科の重要な仕事であります。安全に歯科診療を行

うために、同窓の先生方から患者情報を提供頂いておりますこと大変感謝いたしております。先生方からの情報を「基礎疾患を有する患者の歯科診療上での注意点」として一般歯科医師と共有して病診連携を行っており、医科と歯科をつなぐ医科歯科連携のパイプ役となっております。また、私どもは、患者様の周術期口腔ケアに関与することで、医療スタッフと共に患者さんの生活の質向上と疾病予防に努力しております。

歯科口腔外科では、口腔機能の回復（口腔リハビリテーション）を講座の目標として掲げております。歯科口腔外科領域で扱う疾患は口腔の奇形、変形、炎症、腫瘍、口腔顔面外傷、顎関節疾患などであり、最近では歯科インプラントにも取り組んでおります。その中のいくつかについて紹介させて頂きます。奇形の中では口唇裂・口蓋裂に関して同窓の小児科・産婦人科の先生方から多くのご紹介をいただいております。当講座では診療科創設以来、口唇裂・口蓋列の手術はもとより、言語治療、歯や顎発育のコントロール、顎矯正手術など生後から成人になるまで一貫した治療を行っています。中でも口蓋裂児に対しては出生直後からHotz床を使用して哺乳機能の確保、口蓋形態のコントロールを行い良好な結果を得ています。さらに成長に伴って歯列矯正治療が必要な場合は、矯正歯科専門医と連携しながら共同で治療に当たっております。その際、顎裂部への骨移植や顎発育抑制の生じた場合の顎矯正手術を行っております。上顎劣成長、下顎前突症など顎変形治療では咬合と審美性の回復を目的に積極的に外科矯正手術を行い、現在まで300例を超える症例を有しております。

舌癌や歯肉癌、口腔特有の歯原性腫瘍等の口腔腫瘍に関しましては、「手術後に口から食べることができる治療」を目標に腫瘍切除後の再建に歯科インプラントを利用した口腔再建を行っております。

研究面では歯科口腔外科では顎骨の切除を行うことが多く、切除後の顎骨再建のため骨移植、人工骨開発、歯や骨の再生の研究を中心に行っております。最近では細胞・組織工学的技術によって歯・骨を作る再生医学の研究を進めており、大学院の研究テーマでもあります。さらに「歯の喪失が脳機能にどのような影響をもたらすか」に関して咀嚼と脳機能についても研究を進めております。

社会貢献としまして、旭川保健所、旭川歯科医師会とともに、地域における口腔ケアの普及をテーマに学術大会や多種職合同の講演会などの開催、またHIV拠点病院の歯科として道北・道東オホーツク地区の歯科医療従事者を対象にHIV患者の歯科診療に関する学習会や講演会の開催を毎年行っております。また国際貢献では、毎年12月下旬に、アジア地域発展途上国における口蓋裂未治療患者の無料手術を、日本口唇口蓋裂協会のメンバーとして、特にベトナム社会主義共和国において行っています。これには吉田学長の裁量の下、当科口腔外科医２名、麻酔科医１名、手術部看護師１名のチームで参加し、昨年からは医学科、看護学科の学生も数名同行してアジアの医療過疎地での診療を体験、学習させております。

最後に歯科口腔外科の医局員は麻酔科・蘇生科での研修や市立旭川病院、旭川赤十字病院、釧路労災病院、帯広徳洲会病院、回生会大西病院、臨生会吉田病院、深川第一病院などの関連病院や患者紹介元の多くの医院、病院で同窓会の先生方にお世話になっています。どうぞ今後とも末永くおつきあいのほどよろしくお願いいたします。

救急医学講座（救命救急センター・集中治療部）

准教授　小　北　直　宏
（第８期生）

旭川医科大学で働くメンバーの一員として、当講座の現況を報告させていただきます。

救急医学講座は、救命救急センター、集中治療部はもちろん、高気圧酸素治療部、ならびに大学の臨床シミュレーションセンターの運営にも関わっています。

【救命救急センター】

救命救急センターを開設して約５年が経過しました。20床の病床（救命救急センター16床、ICU ４床）で運用しています。救命救急センターとしては、旭川市内だけではなく、道北圏の救急医療を支えるために日夜努力をしております。従来地域で完結していた医療がいろいろな事情で難しくなり、本学が最後の砦として期待されるようになってきています。そのため、各地から昼夜を問わず患者の搬送依頼があり、当科だけではなくすべての診療科の協力のもとにそれらの患者さんを救命救急センターが窓口として受け入れています。旭川医科大学の卒業生の多くが診療をしている地域が道北圏であることを考えると、地域で働く皆様に安心を提供することが大きな使命と考えています。ただ当然受け入れるだけでは、ベッドがなくなりますので、旭川市内を中心に多くの病院の協力を得て、患者さんの流れがよどむことのないようにしています。これは旭川医大の同窓生の皆様をはじめ、多くの方の協力のたまものと感謝しています。

さらに平成27年８月より関連施設である名寄市立総合病院にも救命救急センターを開設し、本学からスタッフを派遣、上川北部および宗谷圏の救急医療の一翼を担うものと確信しております。

【集中治療部】

手術数の増加に伴い、術後集中治療を必要とする患者さんが増加していました。また、救命救急センター開設後は交通外傷をはじめとして、集中治療を必要とする患者さんも増加していました。集中治療部は従来６床で運用していましたが、十分に患者さんを収容できない状態が続いていたため、平成25年２月より10床に増床され、さらに平成26年12月からはいわゆるスーパーICUと言われる、より質の高いICUとしての評価を受け運用しております。

【高気圧酸素治療部】

当院には、北海道で３台しかない第２種装置（空気加圧で最大７名まで同時に治療可能）が設置されています。骨髄炎、突発性難聴などの治療のほかに、急性一酸化中毒、減圧症の治療にも使用しており、北海道における救急医療の欠かせないツールとなっています。

【災害拠点病院、２次被ばく医療施設】

北海道の要請を受けて、本学も災害拠点病院、２次被ばく医療施設となりました。東北大震災の後、災害医療、被ばく医療を提供することは、本学の使命の一つとなっています。

【ドクターヘリ・ドクターカー活動】

救急現場に一刻も早く医師が駆けつけて初期診療を行い、救命率を向上させることを目的としているドクターヘリ事業に対し、本学は、フライトドクター、フライトナースを派遣することによって運行に協力するとともに、ヘリポートを整備し、また格納庫の敷地を提供することによって特に冬期間の運航に貢献しています。また平成27年４月よりドクターカーの運用も開始し、ヘリが飛べない悪天候時などのさらなる救急体制の充実を図っています。

【臨床シミュレーションセンター】

本学の学生、研修医、看護師を始め、地域にシミュレーション教育を提供しています。昨年度、

本年度は、スーパーサイエンスハイスクールの高校生、また中学生の利用もあります。

【救急医療の教育】

心肺蘇生、外傷、集団災害等のオフジョブトレーニングを北海道全域で開催しています。これは北海道で働く医療従事者により良い医療を行うためのトレーニングとして好評を得ています。

これらの業務を支える，現在のスタッフは藤田智教授（札医大卒)、小北直宏（８期)、岡田 基（自治医大卒)、小林厚志（21期)、長島道生（22期)、妹尾一誠（22期)、内田大貴（25期)、渡邊賢二（26期)、稲垣泰好（27期)、林健太郎（29期)、中嶋駿介（30期)、石橋 佳（31期)、鷹架健一（31期)、川口 哲（32期）と名寄市立総合病院救命救急センターに所属する西浦 猛（18期)、八巻 多（19期)、丹保亜希仁（25期）の総勢17名です。

地域医療教育学講座

准教授 **野 津 司**
（第10期生）

2010年に講座が発足して以来，所属は筆者である10期の野津のみです．一人と言うことで，業務は多忙で講座員を探しておりますが，地域医療経験者を教室に連れてくることは，それはそのまま地域医療の現場に穴を作ることになり，それでは本末転倒になるというジレンマを抱えています．さて講座の担当する教育に関してですが，一学年対象の早期体験実習I，二学年対象の早期体験実習II，一学年対象の地域医療学，六学年対象の地域医療実習のコーディネーター，責任者を務めています．現在困っていることは担当する全ての実習に言えることですが，地方の医療・福祉施設の受け入れ先が不足していると言うことです．現場はどこでも人材不足であり，学生教育に力を貸す余力をなくしています．地域医療実習は，毎年４－７月にかけての12週間で行われますが，一人の学生が２週間にわたり道内の医療施設に送られます．現在の受け入れ先は，名寄市立病院，深川市立病院，富良野協会病院，遠軽厚生病院それに斜里町国保病院，足寄町国保病院，町立厚岸病院，清水日赤病院となっております（地方の中核病院と，最前線の地域医療を担当する自治体，公的病院を施設に選んでいます．旭川医大が目指す地域医療が展開されている現場です)．学生は２週間という期間で，教育担当医師の元で外来で診察を行い，検査計画を建てて入院させ，治療計画を建て，毎日回診してカルテに記載を行い，場合によっては退院，在宅診療までの一連の流れを経験することが可能です．これは大学の臨床実習では決して経験できないことです．しかしよく考えてみると，地域医療実習で行われている医療の流れは，大学病院以外の大多数の医療施設ではきわめて当たり前のことであり，それを大部分の（大学での）臨床実習中に経験できないことは，医学教育上でも問題とされてきています．日常よく見る疾患の一連の対応を学生時代の実習で教育できないのは確かに問題であり，他国ではすでに大学病院ではない市中の医療施設で，全ての実習を行う大学も存在します．日本でもそのような趨勢になりつつあります．このためには地域病院での教育担当者の育成が必要ですが，北海道では教育者の数以前に，地方勤務者が少ないという状況下では到底不可能なことではあります．しかしいずれはこのような体制になろうかと思われます．大学以外に勤務されておられます卒業生の皆様には，是非とも現場での教育にお力をお貸し頂きたいと思っ

ております．臨床に関してですが，大学では従来通り総合診療部の外来のカバーや，救命センターでの診療も担当させて頂き，さらには教育関連施設である旭川圭泉会病院，足寄町国保病院，名寄市立病院で診療応援を行っております．教育のみに偏り机上の空論に陥るのではなく，臨床でも現役を続けることが学生，研修医教育に必須であると考えております．研究に関してですが，大学復帰以来，ライフワークであるストレス関連消化器疾患の病態解明と新しい治療の確立をテーマに，こつこつと実験を続けています．2010年以降First authorとしてNeuroscience Letters 1, J of Gastroenterology 3, Regulatory Peptides 1, Neurogastroenterology and Motility 2, J of Gastroenterology and Hepatology 1, Endocrinology 1の論文をpublishしております．また臨床論文として，Internal Medicineに５本書くことができました．地域で継続して医療を展開するからこそ，リサーチマインドが必須なのだという持論を学生教育の場で展開しております．大学の役職としましては，現在卒後臨床研修センター副センター長を担当しており，年一回大学病院で臨床研修指導医講習会をチーフタスクフォースとして開催しております．研修医教育の方法論でお困りの際には，是非講習会にご参加ください．最後になりますが，私の個人的なもう一つの柱陸上競技について書きます．学生時代からずっと継続して日々鍛錬を続けています．卒前は短距離選手として活動しましたが，卒後は長距離に転向し，今でも毎日20-30㎞のランニングをこなします．体脂肪率は５％以下をキープし，体重管理のために食事も制限します．レースも年間10回ほど出場しますが，やはり年とともに特にここ２－３年体力の衰えは激しく，タイムは落ちるばかりです．常に体のどこかに故障を抱えて，練習もだましだましししているような状況です．それでも昨日の自分をライバルに日々鍛錬を続け，アスリートとしても現役にこだわっていきたいと考えています．レースで顔を見たら是非声をかけてください．写真は数年前にあるレースで，ハーフマラソンのゴール１㎞前で，エリック・ワイナイナ選手と併走しているところです．ラスト400ｍでスパートして優勝しました（もちろんワイナイナ選手がわざと力を抜いてくれたのですが）．

地域がん診療連携講座

特任教授 **鳥　本　悦　宏**
（第５期生）

平成24年10月１日に開講した「地域がん診療連携講座」も今年で丸３年が過ぎ４年目を迎えています。稲村純季先生（現在旭川厚生病院）、浅井慶子先生（現在本学消化器病態外科）の２名の特任助教と、私との３名体制でスタートしましたが、平成25年からは両先生の代わりに後藤拓磨先生（現在本学消化器・血液腫瘍内科）、渡邉賢二先生（現在本学消化器病態外科）が、そして現在は伊藤　巧先生、谷　警良先生がスタッフとして活躍しています。

道北のがん診療は、設備と専門性を持った医療者の充実している旭川に集中していますが、今や国民の２人に１人がかかるといわれているがん患者は、どの地域にもいらっしゃいます。北海道は広大で200㎞を超すような距離を日帰りで旭川まで通院している患者さんも決してまれではありません。JRやバスといった公共交通機関も都市部でこそ充実していますが、遠方からは予約時間に間に合う様な都合のいいものはなく、やむを得ず自家用車で通院されている方が大部分です。がんに罹る患者の多くは高齢者で、体調や、冬道での運転ということを考えると、家族の方による通院の手伝いが必要になりその負担は大変なものです。我々も昨年まで稚内でがんに関する講演会を開かせていただきましたが、夕方の講演会のためには朝の電車に乗らないと間に合いませんし、当日

は旭川に戻ることはできず、稚内から通院されている患者さんの苦労を実感しました。

本講座では、がん診療連携拠点病院事業、がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン事業の支援のもと腫瘍センターと共同で、地域の医療従事者にニーズに応じたがん診療情報を提供することで、地域のがん患者がなるべく地元の医療機関でがん診療を継続してもらえるようになることを目的に活動してきました。

渡邉先生の富良野協会病院での講演会

渡邉先生は2014年、2014年と２年間、富良野協会病院で医療者を対象に外科医の立場から消化器癌に関して講演しました。また、伊藤先生は2014年、市立稚内病院で血液疾患に関して講演しました。いずれの講演会でも、看護師を中心に多くの方に参加いただいた上、次年度以降のがんに関する講演会の継続を希望され、がん診療情報のニーズの高さを感じました。

伊藤先生の稚内市立病院での講演会

また、腫瘍センターではがん診療に関するセミナーを月に一度定期的に開催していますが、2013年より本院の遠隔医療センターのICTによるテレビ会議システムを利用させていただき道東・道北の中核病院へ公開するようになりました。徐々に院内・院外に周知されるようになり昨年は合計700名を超える参加がありました。講師には本講座のスタッフの他にも院内の医師、看護師、薬剤師等の医療スタッフに加えて院外の医師にも担当いただきました。テレビ会議システムを介して院外からも100名を超える参加がありました。直接出向いて講演等を行うことに加えて、ICTを積極的に用いた情報提供が地域でのがん診療に少しでもお役に立てばと願っています。

ラグビー部

主務　**中　野　憧　弥**
（医学科２年）

まさに、魂が揺さぶられる激闘でした。W杯初戦の日本対南アフリカです。優勝候補の南アフリカを相手に、真っ向勝負を挑んだ日本は、劇的な逆転勝利をおさめました。W杯史上最大のアップセットと言われています。なぜ、日本は勝利できたのか。人々の関心は自然とそこに注がれています。もちろん、勝因はいくつもあります。挙げればきりがないでしょう。

しかし、選手や監督、コーチなど、チーム関係者の誰もが口にするのが、“ジャパン・ウェイ”つまり、日本独自の戦い方です。体格や経験で強豪国に劣る日本が、勝利をおさめるべく追求したのが、この“ジャパン・ウェイ”です。具体的には、パワーやスピードを、規律と体力でカバーするというものです。

この“ジャパン・ウェイ”の重要さからも分かるように、ラグビーにおいて、戦術とは、最も重要な要素のうちの一つなのです。一見、ラグビーでは、選手の体格とスピードばかりに目を奪われがちです。しかし、どんな強い“個の力”があっても、その“個”が相手にするのは15人の敵です。すなわち、そのチーム全体に戦術がなければ試合には勝てないのです。逆に言えば、強い個がなくても、戦術が優れていてなおかつ規律があるチームであれば、試合には勝つことができるのです。

このことは、ラグビーというスポーツの根幹をなしていて、この戦術を徹底することこそが勝利への道だと、私たち旭川医科大学ラグビー部は考えます。

今のチームは転換期を迎えています。なぜなら、この過去二年間で多くの主力プレイヤーが引退したからです。彼らは一人一人がリーダーであり、強い個の力を持っていました。彼らが築き上げてきたチームをもう一度見つめなおし、またチームを新しく組み立てる時期なのです。

私たちは、チームの組織力と規律を高めようと、日々幹部を中心に集まり話し合い、反省を繰り返しながら練習しています。下級生から上級生まで、意見を出し合い、一人一人が自立して考えられるチームになろうとしています。そうすることで個々の成長を強く促し、チームの大きな成長につなげようとしています。このようにして、私たちはチーム一丸となって新たな独自の戦い方の構築を目指しています。

もっとも、それだけではチームは成り立ちません。選手を献身的にサポートしてくれるマネージャーの存在。技術や戦術、怪我人のリハビリまで幅広くチームをサポートする監督の存在があってこそ、私たちプレイヤーはラグビーに取り組めているのです。そしてなにより、ＯＢの先生方に私たちの活動を支援していただいていることが非常に大きな支えとなっております。

そして、今の私たちの取り組みは、徐々に結果に表れてきていると確信しております。今シーズンは、全道大会とインカレ北海道予選において、Ｄブロックと１部にそれぞれ残留しました。全道大会では、準決勝で引き分けの結果、抽選負けという形で決勝に進めず、非常に悔しい思いをしましたが、初めてのＤブロックの挑戦で、確かな手ごたえを得ました。来年こそは必ずや優勝し、Ｃブロックへの昇格を果たしたいと思います。インカレでは、１部Ａ２リーグで２位となり、１部残留を果たしました。

また、今シーズンにおいて特筆すべきことはやはり、セカンドユニフォームを一新させていただ

いたことです。日頃から多大なご支援を賜っているＯＢの先生方に、部員一同深く感謝申し上げます。この鮮やかなワラビーイエローに、赤い刺繍が入ったユニフォームはまさに、ＯＢの先生方の大きなご支援と新しいチームを象徴するものだと思います。

秋が終り、部活はこれからオフシーズンに入ります。今季、私たちが最大の目標に掲げる東医体では、初戦敗退という非常に悔しい結果に終わってしまいました。しかし、私たちの目標は優勝です。

私たち部員一同は今一度、東医体での優勝を決意して、着実に成長し、来シーズンを飛躍の１年とすべく、日々邁進していきたいと思います。

これからも旭川医科大学ラグビー部をよろしくお願いいたします。

先輩方の今後のますますのご健勝とご発展を部員一同、お祈り申し上げます。

準硬式野球部『準硬式野球部の今』

主将 **関 口 竣 也**
(医学科３年)

旭川医科大学準硬式野球部は、今年で創部42周年を迎えます。このような長き伝統を作ってくることが出来たのは、吉田部長をはじめとする諸先輩方、マネージャーの皆様方の永きに渡るご指導、ご支援のおかげであると思います。

そんな我が野球部は今春選手４人、マネージャー３人の新入生を迎え、入部主将を中心に総勢26人で新シーズンが始まりました。１年生の選手のポジションは不足していた投手・捕手であり、頼もしい存在となっています。今年の東医体後に５・６年生の６人と看護科４年生のマネージャー３人は引退され、現在は１年生４人・２年生６人・３年生２人・４年生７人の合計19人のプレーヤーと12人のマネージャーで活動しています。

今年私達が出場した公式戦は北海道準硬式野球春季大会の２部リーグと東医体の２つの大会でした。今年こそは春季リーグで優勝して１部に上がり、東医体でも優勝すると選手それぞれが高い意識をもって１年間練習に励んできました。

春季リーグでは、昨年２部リーグで優勝はしたものの、惜しくも入れ替え戦で負けてしまい、その雪辱を晴らすべく臨みましたが、２勝３敗で２部リーグ４位という結果に終わってしまいました。しかし、春季リーグで優勝した北大医学部と１－０という接戦で戦えていましたので、東医体に向けて士気が下がることはありませんでした。そして東医体の準々決勝ではまた北大医学部と対決することが分かり、打倒北大医学部を掲げ、日々の練習に励み東医体に挑みました。しかし結果はベスト８まで進みましたが再び北大医学部に敗れ東医体を終えてしまいました。

１年間、あまり良い結果を報告できませんでしたが、温かいお言葉、激励のお言葉をかけていただきました、吉田部長を始めとするOB、OGの皆様、本当にありがとうございました。部員を代表致しまして感謝申し上げます。また、宇都宮監督にはお忙しい中大会に御同行していただきましたこと、御礼申し上げます。そして今までチームを支え、引っ張ってくださった５・６年生には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。５・６年生の皆さん、本当にお疲れ様でした。

今年のチームは、試合中、試合に出ていない選手が、試合後声が出なくなるほど声を出し、良い雰囲気で野球をするチームでした。そのため高校野球のような「熱い」試合を繰り広げられたと思

います。マネージャーも炎天下の中、偵察のビデオを撮り続けたりしてくれるなど、チームが真剣に東医体優勝を目指してそれぞれが全力を出し切った１年でした。しかし前にも述べたように今年は春季リーグ・東医体で優勝することができず、大変悔しい思いをしました。新チームでは必ず因縁の相手である北大医学部にリベンジしたいと思います。

新チームは責任学年が２人という中で、目標となる「東医体優勝」を目指して始動しています。前のチームが残してくれた「良い雰囲気で野球をする」ということを引き継いで、さらに強いチームになるためには、どうすればいいか常に意識し、考え、実行したいと思います。一層の努力をしていく所存でありますので、今後とも旭川医科大学準硬式野球部を宜しくお願い致します。

卓球部の活動

主将　**小　山　一　也**
（医学科３年）

秋晴れの心地よい季節となり、同窓会会員の皆様におかれましてはご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、我々卓球部には医学科23名、看護科２名、専門学校生５名の計30名が所属しております。練習は週３回で、今年は新入部員７名を迎え、大変にぎやかな雰囲気の中、より一層の活気をもって励んでおります。もちろん、その中には大学に入ってから卓球を始めたという部員もおりますが、上級学年が教えるなど、着々と実力をつけております。

卓球部では例年、５月の下旬に道医体、８月の上旬に東医体、そして10月の中旬に北医体という主な３つの大会があります。道医体では、北大医、北大歯、札医、旭医の４校が出場し、今年度は男子団体戦が２位、シングルスでは１名がベスト８、ダブルスでは２組のペアがベスト８に入りました。女子団体戦は優勝、シングルスでは準優勝、３位入賞という華々しい結果を残しました。選手層が厚い北大医は旭医のライバルであり、他の大学も新入生が多く入り、部員にはとても良い刺激となりました。道医体は北海道内の一番身近な大会であり、日頃の練習の成果を存分に発揮できる場であります。

また、今年度の東医体は東北大学主幹のもと、仙台で行われました。結果としては男子団体戦決勝リーグ２回戦進出でベスト８という、十数年ぶりの快挙を成し遂げました。中でも、予選リーグでは昨年度の優勝校・山形大学を破り、リーグ１位で決勝進出という番狂わせを起こしました。シングルスでは最高４回戦進出、ダブルスでは二組のペアがベスト32に入ることができました。女子シングルスでは、新入生がベスト８となり活躍しました。昨年度から、シングルスのみならずダブルスを強化してきた成果だと思います。個々人としては、様々なプレイを見ることができ、それぞれ課題を見つけることができました。卓球の団体戦でも他の競技と同様、出場できるメンバーは限られます。その中で、団体戦のメンバーではない選手も応援という形で試合に参加し、一体感をもって試合に臨むことができたのは、大きな収穫でした。部全体としてそのような雰囲気を大切にし、高いモチベーションを維持していきたいです。

卓球部では、普段はしっかりと練習を行う一方で、テスト前にはしっかり勉強し、学業と練習の切り替えを大事にしています。また、部内旅行などレジャーも豊富で、各季節には花見やワカサギ釣りに行くなど様々な活動を行っております。そのため、部活内の縦と横の親交が深く、和気藹々とした学校生活を送っております。今後もこのような関係を築いていけたらと思いますし、またこういった繋がりが学生生活を終えた後も大切な物になるのだと感じます。

最後になりましたが、OB・OGの皆様には日頃から暖かいご指導とご支援を頂き、卓球部一同深

く感謝しております。今後も日々の活動を大切に精進していく所存ですので、今後とも卓球部をよろしくお願い致します。

陸上競技部

主将 **仲　野　りりこ**
(医学科４年)

陸上競技部は2015年10月現在、79名で活動しています。毎年平均して10名以上の部員が入部し、大人数でとても賑やかな部活となってきています。

我が部は、東医体や北医体などに向けて練習する「トラック＆フィールド」と、旭川マラソンやリレーマラソン、また健康保持を目的として走る「ロード」の２つに分かれており、どちらも積極的に大会に参加し、結果を収めています。(詳しい結果は、陸上競技部HP http://www.ed.asahikawa－med.ac.jp/club/t__f/をご覧下さい)。この２つの部門が切磋琢磨してお互いを高められるよう日々練習にいそしんでおります。

我が部の特徴としては、この和気あいあいとした雰囲気であり、皆でご飯に行ったり、ボーリングをしに行ったりと、部活動以外にも楽しい時を過ごしています。

毎年、10月中旬に幹部交代式と兼ねて、陸上部OB・OGの皆様との交流会を計画しております。ご都合が合えば、是非とも参加していただけると幸いです。

競技スキー部『次なる決戦に向けて』

主将 **津　村　諄　一**
(医学部４年)

今年度の競技スキー部主将を務めさせていただきます、医学科４年クロスカントリー部門の津村諄一です。

今年は男子４人女子７人の11人の新入生が入部してくれ、女子部員が多く入ったからなのか、競技スキー部はより一層若々しく活気のある部活になっています。

また、今年は昨年よりも旭岳に雪が積もるのが早く、アルペン・クロスカントリー共に、11月上旬から旭岳に赴き、来たる東医体に向けて日々鍛錬を積み重ねています。

この文章を読んでくださっている先生方の中には、競技スキー部でない方もいるかと思いますので、簡単に競技スキー部について紹介したいと思います。

競技スキー部は斜面を滑降しながらポールをターンするアルペンを行うアルペン部門と山を登り・下りを繰り返し数㎞～数十㎞を走破するクロスカントリーを行うクロスカントリー部門に分かれています。山に雪のないオフシーズン（５，６月～10月）の間は両部門ともにグラウンドや山を走ったり、筋トレをしたり、インラインやローラーをしたり、サッカーやバスケットなどをしたりして、サッカーやバスケットなどの他競技で息抜きをしつつ、シーズンに向けて体力や筋力、技術をつけています。そして、ひとたび山に雪が積もりシーズン（11月～４，５月）となると、アルペン・クロスカントリーそれぞれの部門に分かれ、アルペンは旭岳やスキー場（カムイやサンタ）で、クロスカントリーは学校のグラウンドや旭岳・富沢・菊水（上川町）のコースで、３月上旬に行われる東医体に向けてひたすらに練習を行います。

その最大の大会である東医体の昨年度の結果は男子準優勝、女子優勝ということで、男子はここ２，３年ではよい結果が残せましたが、優勝とまではいけなかったので、今年度の東医体では昨年の雪辱を晴らすべく男女優勝を目指して、部員一丸となって尽力したいと思います。

部誌には載っていない、各部門の目標と部員個人の目標を書いていきたいと思います。

＜アルペン部門＞

・部門目標

昨年度の東医体での男子準優勝はクロスカントリーに頼りきったものだったので、今年度はアルペン部員全員の個人目標の達成により、クロスカントリーと協力して総合優勝する。

・男子

松野　　敬（医５）　SG15位　GS20位　SL9位をとる。
須田　康裕（医５）　全種目特１に入る。
川江　雄太（医３）　全種目特１に入る。
山崎　　秀（医３）　SLは２位……SGとGSは優勝！
宮里　実幸（医３）　SG13位　GS15位　SL17位　あとは、骨を折らない！
山下　直哉（医２）　みんなの足を引っ張らない。
南部　湧大（医２）　SGGSで20位　SLは苦手だけどポイントを取る。

・女子

高村　貴子（医４）　全種目で入賞！
今田　冴紀（医４）　全種目でポイント取る。
石川万友美（医４）　全種目５位以内！
佐藤　七海（医１）　同期で１番を取って、全種目でポイントを取る。
馬淵　ゆり（医１）　同期で３番以内になる。
小池　祐希（医１）　同期で最下位にはならない……
澤田　あや（看１）　看護体で上位に食い込む。

＜クロカン部門＞

・部門目標

男子リレー優勝、女子リレー１位奪還と去年の雪辱をはらす。また、アルペンが安心できるようにクロカンがしっかり安定したポイントを取る。

・男子

和知修太朗(医５)　和知さんのおかげでリレー優勝できましたと言われる選手になる。
津村　諄一(医４)　全種目で表彰台に上がる！
見田　貴弘（医３）　全種目で特１に入る。
渡邊　啓夢（医３）　全種目でポイントを取る。
柳沢那由他（医２）　全種目で特１に入り、リレーでＡ選に入る。
近藤　　尚（医１）　北海道の１年生に負けない。
武田　和樹（医１）　新人賞を取る。
真田　淳史（医１）　貴子さんに勝つ。
山崎誠一郎（医１）新人賞を取る。

去年の東医体

ゴルフ部

主将 **渡　邊　皐　嗣**
(医学科３年)

初冬の候、同窓会会員の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。この度、ゴルフ部主将となりました渡邊皐嗣と申します。どうぞよろしくお願い致します。

ゴルフ部には総勢65名（男子44名、女子21名）が所属しております。経験者はほとんどおらず、大学から始める者が多いですが、今年は新入部員９人を迎えることができ、新鮮な雰囲気の中、切磋琢磨しながら練習に励んでおります。

部活動は平日２日の打ちっぱなし練習、週末に大雪山カントリークラブにてラウンドを行っております。また初心者でも始めやすいようにラウンドでは、各個人のレベルに合わせて段階を分け、スコアメイキングに大切なショートゲームを身に着けることから始めています。また例年、冬の部活動は行っておりませんでしたが、今年は冬季期間もランニングや体幹トレーニングを行うことにより、基礎体力を身に着けようと試みております。

部活動以外にも春にはお花見、夏には合宿、秋には部旅行を行うなどして、部員たちの親交を深めています。またOBコンペや報告会ではOB、OGの皆様と交流することで、貴重なお話しを聞かせて頂いております。

今年度の団体戦の成績は、道医体では男女ともに３位（３校中)、北医体は男子９位（９校中)、女子４位（７校中）という結果となりました。そして、東医体では男子団体18位（31校中)、女子は17位（27校）でした。思うような成績を出すことができず悔しい思いをする部分もありましたが、女子は５年ぶりにポイントを獲得することができ、部員たちが一丸となり日々研鑽してきた結果ではないかと嬉しく思っております。これらの大会を通して部活動として新たに見えてきた課題を胸に今後の練習に励み、さらなる向上を目指したいと思います。また個人では医学科６年の磯崎翔太郎が、北海道学生ゴルフ選手権競技で６位入賞を果たしました。

来年度は団体、個人ともに東医体をはじめとする大会での入賞を目指し、日々の練習に精進していきたいと思っております。そのためにも、部員各々が目標をもち、それに向かって練習に励み課題を克服することで、団体として一人のミスを皆でフォローしあえる「チーム」として成長したいです。

最後になりましたが、OB、OGの皆様には日頃から暖かいご指導、多大なるご支援を頂き、この場をおかりして深く御礼申し上げます。これからも日々の活動を大切に精進していく次第ですので、今後もゴルフ部をよろしくお願い致します。

硬式庭球部

主将 **大　内　富久美**
(医学科３年)

秋霜の候、OB・OGの皆さま如何お過ごしでしょうか。今夏から硬式庭球部、女子主将になりました大内富久美と申します。旭川では初雪が降り始めましたが、秋の交流戦に向けて日々鍛錬しております。

それでは今シーズンの大会成績についてご報告させていただきます。６月「王座決定試合」では女子部は１部、男子は２部で戦いました。昨年、男子が１部から２部へ降格してしまいました。早朝から夜遅くまで練習をし、男女共に支えあいながら、毎日がテニス漬けの日々を過ごしました。レギュラー・イレギュラー関係なく、部員が一丸となって『王座　１部』という目標に一心不乱に突き進んでいました。その結果、男子は２部で１位となり、１部２部入れ替え戦に勝利。１部昇格を達成しました。女子も８年連続１部残留を決めました。来シーズンはまた再び男女で同じ１部のコートで戦うことができ、嬉しさでいっぱいです。

王座が終わり、一息つく間もなく８月には「東医体」に参加しました。東日本の医学生の大会とあってテニスのレベルも大変高く、我々も苦戦を強いられました。結果は、男子は初戦で優勝校と対戦し接戦ではありましたが、敗北。女子は３位入賞という快挙を成し遂げました。選手が表彰台に登り、賞状とメダルを受け取った姿を見守っているときは感無量でした。選手はもちろん、イレギュラーや応援してくれた看護科のみなさん、男子部の支えがあってこその３位入賞でした。

来年度は男女で、王座１部優勝、東医体優勝を目指し、練習に精を出していこうと思います。我々、硬式庭球部は部員一人ひとりがテニス、部活に対して真摯に向き合っています。誰ひとり欠けてはならない存在です。これからも全員が同じ目標に向かっていけるように精進します。また今年はレギュラーの多くが卒業生で、男女ともにメンバーが一新されました。新世代のチームとなりましたが、これから主将としてチームを支え、部員一丸となれるように励みたいと思います。今後とも応援のほどよろしくお願いいたします。

男子バスケットボール部

主将　**石　田　健　一**
(医学科３年)

私たち男子バスケットボール部は現在プレイヤー17名、マネージャー９名で活動しています。今年度の活動としましては、福島県にて北医体、地区大会、長野県にて東医体、秋季リーグなどの大会に参加してきました。余談ではありますが、毎年、毎度の遠征となりそのうち東北６県あたりは制覇するのではないかという勢いです。最近出場した秋季リーグでは２部リーグにて全８チーム中５位、リーグ残留という成績でした。１部への入れ替え戦も一時は見えましたが、自分たちの甘さが見え悔しい結果となりました。しかし、３年ぶりの昇格の中で、２部のチームと十分にやりあえたことは大きな収穫にもなりました。今回の結果に満足せず、次は１戦も落とさないという気持ちでチーム一丸となって練習に励みたいと思います。

普段の練習は、夏は週４日、冬は週３日、体育館にて行っています。現在プレイヤーも多く、体育館を使用できる時間は限られていますが、毎回の練習で課題を挙げ、内容の濃い練習を目指して取り組んでいます。バスケットボールは長年の経験者しかやらないスポーツかと思う方も多いかも

しれませんが、そんなことはなく、プレイヤーも様々です。もちろん小学校から経験している人もいれば、中学校・高校、さらには大学から始めた人もいます。これは旭医バスケ部の特徴の一つであり、長所であると考えています。これまでのバスケットボール歴を問わず、一人ひとりその人らしいプレイスタイルを生かしながらチームを形成しています。プレイヤーに限らずマネージャーにも当てはまり、現在は総勢26名のバスケットボール好きが集まる大所帯となりました。学年を問わず、全員がチームをより良くするためにどうしたらいいか考えながら積極的に取り組んでいます。また、たくさんのOB、OGの方々がご多用の中でも練習に積極的に参加してくださり、プレイに関するアドバイスをいただき、より練習の充実が図られていると思います。

私たち男子バスケットボール部は勉強(笑)とバスケばかりしている訳ではありません。春には花見、夏には海キャンプ、唐突に部旅行などなど…なかなか大会が多く多忙になりがちですが、合間を縫ってバスケットボール以外の場面でもチームワークを高めています。

さて、私たちがこのように楽しく、不自由なく活動できているのはOB、OGの先生方のご支援あってのものだと考えております。昨年、旭医バスケ部は40周年を迎え、記念行事を通じ現役部員がたくさんの先生方と交流する機会をいただきました。これからも行事や会報などを通して、私たちの活動の様子をお伝えできればと考えています。今後も応援してくださる方々の期待に応えられるように、そして自分たちの目指す結果が得られるように頑張っていきたいと思います。今後ともご支援、ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。今後の活動予定としましては、11月に弘前にて十大学定期戦に初参加し、さらなるチーム力の向上を目標としています。年明けは会長杯、春季リーグを経て新入生を迎えるとともに、北医体、東医体といった大きな大会に挑んでいくこととなります。今シーズンの良かったことをもっと伸ばし、悔しさを糧にしてチームで頑張ります。これからも温かいご声援をよろしくお願いいたします。

空手道部

主将 **松 井 拓 郎**
(医学科３年)

こんにちは。旭川医科大学空手道部主将の三年松井拓郎です。平成27年度の空手道部の活動を紹介させていただきます。旭川医大空手道部は週二回（火、木曜日)、二時間程度の練習を行っています。年に二回昇級・昇段審査会があり、春の審査会では初段取得者が１名、他各級昇級することができ、皆順調に実力をつけています。また空手道部の特徴は大学から始める初心者が多いことが挙げられます。このように初心者だらけの部員でも初段取得ができるよう常日頃練習に励んでおります。

次に大会です。空手道部の大きな大会は夏の東医体、秋の和道流全道大会の２つあります。今までの空手道部はどちらの大会も結果を出したことがなく、表彰台に上がることはほとんどなかったのですが、前年に続き今年度は素晴らしい結果を残すことができました。

2014年度東医体（前年度）
・男子団体組手　第３位
・女子個人型　　第３位

2014年度和道流全道大会
・入賞なし

2015年度東医体
- 男子団体組手　準優勝
- 女子個人型　　準優勝

2015年度和道流全道大会
- 男子団体組手　優勝
- 女子団体組手　準優勝
- 男子個人組手　準優勝
- 女子個人型　　優勝

どれも旭川医科大学空手道部史上最高の結果です。しかしこの結果に満足せず、今後はさらに高い目標をもって各大会に臨んでいこうと思います。また今後は学連や地区大会への積極的な参加も考えております。

最後に、空手道部は競技用マットを購入したり、格段に今までより良い環境で練習することができています。これも日ごろ応援してくださるOB, OGの先輩方のおかげでもあります。部員を代表しましてお礼申し上げます。今後空手道部が更なる飛躍ができるように精進しますので変わらぬ応援をよろしくお願いします。

男子バレーボール部

主将 **髙　橋　練　也**
(医学科３年)

こんにちは、この度同窓会誌におきまして、男子バレーボール部のご報告が出来ますことを大変嬉しく思います。

今年は新入生としてプレイヤー２名、マネージャー２名（道立看護学校生）が入部し、現在男子バレーボール部は、プレイヤー12名、マネージャー６名で活動しています。

さて、近年の大会の結果報告ですが、学連の春大会では一部で６位となり、二部に降格という結果になってしまいました。その後の地区体、北医体、そして東医体では優勝することができ、６年生を優勝という最高の結果で送り出すことが出来ました。そして、幹部が代わり学連の秋大会では二部で優勝することは出来たものの１部とのリーグ戦で勝利することが出来ず、二部残留という結果になってしまいました。大会期間中、怪我が多く悩まされたりしたものの、まだまだ自分たちのチームとして他のチームに劣っているところなどが浮き彫りになった大会でした。

僕たちは最終的な目標として東医体での優勝をチームで掲げています。それを達成するためにも大会や練習試合で明らかになった弱点の克服や、チームの強みを伸ばすことをはじめ、東医体という大会を乗り切るためにも体力面や、怪我のしにくい身体づくりといった基本的なことも再度見つめなおし、毎日の練習をいかに効率よく効果的に行えるかを考えて目標を達成できるように毎日を大事にしていきたいと思います。

このように僕たちが優勝を目指して活動できるのも、OB・OGの皆様が今までバレー部を支えてくれていたおかげです。特に最近では大会会場まで応援に来てくださり、バレー部の脈々と受け継がれてきた繋がりを強く感じています。そんな40年も続いてきた旭川医科大学男子バレーボール部の名に恥じぬよう、チーム一丸となって努力していきたいと思います。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

剣 道 部『旭医剣道部とは』

主将 **伊 佐 秀 貴**
(医学部３年)

この度は、同窓会誌発行にあたり、剣道部の紹介を掲載して下さり、ありがとうございます。この機会は、私自身にとりましても、部を見つめ直す良い機会となりました。

現在、剣道部は選手、マネージャーを合わせて30名を超える部員が在籍しており、学外から、国体北海道代表経験のある大西三郎先生をお招きし、週に３回、東医体などの各大会で好成績を収めることを第一の目標とし、経験者から初心者まで幅広いレベルの部員が、それぞれの目標を持って日々の部活に取り組んでいます。最近の成績としては、過去５年間で東医体団体、準優勝、３位が１回ずつ、個人優勝、３位が１回ずつ、旭川市民大会優勝４回などです。また、競技外では、東医体後や春、秋には部旅行を行うなど、部員同士は学生生活を共に楽しむかけがえのない仲間であります。

剣道部は、運動部としては珍しく、毎回の部活への出席は自由です。そのため、大会がない時期には部活に参加する人数が少なく、主将としてさみしいと感じることもしばしばあります。しかし、部員の多くが他部活との兼部やアルバイトをしており、自分のやりたいように、使いたいように時間を使い、毎日を充実させることができるのは、剣道部の大きな大きな長所だと思います。勉強や兼部先が忙しい時はそちらに集中、大会前は剣道に集中。こうして、先輩方が築かれてきた伝統を次に繋げ、また更に発展させていく所存です。

上述したように、剣道部には現在30名を超える部員が在籍しており、これは、５年前と比較するとほぼ倍の数字であります。また、小学生時代から剣道を続けている者、大学から心機一転剣道を始めた者など、剣道経歴も様々であります。こうした多種多様な部員が多く在籍し、出席も各々の意志に委ねられているなか、東医体優勝といった大きな目標にチャレンジするには、様々な問題を解決していかなければなりません。剣道へのモチベーションが違う部員同士が、いかに協力し、時には妥協し合いながらチームの雰囲気を良い方向にもっていくか。自分達より実力が上の相手に対し、どう戦略をたて、実行するか。これらの問題は、解決することが難しく、部員同士意見がぶつかり合うこともあります。こうした困難に直面した際に、お互いに歩み寄り、力を合わせて前に進んでいく。こうした経験は、部活を通して得られる、人生においてかけがえのない宝物になると思います。

私達が今日、旭川医科大学剣道部で活動出来ているのは、剣道部を創り上げ、繋いできて下さり、卒業してからも温かいご支援を下さるOB・OGの先輩方のおかげに他なりません。これからも、支えて下さる方々への感謝の気持ちを忘れず、剣道面で好成績を収めることはもちろん、学生としてたくさんの思い出を作れるよう、毎日を全力で過ごしていきたいと思います。ありがとうございました。

山 岳 部

部長 **西 能 渉 一**
(医学科３年)

同窓会会員の皆様におかれましては日頃から格別のご愛顧を賜り，深く御礼申し上げます。旭川医科大学山岳部の近況をお伝えしたいと思います。

現在，山岳部は学内・学外合わせて総勢20名で活動しています。いっときに比べれば部員の数もだいぶ多くなり山行やイベントも賑やかになりました。ここ最近は毎年，新入生や編入生が入部しており喜ばしい限りです。

また2015年度より小松成綱先生（皮膚科）に代わり，新たに西川祐司先生（腫瘍病理）が顧問を務められることになりました。新しい顧問のもと，今年もさまざまなところに山登りに行くことができました。夏季休業期間中に「遠征」と称してテン泊込みの山行をするのが近頃は恒例になっていますが，今年は白雲岳避難小屋前に２泊して大雪山の御鉢平をぐるっと巡るということをしました。天候にも恵まれ，大雪山の雄大な景色を部員一同堪能することができました。北海道で山登りをすることの醍醐味を味わったように思います。

2015年10月現在，山岳部として行ったここ２年間の主な山行は以下のようになっています。

2014年度：近文山新歓登山，黄金山，旭岳，富良野岳・上ホロカメットク山縦走，トムラウシ山遠征，美瑛岳・オプタテシケ・美瑛富士山行，定山渓天狗岳
2015年度：岐登牛山新歓登山，神居尻山，ウエンシリ岳，赤岳，大雪山御鉢巡り遠征，ウペペサンケ山

ここに挙げた山行以外でも個人山行として山スキーや沢登りに行く人や，フリークライミングをやる人もおり，思い思いに北海道の自然を楽しんでいます。山行以外にも新歓飲み会や忘年会などのイベントは毎年行っています。時には七輪や鍋を部員で囲うこともあります。

また例年６，７月に行っておりますOB会ですが，2015年度も７月４日「ひがしかぐら森林公園」においてOB会を執り行いました（写真）。BBQ台を囲んでOBの先生方と年に一度お話しする機会を持てるのは素晴らしいことです。このような機会を持てることをありがたく思いつつ，我々の世代も率先してこのイベントを次代につなげていきたいと願う次第です。

ここ数年のあいだにOB会をはじめ，先輩方から多大なご支援をいただく機会が何度もありました。先輩方のご支援なくして山岳部の活動は成り立ちえないことを実感する次第です。山行計画書の提出といった基本的なことや後輩への技術伝達といったことをきっちり行いつつ安全面については最大限の注意を払って，先輩方への感謝を胸にこれからも部員の皆と楽しい活動ができればと考えています。代々の先輩の皆様方，今後とも山岳部へのご指導，ご鞭撻を何卒よろしくお願いいたします。

追記：山岳部では日頃の活動内容を知ってもらうべくHPを開設しています。HPでは「山行記録」と題して部員の日々の山行やイベントの内容をお伝えしています。山岳部の近況をご覧になりたい方は是非山岳部HPをのぞいてみてください。

山岳部HP：http://www.ed.asahikawa－med.ac.jp/club/sangaku/
※最新の活動記録は『山行記録』のリンクから。OB用の掲示板もございます。何かわからないことやお訊きしたいことがございましたらHPに記載されている連絡先までお願いいたします。

弓 道 部

村 住 拓 哉
(医学科４年)

私たちは旭川医科大学弓道部です。現在の部員数は男子20名、女子21名で、男子はⅢ部リーグ、女子はⅠ部リーグに所属しています。部活は週３回（火・木・金)、17:00～19:00、大学の敷地内にある弓道場で大会や交流戦に向けて稽古しています。正規練習時間以外にも稽古している部員が多いため、いつ道場に行っても誰かしらが弓を引いています。

今年度は男子部員が東医体で個人準優勝、女子部員が新人賞を獲得いたしました。また、女子がⅠ部リーグで準優勝を果たしました。また、市内市外で行われた市民大会で入賞を果たした部員も数多くいます。

また、今年の春には個性豊かな15名の新入部員を迎え、弓道部はますます賑やかになりました。主将として嬉しい限りです。ほとんどが弓道初心者ですが、居残り練習を自ら進んで行うなど、意欲十分で頼もしく思います。これからは一致団結、切磋琢磨して部を盛り上げていってほしいと思っております。

弓道部内には、「ファミリー」という縦割りのグループが存在し、新入生、下級生が同じファミリーの上級生のアドバイスを受けながら稽古できる体制をつくっています。新入生がステップアップできるように安全を考慮しながら上級生で指導方針を決定し、指導を行っています。弓道は日本武道のひとつであり、礼儀作法を重んじるスポーツです。ただ的に矢を中てるだけの技術ではなく、弓道に取り組む姿勢も後輩に伝えていこうと考えています。一人前の弓道人を育て上げるのも弓道部の大事な役割のひとつです。そのほか、練習時間以外でもファミリー単位で食事に行ったり、部員の誕生日を祝ったりと楽しい時間を過ごしています。

弓道部は部旅行、花見、忘年会などのイベントも豊富で、部員同士楽しく交流を深めています。また、昨年度からは「OB・OG総会」を開いて、歴代弓道部員が一堂に会する機会を設けています。OB・OGの方々からいろいろなお話を伺えるため、我々現役部員も楽しみにしております。

もし、この文章を読んでくださっている弓道部OB・OGの方がいらっしゃいましたら、いつでも弓道部にお越しください。お待ちしております。また、普段からご支援いただいているOB・OGの方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございます。

今後も旭川医科大学弓道部をよろしくお願い致します。

大東流合気柔術部

植 村 洋 紀
(医学科３年)

秋霜の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。10月より主将を務めます医学科３年生の植村洋紀です。大東流合気柔術部は旭川支部最高名誉顧問である星川義人先生（六段）が学生時代に創設された部活で、創部40年となる伝統のある部活です。産婦人科の千石教授を顧問にお

迎えし、OBである横濱洋也旭川医科大学支部長のご指導の下、稽古に励んでおります。

現在、６年生８名、５年生３名、４年生８名、３年生７名（うち看護学科１名)、２年生13名(うち看護学科１名、専門学校生４名)、今年の春に入部した一年生４名、外部の一般の方をあわせて40名以上となる大変活気にあふれた部活です。１、２年生は女の子の数が多く、男女仲良く活動しています。稽古は毎週火曜日と木曜日の週２日間しています。火曜日は横濱先生のご指導の下、心・技・体の鍛錬に励んでおります。大会前などには、昼休みや土日にも自主的に稽古を行っています。

当部の本年度の活動報告をさせていただきます。４月には一年生が入部し、にぎやかな幕開けとなりました。５月には神楽岡公園にてお花見、６月には本学の学校祭での出店や小樽商科大学との交流親善会、７月には北海道内８大学の合気道部が集う八大学交流会を行いました。今年の八大学交流会では旭医が主催校となり、４年生の鈴木先輩を中心として昼の演武会、夜の懇親会ともに大変な盛り上がりをみせました。８月には千葉県の勝浦市にて行われた大東流合気柔術本部合宿に、６年生の寺林先輩・忠鉢先輩・東嶋先輩、５年生の三浦先輩、４年生の鈴木先輩・稲村先輩・紅露先輩・橋本先輩、３年生の植村、２年生の筑摩・今石の計11名が参加しました。合宿で行われた昇段審査にて、東嶋先輩が弐段に、紅露先輩・橋本先輩・植村・筑摩の４名が初段に昇段いたしました。10月には第60回本部大会が大東流ゆかりの地である網走市にて開催され、大東流中興の祖・武田惣角先生と大東流重興の祖・武田時宗先生のお墓参りや本部長先生による講習会、懇親会、演武大会に参加しました。演武大会にて４年生の鈴木先輩が宗家時宗賞を受賞され、金賞に２年生の筑摩、銀賞に５年生の滝山先輩、銅賞に４年生の稲村先輩・津田先輩が選ばれるという素晴らしい結果を残しました。

末筆とはなりましたが諸先輩方には大東流合気柔術部のより一層の発展のため、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

ソフトテニス部『ソフトテニス部の活動について』

八　木　　駿
(医学科３年)

我々ソフトテニス部は現在部員50名近くが所属する大きな部活です。夏は週４回、冬は週２回練習しており、大会でより良い結果を残せるよう日々頑張っています。

今年度の活動について簡単に紹介させていただきます。はじめに、５月のゴールデンウィークに合宿を行いました。OBの先生が協力してくださり、例年同様平取で行うことができました。

合宿後の春季学連は、旭川市花咲運動公園で行われましたが、惜しくもリーグ２位という結果に終わってしまいました。

しかし、女子個人戦で岩田・林ペアがインカレ出場を決定し、部員全員に感動をもたらしました。この感動をきっかけにポジションを決めた一年生もいました。

続く北医体は、新潟県新潟市市営庭球場で開催され、リーグ２位で決勝トーナメントに出場しましたが、昨年の東医体優勝校である新潟大学に敗れ、入賞を逃しました。しかし、個人戦では相原・上原ペアがベスト４という素晴らしい結果を残しました。

６月末には、顧問の石子先生をはじめ、OB・OGの先生方と部員による石子杯が行われました。雨で中断となったのは残念でしたが、先生方の素晴らしいプレイを拝見させていただくことができ、

部員たちにとって大変良い刺激となりました。来年も多くの先生方が来てくださることを願っております。

７月は道医体があり、団体戦では男子２位、女子１位という素晴らしい結果を残し、東医体に向けて良い流れを作ることができました。この大会をもって女子看護科３年生は引退。新たな体制でのスタートとなりました。その後、医学科にとって最大の大会である東医体に向けて、試合練習やレギュラー戦を経て部員一丸となり練習に励みました。

東医体は例年通り、長野県軽井沢町の風越公園で行われ、宿は昨年同様、浅見壮にお世話になりました。男子は昨年４位という結果から１位校としてリーグに入りましたが、１位校でもおかしくない強豪校が２位校、３位校、さらに簡単には勝てないレベルの相手が４位校、５位校となり、ほかのリーグからはＤリーグのＤの文字をとってDeathリーグと呼ばれるほどの最悪のリーグからのスタートとなりました。しかしその逆境を乗り越えてリーグを２位通過するとその勢いに乗って、東医体準優勝を果たすことができました。女子はリーグを２位で通過したものの、同じリーグで１位だった群馬大学と再び対戦することとなり、惜しくも敗れてしまいました。

８月中旬には秋季学連があり、授業等の関係で男子は東医体とは別メンバーで臨みましたが、見事２部リーグ昇格を果たし、女子も２部リーグ残留を果たし、チーム全体の実力が上がっていることが実感できました。

続く全医体では、惜しくも予選リーグで敗退となったものの、下級生を中心としたチームで最後まで戦い抜き、どの試合もあと一歩というところまで行けたことは非常に良い経験となりました。

８月末に行われたOB総会、OB懇親会、総監督の関谷先生のもとに行われた関谷杯では、多くのOB・OGの先生方が遠方から集まってくださいました。関谷杯は例年通り晴れ、一日中テニスを楽しむことができました。

夏季の大会がすべて終了し、現在は体育館で練習しています。部員50名ということで練習スペースの確保が難しい状況ですが、なんとか練習メニューを工夫して頑張っています。

最後となりましたが、OB・OGの皆様が当時の旭川医大の部活の様子を懐かしんでいただき、久々の部活に顔を出していただけるきっかけになればいいなと思っております。ソフトテニス部のより一層の発展のため部員一同頑張りますので、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

水 泳 部『旭川医大水泳部活動と近況』

主 将 **大久保　陽　介**
（医学科３年）

〔活　動〕

私たち旭川医科大学水泳部は現在、顧問の羽田勝計教授の元、選手25名、マネージャー４名の計29名で活動しております。火曜、木曜、土曜の週三回で活動しており、火曜は北海道教育大学旭川校水泳部と共に旭川スイミングスクールを、木曜と土曜は美瑛の大雪青少年交流の家を使わせていただき練習しています。

今、水泳部は『水泳部で水泳部を楽しもう』をテーマとして活動しています。水泳部には、幼少のころから泳いでおり中学高校と大会で成績を残してきた者から、大学に入ってから水泳を始めた者まで幅広く在籍しており、初心者から経験者まで一緒になって活動しています。経験者が初心者に泳ぎを基本から教えたり、皆で泳ぎの映像を見ながら意見を出し合ったり、他の者と競い合いながら泳いだりと、お互いを高め合いながら練習に励んでいます。おかげで初心者だった一年生も大

会で自由形以外の種目にチャレンジしたりと部員全体の泳力も着実に向上しており、年末に行われる道学（北海道学生水泳記録会)、来年の北医体、東医体やその他の大会に向けて自らの目標を超えるべく頑張っています。

練習以外でも花見、キャンプ、部旅行などのイベントを行ったり、洞爺湖での長距離の大会に出場したりと様々な活動をしています。水泳部のOB・OGの方々が来て下さることもあり、このような活動も含めた水泳部を、部員全員で楽しんでいけたらと考えています。また、大会や合同合宿などを通じて他大学と交流する機会も多くあり、楽しく交流させて頂いております。部員同士、また大学間の水泳部同士でも、水泳という一つの競技を通じてできたこの縁を大切にしながら、これからも活動に励んでいきたいと思っています。

最後になりましたが、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

〔2015年の主な成績〕

北医体	石堂	耕平	100ｍバタフライ	第１位
	佐藤	奏	100ｍ自由形	第３位
	佐藤	奏	400ｍ自由形	第３位
	石堂	敬太	800ｍ自由形	第３位
	千葉	凌	200ｍ個人メドレー	第２位
	男	子	400ｍフリーリレー	第３位
東医体	石堂	耕平	100ｍバタフライ	第７位

女子バスケットボール部

主将 **早　坂　彩　音**
（看護学科２年）

私たちは、５年生１名、４年生４名、３年生４名、２年生８名、１年生５名の計22名（選手20名、マネージャー２名）で活動しています。医大生だけではなく、北海道道立旭川高等看護専門学校や北都保健福祉専門学校の学生も一緒に活動していることにより、より一層賑やかな雰囲気で日々練習に取り組んでいます。

現在、女子バスケットボール部は、今年の５月から新チームとなり２年生が中心となって活動しています。練習日は、毎週月、木、土曜日となっていますが、11月に入り、体育館を使用できる時間が減ってしまい、十分に練習ができていない状態です。節目となる来年の北医体に向け、その短い時間を無駄にしないように努力しています。

私たちが来年の北医体に向けて目標としていることは、上位リーグ出場です。今年は、上位リーグに出場し３位という結果を残しました。来年はそれ以上の結果を残せるように日々の練習を大切に、１つずつ課題を克服していきたいと思っています。

10月には４週間にわたって秋季大会が開催され、私たちはそこ大会に出場しました。現在私たちは２部に属しています。今年の秋季大会では、負傷者が多く大会に出場できる選手が７名ほどしかいないという少人数の中、２部残留という結果を残すことができました。そこで、私たちの今後の課題としてはディフェンスでは、ボールマンへのプレーッシャーのかけ方やローテーション、オフェンスではシュート力です。去年の秋季大会で２部昇格をしたことにより、２部に属している他チームのチームディフェンス力、シュート力の高さを試合を通して感じたと共に自分たちの足りないと

ころが明らかになり、今後に繋がる大会となりました。

また､今年は東医体に出場することができました｡女子バスケットボール部は看護科の学生がチームの大半を占めており、医学科の学生が少ない状態です。しかし、その中で数年ぶりに東医体に出場したということは女子バスケットボール部の活動がより一層賑わう１つのきっかけとなったと思います。今年は、２回戦敗退という結果でしたが、来年は優勝することを目標としているので、毎年出場できる環境をつくっていくためにもここで一緒に頑張りたいと思ってもらえるような部活を目指し、チームの戦力向上をするために、今後の練習を大切に取り組んでいきたいと思っています。

女子バレーボール部

主将 **軽　部　悠　季**

（看護学科２年）

OB、OGの皆様初めまして。女子バレーボール部主将の軽部悠季です。現在女子バレーボール部は１年生６名、２年生６名、３年生６名、４年生３名、５年生１名、６年生２名の合計24名で活動しています。今年は人数も多く、火・金・土の週３回の練習をお互いに教えあいアドバイスしながら４部昇格、どのような人が見ても応援したくなるようなチームを目指し日々取り組んでいます。

今年に入ってからの成績は　＊春季大会　５部３位
＊地区大会　３位
＊東 医 体　予選リーグ敗退
＊秋季大会　５部２位（11月に入れ替え戦実施）

春季大会では、練習試合では勝ち越していた相手に粘ることができず、入れ替え戦まであと一歩のところで負けてしまいました。この大会では勝ち切ることの難しさ、自分たちの雰囲気を作る難しさを学びました。とても悔しい結果となりました。

７月に行われた地区大会では、拓殖短期大学に勝つと次の日に残ることができる状況の中、春季大会の悔しさをばねに、自分たちの練習の成果を発揮することができ、勝ち残ることができました。旭川開催ということもありたくさんの声援に後押しされプレーすることができました。１試合でも、１分でも長く先輩方と、そしてこのメンバーでバレーボールをしたいと思える大会でした。

また、今年の東医体では埼玉県の越谷市立総合体育館にて、８月４日～８日に行われました。人数が少なく、また練習時間も十分にとることのできない厳しい状況の中での大会でしたが、大会当日にはOGの方々に応援に来ていただいたり、冷静なアドバイスをいただいたりと、とても心強かったです。試合結果は満足のいくものではありませんでしたが、自分たちのバレーボールができ、多くの経験をすることができました。今年の悔しさを糧に来年こそは予選リーグ突破、ベスト４を目指し頑張っていきたいと思います。

そして秋季大会は先輩方が引退し、１，２年生を主力とした新チームで臨みました。練習時間が短い中でより質の高い練習を目指し、チーム一丸となって練習から取り組んできました。「このチームで入れ替え戦に行って昇格しよう」「どのような人が見ても応援されるチームになろう」この２つを目標に練習しました。結果は５部２位となり、念願の入れ替え戦に進むことができました。しかし、札幌医科大学に中盤に逆転され、フルセットで敗れ、とても悔しい思いもしました。入れ替え戦を懸けた藤女子戦でも、勝利したものの納得のいく試合展開ではありませんでした。それでも、チーム全員で１点を取にいき、そしてコートの中の人とベンチの人が一体となって勝ち切ることが

できたことは、今後の私たちに大きな励みとなりました。

11月上旬に入れ替え戦が行われます。ここで満足することなく、自分がやってきたこと、そしてなにより仲間を信じ試合に臨みます。「このメンバーで勝つ！」その気持ちひとつで結果は変わってくるので、どのような状況でも最後まであきらめず、そしてたくさんの人への感謝の気持ちを忘れずに思いっきりプレーすることが目標です。

今後の春季大会に向けても、今大会での悔しさ、１点を取る難しさ、１点を取ることの喜びを忘れず、練習に励みたいと思います。

最後になりましたが、小原先生、谷本先生を始め女子バレーボール部を支えてくださっている先生方、OGの方々には日頃から温かいご指導や多くのご声援をいただいております。この場をかりまして深く感謝申し上げます。皆さまには良い成績をご報告できるよう部員一同頑張りますので、今後とも女子バレーボール部の活動を温かく見守って頂ければ幸いです。

アイスホッケー部

紅　露　大　介
（医学科４年）

向寒の候、OB・OGの皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

部活の近況を報告させて頂きます。現在アイスホッケー部はプレイヤー21名、マネージャー13名の計34名で活動しております。

主な活動としてはリンクのオープンしていない夏の期間は忠和公園のインラインスケート場にてインラインホッケーを行ったり、学校のグラウンドやトレーニングルームでランメニューや筋トレを行い体力作りをしています。また５月にはゴールデンウィーク合宿、８月には夏合宿、10､11月には秋合宿を行っております。また合宿の無い月にも練習試合や苫小牧で行われるカジュアルホッケーに積極的に参加し、１年を通して継続的に氷に乗る事で感覚を鈍らせないようにしています。

また11月のリンクオープンからは東医体に向け、本格的にシーズンが始まります。パワーキルやセットでの連携などを中心にさらに厳しく練習していきます。

今年度は２年ぶりに軽井沢での東医体となりますが、昨年Ｂリーグで５位だった悔しさをバネに悲願であるＡリーグ昇格を目指してこれからも研鑽を積んで参りますので、より一層のご支援・ご声援を宜しくお願い致します。

男子ハンドボール部

主将　**浦　本　孝　幸**
（医学科３年）

男子ハンドボール部は現在、東医体でプレーヤー７人、マネージャー２人が引退し、プレーヤー15人、マネージャー２人で活動しています。この人数はハンドボールというスポーツをやっている他大学に比べると決して多い方ではないです。また、けが人がよく出てしまうことからも、練習でいかに実践を想定した練習ができるかを常に課題として週４回の練習に臨んでいます。近年、チームは人材に恵まれたこともあり、北海道学生ハンドボールリーグでも１部に昇格することができたり、北医体は４年連続で決勝に進み、東医体は２年連続で準優勝と順調に成績を伸ばしていきまし

た。個人の能力も日々磨いており、さまざまな大会で優秀選手や得点王に選ばれることも増えてきました。その中でも、2015年の東医体では、高校からの経験者を抑え、大学からハンドボールを始めた旭川医科大学の２選手が優秀選手に選ばれたことはとても嬉しく思います。チームのこの成績にはやはり今の卒業１年目、現在の６年生の力が大きく、それが抜けた今、チームは２部降格など、勢いは失われつつあります。しかし、このままずるずるおちていくのではなく、チームを見つめ直し、今のチームに何が必要かを選手一人ひとり考えながらももう一度東医体の決勝の舞台に立ち、そして優勝をする。というのが今の最大の目標です。練習内容としては、ハンドボールはコンタクトの激しいスポーツですので、身体がいかに強いかが、チーム力としても、怪我をしないためにも大事になってきます。そのため、冬の期間は、ウエイトトレーニングやフットワーク練習などでフィジカルを鍛え来年のシーズンに向けて体作りをしていきます。春からはシーズンインということもあり、ボールを使った練習が多くなります。個々のシュート練習や、チームとしてのパス回し、フォーメーションの練習をしたり、チームDFの合わせを行います。この中で意識していることはいかにフリーシュートを増やせるかということと、どれだけ相手を追い詰めるDFができるかということです。前者はパスで相手のDFの穴をついたり、走ることで相手のDFを置き去りにすることで、どれだけ有利なシュートシーンを作るかということです。その為に、チームの全員がどこで勝負したいかを常に意識統一し、前を向いてプレーすることを徹底しています。後者に関しては個々のDF能力を磨き、相手のOFを止めながら積極的にパスカットを狙い、得点につなげようというDFを目指しています。プレー面でのチームのレベルの向上は日々の努力で磨いていきますが、組織としてのチームの向上も近年図っているところです。OBの方々との関係を強くするために、OB会をもう一度整理し、連絡を撮る機会を増やしたり、OBの先生同士で声をかけ合い、プレー以外のところでいかにチームとして強くなっていくかを現在模索しているところです。その途中経過として、OBの方から連絡をくださったり、OB会費だけでなく、直接練習道具やその補助になるものを送ってくださるOBの方も出てきたりと成果も出てきています。また、2016年の１月には道内の医学部のOBの方とOB戦を行えるということでOBの方と触れ合える機会が増えてきていることを嬉しく思います。これからも直接挨拶にお伺いしたり、部の報告としてのお手紙の回数を増やしたりと様々な形でOBの皆様と関わっていきたいと思っております。拙い文章ではありましたがここまで読んでくださった皆様ありがとうございました。

柔 道 部

主将 **村 越 成 人**
（医学科３年）

今年度の夏より、柔道部の主将を務めております医学科３年の村越成人と申します。柔道部の活動報告をさせていただきます。

柔道部は年々盛り上がりを増し、現在は男子21名、女子５名、マネージャー７名の大所帯で活動しております。部員不足のため部の存続が危ぶまれた時期のことを考えると、部として非常に盛り上がっている時期であると思います。今後も新入生勧誘活動に力を入れ、ますます柔道部を発展させていきたいと考えております。

現在、柔道部の練習は月曜、水曜、金曜の16時40分から19時まで旭川医科大学武道場にて行っております。さらに金曜日には現柔道部総監督である大木康生先生が指導されている花咲道場で道場の方々と練習に励んでおります。

それではここで今年度の大会の結果報告をさせていただきたいと思います。今年は５月に秋田にて北医体、そして同じく５月に札幌にて北海道三校定期戦（三校戦)、８月には埼玉県で東医体がありました。北医体では男子団体は四連覇、女子団体は五連覇を飾りました。三校戦では残念ながら北大医学部が不参加のため、札幌医科大学との一騎打ちとなりましたが、見事に勝利いたしました。東医体では女子団体は初戦敗退してしまいましたが、男子団体では決勝で七連覇していた東海大学医学部を破り、創部以来初となる優勝を果たしました。

今年度の結果を受け、来年度の部の目標としてはまず、東医体において男子団体２連覇、女子団体の入賞です。現６年生が抜けてしまいますが、その穴を埋められるよう部員一人ひとりがレベルアップし、昨年度王者として恥ずかしくない試合をしていきたいと思います。そのために普段の一回一回の稽古に気合を込め、密度の濃い練習になるよう工夫し取り組んでおります。来年もまたOB、OGの先生方に良い結果を報告できるよう、精進してまいります。また、今年度は予定が被ってしまって参加することが出来ませんでしたが、北海道学生優勝大会などといった全学の大会にも積極的に参加し、結果を残していきたいと思います。

柔道には、心・技・体の鍛錬が重要であります。柔道部顧問である原渕教授から、これは医道においても同様であるとのお言葉を頂きました。我々柔道部一同、柔道を通じて心・技・体の鍛錬に励み、よりよい医療人となることを目標としながら、今後の稽古に励んでまいります。

最後になりますが、柔道部の活動に対して、温かいご指導や多大なるご支援を頂いているOB、OGの先生方に、この場をお借りして深く感謝を申し上げます。今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

サイクリング部

阿　部　良　奎
(医学科４年)

サイクリング部は今年度、新たに３人の新入生が入部し、内一人は精力的にレース参戦しています。サイクリングも定期的に行い、初春の美瑛や夏の緑豊かな神居古潭など、北海道の自然・風景を楽しんでいます。トレーニングも定期でLSDやインターバル、パワーマックスによるハードトレーニングも継続しています。特に新入生である山崎君は自転車競技や陸上競技の経験者ということもあり、初年度にして複数のレースに参加し、着実に成績を伸ばしています。彼の積極的な活動のおかげで、部としての活動や練習も盛んになっています。年度毎、レース毎の目標を設定し、それに向けてトレーニングを積むことで上位入賞も現実的になっています。若手のこれからの活躍に期待したいと思います。また、今年度からはHPもリニューアルし、メンバーの増員に力を入れています。季節性もあり、なかなか難しい点もありますが昨今の自転車ブームに肖り、楽しく活動的な部活動にしていきたいと思っています。今後の活躍にご期待ください。

雪艇倶楽部（カヌー部）

部 長　**東海林　旺次朗**
(医学科４年)

雪艇倶楽部は、現在部員は１年生６名、２年生７名、３年生３名、４年生４名、５年生４名、６年生１名、院生（看護）１名で合計26名です。夏はカヌー・冬はスキー・スノーボード（と少しカ

ヌー）を楽しんでいます。現在活動の中心となっているカヌーは一人乗りでブレードの２つあるパドルを使って漕ぐプラスチック製の艇（ポリ艇）で、その中でもフリースタイルという種目に使われるショートボート（通称ロデオ艇）に乗る部員がほとんどです。ここで少しだけフリースタイルカヤックについて書かせていただきます。フリースタイルカヤックというのは、ホールやウェーブといったスポット（川をくだらない）で、カヤックを横や縦に回転させたりする技を競う競技です。特徴としては、安全が確認されたスポットでやるため、一定の練習をすれば、川を下るカヌーよりも安全が確保されています。

雪艇倶楽部が目指しているのは「楽しく・安全に」カヌーをすることです。内部の安全講習会（座学・実践）に加え、外部の安全講習を受けています。しかしそれだけでは足りません。定期的な練習（水曜日放課後）を行うことで技術的なレベルを高めています。この定期練習に毎週参加した一年生はカヌー一年目にも関わらず、この夏の遠征で日本屈指の清流でかつ激流とも言われる四国の吉野川を下ることが出来ました。これから入ってくる新しい部員もしっかり練習し、北海道や全国の素晴らしい川を下れることができればいいと思います。

今年度は他大学との合同練習を行ったり、北海道大学が主催している学生カヌー選手権大会に参加して他大学の学生との交流の機会を増やしました。同世代の他大学の学生との交流は部員にとっては大きな刺激になったと思います。

カヌーでは日常の学校生活で鬱々とたまったエネルギーを、北海道の大自然に発散することができます。季節によって大きく表情が違う北海道の自然を事故や怪我なく安全に楽しむことができるようにこれからも活動していきたいと思っています。

最後になりましたが、OB・OGの先生からは様々な形でご支援をいただいており、非常に感謝しております。近況は部誌（ブログ）「http://setteiclub.blog24.fc2.com/」でご確認いただけます。このブログを通して私達の活動を見守っていただければ幸いです。

居合道部

第３代主将　**石　原　　洋**

（医学科３年）

月日が過ぎるのは早いもので、私達居合道部も設立から５年目を迎えようとしています。当部は病理学講座免疫病理分野教授の小林博也先生を顧問とし、國際居合道連盟北海道旭川無雙塾塾長の山形東陽先生の御指導の下、日々稽古に励んでおります。今年の４月には２名の女性新入部員が入部し、部員は総勢20名近くとなりました。しかし、創設メンバーだった先輩方ももう６年生になり、もうすぐ卒業されてしまいます。今後も益々の発展と繁栄を期待し、また近年

の「日本刀ブーム」なるものに乗り新たな部員獲得を目指し、小規模な団体ながらも懸命に活動していく所存です。

さて、私達居合道部は普段は木曜日と土曜日の週２回稽古を行っております。本年は年明けに旭川市国際交流センター主催の留学生との居合道交流会に参加し、海外からはるばる来られた方々と日本の古武術である居合道を通じて交流を深めました。夏には上川神社・旭川神社・護国神社の神社祭におきまして奉納演武をさせて頂きました。一般の方々の前で技を披露する機会は殆どありませんので、大変貴重な経験となりました。また、國際居合道連盟本部から講師の先生にお越し頂き、開催された本部研修会に参加しました。古く室町時代より続く正統正流の教えに深く感銘を受けました。秋には昇段審査会が開催され、お陰様で受審者４名全員が合格することができました。更なる熟練を目指し、心新たに活動に励んでまいります。

私達がこのように活動していけますのも、活動を見守って頂いております顧問の小林教授並びに御指導頂いております山形先生、そして部を支えて下さる先輩方のお力添えがあればこそと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。これからも居合道部が更に発展していけますよう、先輩方の御指導ご鞭撻を賜りたく存じます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

ダンス部CRANK

部長 **市　毛　美　帆**
（医学科３年）

OB・OGの皆様、はじめまして。一昨年の夏より、ダンス部CRANKの部長を務めさせていただいております、医学科３年市毛美帆です。

この度、同窓会誌に近況報告をさせて頂くにあたり、まずは部活動紹介をさせて頂きます。

ダンス部CRANKは2011年に正式に旭川医科大学のサークルとして認可され、活動を始めました。最初の部員は学内の学生１０人程でありましたが、今では近隣の学校の学生も仲間に加わり、５０人を超える大きな部活となりました。練習に関しては、道内各地で行われるたくさんのイベントに向け、部全体で取り組んだり、チームごとに取り組んだり、はたまた学外のサークルの方と個人的に取り組んだりと、様々です。CRANKの主な一年間のスケジュールは、新入生に向けた新歓公演、学校祭でのダンスショー、夏には旭川や札幌など各地での様々なイベント、秋には自主公演、春には卒業生とともに追いコンとして学内発表会と、一年中ダンスを通して仲良く楽しく充実した活動を行っています。

さて、近況報告と致しましては、2015年11月28日、旭川市公会堂にて自主公演を行う運びとなりました。CRANKのメンバーで初の舞台公演を成功させるだけでなく、ダンスを通して他大学や高校生との交流を深め、旭川のダンスシーンを盛り上げていくこともこの自主公演の狙いの一つと考えております。初心者から初めた部員も多い中、舞台で多くの友人に囲まれる中でダンスが出来るというこの機会はまたとない貴重な経験です。日々練習に励みながら、自分たちがたくさんの人に支えられていること、協力して下さる方々がいることに幸せに感じ、今の自分たちの環境に感謝しております。

ここまでCRANKが成長することが出来たのも、代々の諸先輩方のおかげだと思っております。先輩方が大学生活をふと思い出した時、CRANKの思い出がいいものでありますように、そしてこれから卒業する部員にもそれが続いていきますように、これからも部員一同頑張ります。

SPEC(総合格闘技)

代表 **田 蔵 昂 平**
(医学科５年)

今年度新たに設立したSPEC（総合格闘技）の部長の田蔵昂平です。この部活は、照井レナ教授を顧問とし、総合格闘技に興味を持った15名の部員が集まって作ることができました

部員のほとんどが兼部をしているため、それぞれの兼部先が忙しい時が多く、あまり大人数で集まれませんが、各々のやりたい時にやりたいスタイルの総合格闘技を研究・実践することを目的として日々修練を行っております。また、兼部先の部活も様々で、柔道や空手のような武道系の部活は自分の部活で使える技を習得することを目的とした部員がいるのはもちろん､アイスホッケーやラグビー､サッカーなどのような部活の部員などもおり総合格闘技の練習で体幹を鍛えたいとの理由で入部した部員もいます。

練習の内容ですが、幼少期に少林寺を習っていた部員や空手部の部員からは主に立ち技の打撃を、柔道部の部員からは主に寝技を習うことで飽きることのない練習を日々行えていると思っています。

新設の部活ではありますが、部員は１年生から６年生それぞれの学年の部員がそろっております。そのようなことから、ただ総合格闘技の練習を行うだけではなく、先輩後輩の学年を超えた交流を行って言います。また、そのような楽しい交流の中でも上下関係を重んじたいと考え、武道系の部活の部員から礼儀作法の大切さを教えてもらい、社会に出た時に恥ずかしくない人間となれるような教育も行いたいとも思っております。

これからは多くの部活がシーズンオフとなるので、これから部活に参加できる人数も増え、また、SPECに興味を持ってくれる人も増えてくるのではないかと考え日々の鍛錬をもっと積極的に行っていきたいと思います。このような姿勢を続けていけば、この部活はより活気のあるものになるのではないかと信じております。

最後になりましたが、このように楽しい部活動を行えるようになったのも照井教授をはじめ、色々な部活の人々のご理解・ご尽力があったからだと思っています。新設の部活ではありますが、これからも精力的に活動を行っていき、大きな部活になっていきたいと思っているので、今後ともSPEC（総合格闘技）をよろしくお願いします。

医療研究会『医療研究会の現状』

部長 **吉 村 隼 樹**
(医学科４年)

同窓生の皆さま方、こんにちは。現部長の医学科四年の吉村隼樹と申します。現在の医療研究会の現状についてお伝え申し上げます。さて、医療研究会は、野球部と並んで旭川医科大学創設当初からの部活であると先輩方から聞き及んでおります。そのような歴史ある部活の部長に昨年度から就任して、とても誇らしく思っております。しかし、医療研究会といえば、創立当初は地域医療についての研究をして

いたようですが、現在は地域医療についてはCIKという他団体がその活動を担っております。CIKの先生方には、医療研究会の同窓生も何人かいるそうで、そのことを存じている方もいらっしゃるでしょう。

では、現在医療研究会は地域医療ではなく、一体何をやっているのか。一昨年までは、学祭の医学展コーナーでBSLの講習をメインの活動として行っていました。しかし、医学展での活動も学祭での医学展委員方々の仕事として次第にうつっていき、部員数が少なく兼部している人が多い医療研究会での医学展の出展は厳しいものとなってしまいました。現在では、医学展での出展は行っていません。しかし、その積み上げてきたBSL講習の能力を生かすため、EZOLS（北海道救急医療研究会）の旭川支部として、BSLの勉強会を毎週金曜日に部室で行ったり、札幌医大や北大との合同のワークショップや本州での医大合同のワークショップに参加したりもしています。これらの勉強会は医療研究会の部員以外の学生でも自由に参加できるようなオープンな形のものにしており、その活動のおかげか勉強会でBSLに興味を持って、医療研究会に新たに入部してくれる部員が増えており、大変嬉しく思っております。こうしてBSLに興味を持った部員が増えていけば、また学祭医学展でのBSL講習の出展も近いうちに再開できるのではないかと、考えている次第でして、是非その際は医学展に立ち寄って下さるよう同窓生の皆さまにお願い申し上げます。

さて、ここまで長々と医療研究会のBSLに関する活動のお話をしてきましたが、当部活の活動はもちろんそれだけではありません。医療研究会は「医療研究会」であり、「救急医療研究会」ではないのですから、救急医療に興味ない部員にもその門戸を開いております。現在、医療系の団体はたくさん増え、漢方研究会は漢方や東洋医学を、IFMSAは国際医学や性医学や公衆衛生を、Mededuは医学教育を、CIKは地域医療を研究しております。その中で、我々医療研究会が手を出せる分野は何なのか。そう、なんでもよいのです。せっかく広い部室を所有しているので、各々の部員が興味ある分野について研究していこうと思い、最近では部員一人が興味を持った分野を勉強し、それを他部員にプレゼンするという勉強会を始めました。この分野に関しては、今のところ、臨床医学を学んだ上級生が「解剖医学」や「胸部X線写真のみかた」、「心電図のみかた」を下級生に分かりやすく説明するというものですが、今後は下級生にも何かしらをプレゼンしてもらおうと考えています。

また、おそらく大多数の部員が興味を持ち、少なからず将来関わるものとして、臨床があげられます。現在は、卒後間もない研修医のOBを招いて、「掌と爪でわかる鑑別疾患」、「頻脈が主訴の救急患者への対応」などのテーマで勉強会を行ったり、NHKの主訴から問診のみで疾患を鑑別していくというDr.Gという番組を昼休みに部室で見たりなどしています。

現在、医療研究会では、こうした数多くの医療分野に関する勉強会を行っております。これらの新たな活動が実り今後の医療研究会の活動が活発化していくことを、同窓生の皆様方が願って下さると私も幸いです。

茶 道 部『学校祭、片栗庵の茶会を終えて』

部長 **橋 本 侑 里**
（医学科３年）

寒気がいよいよ厳しくなり、旭川医大の窓からも雪景色が見える季節となりました。同窓会員の皆様方はますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

現在、茶道部は男性５名、女性17名の計22名で活動しております。そのうち新入部員は５名で、毎週木曜日、和室にて日々稽古に励んでおります。行事が近づきますと行事に向けての稽古、普段はそれぞれ個人のレベルに合わせたお点前や客としての振る舞いの稽古などをしております。このような充実した稽古も、部の創設以来からお越しいただいている堤先生によるご指導の賜物である

と実感しております。

６月には、毎年恒例ではありますが、今年度も学祭にて部員による茶会を開催致しました。亭主や半東、お運びの練習に励み、週２～３回に稽古の回数を増やして、部員が協力し合いながら当日に向けての準備を致しました。茶席は５席設け、どの席も静かで落ち着いた空間をお客様方と共有することができました。また、今年度は例年にも増して大変多くのお客様にお越しいただき、準備していたお菓子をすべてお出しするほどの盛会となりました。そして部員も練習の成果を発揮することができました。この学祭での茶会の成功も同窓会会員の皆様のご協力の賜物であり、心より御礼申し上げます。来年度もより良いものとなるよう、部員一同頑張りたいと思っております。

10月には、和寒町の片栗庵というお茶室をお借りして、茶会を開催致しました。顧問をしていただいている坂本先生、来年ご卒業される先輩方をお客様として招待し、部員は感謝の気持ちを込めてお客様をおもてなししました。炭点前、濃茶、薄茶のお点前やその中での水屋の仕事といった、普段のお稽古ではなかなか経験することのできない一連の茶事を行ったので、初めてする内容も多くありましたが、参加した部員にとってとても貴重な体験となりました。また、片栗庵やその周辺は木々が鮮やかに色づいており、お道具やお花、お菓子などと共に秋という季節を味わうことで、茶道は季節と強く結びつき、自然の細やかな移ろいを楽しむものであると改めて実感致しました。

同窓会会員の皆様が作り上げてくださった、旭医茶道部の素晴らしい伝統を受け継ぎながら、さらに部としての活動が有意義になるように、部員一同これからも稽古に励んで参りますので、変わらずご指導よろしくお願い致します。

旭川医科大学JAZZ研究会

部長 **舘　洞　慎之介**
(医学科３年)

旭川医科大学JAZZ研究会は、現在の部員数は38名という大所帯となりました。部員のほとんどは大学からジャズを始めた人たちで、中には楽器初心者もいます。

今までは管楽器・ベース・ピアノ・ドラムという「コンボジャズスタイル」をメインに活動しておりましたが、部員数も増えたことから、新たな試みとして管楽器セクションをふんだんに取り入れた「ビッグバンドスタイル」での演奏も考えております。

最近は活動範囲を大幅に広げまして、医大祭はもちろんのこと、旭川市の中学生・高校生・大学生らが集まって行われる「合同文化祭」、買物公園通りで行われる音楽イベント「あさひかわミュージックフェスタ」、緑ヶ丘地域の音楽系団体が集まって行われる「丘の上の音楽祭」など、地域の多くの方々と交流を持つ機会に恵まれました。

定期的な活動としましては、昨年度から始めた週２回の定期セッション、ジャズ喫茶アベルにて月に１・２回行われるセッション、月１回医大病院ロビーにて行われるコンサート「丘の上のJAZZ」、夏季に医大病院ロビーにて行われるコンサート「音楽の夕べ」、冬季に医大病院ロビーに

て行われる「ギター部合同クリスマスコンサート」と、たくさんの演奏の機会に恵まれております。
特に医大病院にて行われるコンサートでは患者さんや病院関係者の方を対象としておりますが、毎回多くの方に楽しんでいただいているようで、こちらとしても、よりよい演奏が出来るようにとモチベーションが上がります。
部内での活動だけでなく、旭川でもトップクラスに上手な社会人の皆様や、プロの演奏家の方とも交流をさせていただいており、とても良い刺激を受ける毎日です。
このように恵まれた活動をさせていただいているのは、顧問の蒔田先生、OB・OGの皆様をはじめとした上の代の方々のおかげであり、私たちとしても、こうして受け継がれてきたものを大切にしつつ、それを発展させていくことが出来れば、と願っております。是非、私たちの演奏を聞きに来ていただけたら、私たちとセッションをしていただけたら、と思っております。
詳細な活動報告については、Facebookページにて随時更新をさせていただいておりますので、是非そちらをご覧ください。(URL：https://www.facebook.com/amujazz/)

ギター部

部長 **伊　藤　啓一郎**
(医学科３年)

旭川医科大学ギター部OB・OGの皆様、お世話になっております。今年度のギター部部長を務めさせていただいております、伊藤啓一郎と申します。現在のギター部の活動についてご紹介させていただきます。
ギター部は現在、60名以上が在籍し、今も先輩方から受け継いだ福利厚生施設の部室を利用して練習を行っています。以前から行われているサマー・ウィンター・懐メロコンサートに加え、新入生の初舞台となる６月のフレッシュコンサートや、10月のオータムコンサート、さらに昨年度からはクリスマスコンサートをジャズ研究会と合同で行わせていただいております。つい先日行ったオータムコンサートでは、80名以上の患者様・ご家族にお越しいただき、沢山の方に演奏を楽しんでいただくことができました。コンサートを聴きに来てくれる学生も増え、ギター部に入部したいと志願してくれる人も沢山います。
私が入学した当時のコンサートでは、主にギターの弾き語りやアコースティックギターによるソロ演奏がプログラムの中心でしたが、最近ではギター以外にもキーボードや打楽器、管楽器などを専門に演奏するメンバーが増え、さまざまな演奏形態で音楽を届けられるようになりました。また、新しく購入したコンデンサーマイクや卓を駆使して、より質の高いコンサートを行うこともできるようになりました。
また、今年度は病院ロビー以外にも演奏の場を広げ、講義実習棟での学生向けのコンサートを開催したり、学生団体「はしっくす」さんとの共同で、cocodeでの学生合同文化祭や街の買い物公園通りでの野外ライヴを開催したりしました。
私はギター部をさらに活気のあり、演奏者自身が楽しめ、我々の演奏を聴いた方が幸せな気持ちになれる部活にして参りたいと考えております。これを達成するには、個人が好き勝手に動いているだけではいけません。もちろん音楽は演奏者が楽しんでこそだと思いますが、聴いてくださる多くの方のためにも、部員一丸となってコンサートを盛り上げていかなければならないと思います。コンサートに関わるすべての人を思いやって動けるよう、部員の指導を行っていきたいと考えております。OB・OGの皆様もご多用とは存じますが、お時間のある際には頑張っている後輩のコンサートを是非聴きに来ていただきたいです。コンサートの日程などを皆様にお伝えしたく存じますので、

もし不都合がなければ下の私のメールアドレスにご連絡いただけると幸いです。これからもギター部をよろしくお願い申し上げます。

ブラスアンサンブル『心をひとつに』

部長 **新　井　郁奈子**
(医学科３年)

向寒の候、皆様におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

日頃、私たち旭川医科大学ブラスアンサンブルの活動に対しご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。今年度は新たに８名の新入生を迎え、40名を超える部員で日々活動しています。各演奏会では医大生だけでなく、北海道医療技術専門学校や旭川大学の方々、またOB・OGの皆様にも一緒に演奏していただいています。

年間の演奏活動として、６月の医大祭における”グリーンコンサート”、７月の大雪クリスタルホールでの室内合奏団との“合同演奏会”、医大音楽系団体で合同主催する“音楽の夕べ”、10月には緑が丘中学校主催“丘の上ふれあい音楽祭”への参加、12月の“クリスマスコンサート”と様々な演奏会に参加させていただいております。演奏会ではＪポップから演歌、クラシックまで、様々なジャンルの曲を演奏し、聴きに来てくださったお客様に楽しんでいただいております。また今年度は、10月に行われた道北勤医協創立40周年記念行事のオープニングで演奏するなど活動の場を広げております。

ブラスアンサンブルで演奏する曲はアンサンブルというだけあり、どの曲も部員が心をひとつにして演奏しなければ良い演奏にはなりません。年代や立場の異なる部員が心を合わせてひとつの曲を作り上げることは容易なことではありませんが、これが音楽の持つ素晴らしさだと思います。そして音楽は、共に演奏する仲間との絆を深めるだけでなく、聴きに来てくださるお客様とも心を繋いでくれるものだと日々感じております。音楽は演奏する人を、そして聴いている人を笑顔にし、時に勇気づけ励ましてくれるものです。この音楽の持つ力を信じて、今後も一層練習に励んでまいりたいと思います。

最後になりますが、こうして年間を通して演奏活動を行うことができますのもひとえにOB・OGの皆様、顧問の高井先生、演奏を聴きに足を運んでくださるお客様、そして私たちにご協力くださる多くの皆様のおかげです。この場をお借りして御礼申し上げます。今後も旭川医科大学ブラスアンサンブルの活動にご理解・ご支援いただけますと幸いです。またお忙しいとは思いますが、機会がありましたらぜひ演奏会に足をお運びください。部員一同お待ちしております。

室内合奏団

団長 **佐　藤　朱　夏**
(医学科３年)

冷気は日増しに加わり、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。室内合奏団団長の佐藤朱夏と申します。室内合奏団の活動、および近況を報告させていただきます。

今年度、室内合奏団は新たに10名の新入部員を加え、計31名で活動しております。６月の医大祭では第６講義室にて小編成発表会、および大学病院ロビーにてコンサート、７月には毎年恒例のブラスアンサンブル部との合同演奏会、10月には秋の弦楽コンサートを大学病院ロビーにて行いました。また部員のうち３名は５月に旭川フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会に参加し、全曲シベリウスのプログラムに取り組みました。現在は５名の部員が旭川フィルに在籍し、11月の定期演奏会に向け練習を重ねております。

合同演奏会では、室内の部としてオットリーノ・レスピーギ作曲の「リュートのための古風な舞曲とアリア　第３組曲」等を演奏し、オーケストラの部では久石譲作曲「アシタカせっ記」やビゼー作曲の「カルメン組曲第１番，第２番」を演奏しました。多数のOB、OGの方々のご助力を頂き、成功させることが出来ました。部員には難しいところも多い曲でしたが、部員全員で沢山の練習を乗り越えて臨む定期演奏会での達成感や充実感は、他の学生生活の場面では得られないものがあります。

今後、12月には病院ロビーでのクリスマスコンサート、３月には卒業式の会場での演奏を予定しております。また、同じく３月には札幌コンサートホールKitaraにて行われる第24回北日本医科学生オーケストラに９名の部員が参加し、難曲に挑戦します。北日本医科学生オーケストラは100名を超える関東以北の医療系学生による年に１度のオーケストラであり、部員たちは本番前の１週間の合宿を通して技術を磨き、仲間とともに音楽を楽しみ、成長して帰ってきます。今後も積極的に様々な活動に参加し、初代団長の吉田先生から続くよい伝統を引き継いでいけるよう努めていく所存です。

最後になりますが、私たちが音楽活動をできるようご尽力頂いておりますOB、OGの諸先輩方、いつも優しくご指導して下さる加藤先生、そして、常に私たちの活動を見守って頂いている顧問の高井先生を始めとする、室内合奏団の活動を支えて頂いている多くの方々に感謝を申し上げて近況報告とさせていただきます。

合 唱 部

大　道　一　輝
（医学科３年）

晩秋の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

今年度、合唱部は22名という多くの新入部員を迎え、男性29名・女性47名の計76名で活動を行っています。主な活動といたしましては、夏と冬の年２回、サマーコンサートとクリスマスコンサートを医大病院のロ

ビーで開催しております。これらに加え、６月には医大祭でのミニコンサート・有志によるロビーコンサート、７月には他の医大音楽系サークルと合同で“音楽の夕べ”、を開催しております。他にも、昨年にはグループホームからも依頼を頂きコンサートを行ったりと、学外にも活動の場を広げております。このように多くの演奏の場を頂いていることに感謝し、日々練習に励んでおります。また、昨年にはOB・OG会が発足し、今年のクリスマスコンサートにてOB・OGステージを開催しようと、有志の在校生らとともに定期的に練習を行っております。これまでOB・OGの方と関わることが少なかった合唱部にとって、このように交流する機会が増えることは、一部員として嬉しく思っております。

合唱部では特にサマーコンサート・クリスマスコンサートをそれぞれ前期・後期の目標として活動しております。これらのコンサートでは、患者様及びそのご家族の皆様・地域の方々によりよい演奏をお届けできるよう、練習に取り組んでいます。曲目としては、「瑠璃色の地球」「カントリーロード」といった耳馴染みのあるものから、「春に」「ハレルヤ」などの季節感を感じられる曲、また「僕が守る」「言葉にすれば」といったNHK全国合唱音楽コンクールの課題曲など難しめの曲にも挑戦しています。このように様々な曲を歌うことで、自分達も聞いてくださる方々も多くの合唱曲に触れることができているのではないかと思います。

コンサートを行うためには、日々の練習・技術も必要ですし、そして自分達が合唱を楽しむということも不可欠だと思っています。練習は、毎週、お昼休みに２回、放課後に２回、また土日にも月に２回程度時間を作り、普段は楽しく、時には真面目に活動しています。大学から合唱を始めたという初心者が多く、私もその１人でありますが、自分たちの声と向き合いながら、日々練習に励んでいる状況です。合唱は１人ではできるものではありません。お互いが声を聞きあい、声を合わさることで、初めてハーモニーが出来上がります。合唱部は兼部している部員が多く、なかなか全員が集まることは難しい面もありますが、部員の熱意や合唱が好きだという気持ちが、今の合唱部を作り上げているのではないかと思います。

最後になりましたが、このように合唱部が活動することができているのは、顧問の鈴木先生の他、OB・OGの皆様、そして私たちの演奏を聞きに来て下さる方々のおかげだと思っています。この場をお借りして、部を代表し、皆様にお礼申し上げます。今後も、歌う側・聞く側がお互いに楽しく満足できる合唱を届けられるよう活動していきたいと思います。

旅と鉄道研究会

会長　**倉　　麻里香**
(医学科３年)

朝夕冷え込む季節となり、旅と鉄道研究会部室でもストーブが稼働し始めました。OB・OGの皆様方はいかがお過ごしでしょうか。現在本研究会の会長を務めさせていただいております医学科３年の倉麻里香です。春に新入生３名を迎え毎日にぎやかな日々をおくりながらも勉学に励んでおります。今年も新歓旅行は留萌・増毛へ行きました。新歓旅行で何度も利用している留萌線ですが、留萌駅～増毛駅が2016年度中に廃止となるそうです。さみしくなりますね。他にも鎮守府巡り企画第３弾として大湊へ行ったり、毎年恒例の小幌ジンギスカンパーティーに参加したりしました。また６月の医大祭ではＮゲージとプラレールの展示を行いました。今年のＮゲージのジオラマは多くの部員が協力しあい昨年よりも力を入れて仕上げました。普段

あまり全員で一つのことを成し遂げるサークルではないので良い経験になったと思います。来年度もさらに改良を加えより良い展示を目指しますので、医大祭にお越しいただいた際は旅と鉄道研究会のブースにも是非お立ち寄りください。秋旅行には道東の留辺蘂・温根湯に行き前期試験の疲れをいやし部員同士の交流をはかりました。12名が参加し久しぶりの大人数での旅行となりました。昼過ぎに特別快速きたみに乗って留辺蘂へ向かい、ついたころにはあたりはすっかり真っ暗でそれから旅館で食事をしたり温泉に浸かったりしてまったり過ごすことができました。翌日には温根湯で世界最大級の鳩時計をみました、写真はその前で全員で撮ったものです。さらに山の水族館に行きイトウなど貴重な生き物をみて北海道の豊かな自然の一端を感じることができました。

以上をもちまして近況報告とさせていただきます。最後になりましたが本年度も無事に活動できましたのは、顧問の平先生をはじめOB・OGの先生方に本研究会の活動をご理解いただき格別の支援をしていただいたからだと思います。これからも先輩方の築かれた礎を大切にし活動していく所存です。私たちは福利厚生棟２階第７セミナー室で活動しておりますので、旭川医科大学にお越しの際は気軽にお立ち寄りください。今後とも旅と鉄道研究会をよろしくお願いします。

医科学研究会『医科学研究会(旧形態学研究会)の近況報告』

第７代会長　**石　原　　洋**
(医学科３年)

医科学研究会は2004年に設立されて以来、早いもので今年11年目を迎えました。10年という一つの節目を経たことと、実動会員数が減少傾向にあるという事実を受け、今年から活動内容の見直しと新会員の積極的勧誘を行いました。手始めに10周年記念会を開催し会員同士の交流を深めました。また新たな試みとして本年４月４日の皆既月食の日には天体観測会を行いました。５月上旬には野鳥観察会を行い、ウグイスやコムクドリ、昼寝中のキタキツネなど神楽岡公園内の野鳥や動物を愛でました。このように自然科学的な興味関心を共有することを目的として活動するという新たな方向性を見出し、それに伴い多数の新入部員を迎えたことで、医科研は本学における科学部的ポジションを確立しました。今後益々の発展を目指し、また新しい活動を模索している最中です。一方、会の設立当初から引き続いて勉強会を開催しております。現在はラジオ英語番組を教材とした英語学習会や、問題集を用いたUSMLE勉強会を行っており、いずれも多数の会員が集まり互いに切磋琢磨しております。そのほか、10月上旬には第２回となる学生発表会を開催しました。今回の学生発表会では発表内容を完全自由とし、「昆虫標本の作り方」「UFOの存在」「ある化学反応の反応速度について」など、各自の趣味や興味関心の赴く分野について発表しあいました。この会には10名以上の会員が参加し、有難いことに多くの基礎研究者の先生方にもお越し頂き、その後の懇親会も非常に充実したものとなりました。

このような活動を行うにあたり、顧問の暮地本宙己先生、OBの野村太一先生、また当会のOB・OG会であります医科学研究振興会の先生方より多大なご支援を賜っております。私達がこのように活動していけますのも先生方のお力添えがあればこそです。心より感謝申し上げます。

何らかの機会を設けましてOB・OGの先生方との懇親会や研究発表会を開催できましたら、私達としても非常に嬉しく存じます。今後も活動に励んでまいりますので、変わらぬご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

ボランティア部『今、自分たちにできること』

舛　森　　悠
(医学科３年)

ボランティア部は、筋ジストロフィーで長年外来に通われている患者さんの受診の補助を行う活動（通称“まきちゃん外来”）が発端となって興った部活です。当初は数名の看護学科の学生による組織であり、自らがボランティア活動を行う傍ら、患者さんとの触れ合いを通じて将来の医療職者像を思い描くことが出来る部活だったようです。

現在では先輩方からのそのような精神を受け継ぎつつ、多岐に渡りボランティアを行っています。兼部率100％のため全員が集まるのは難しいですが、嬉しいことに今年は新入部員が多数入部し、今まで以上に活発な活動を行うことが出来るようになってきました。

中でも、「そらぷちキッズキャンプ」や「献血推進活動」が、現在積極的に取り組んでいる活動の一例です。「そらぷちキッズキャンプ」とは、難病と闘う子ども達が充実した医療サポートの下、広大な自然の中で様々な事にチャレンジできるよう、滝川の丸加高原に建設された施設です。難病の子どもは日本に200人に１人いると言われており、キャンプの際は全国各地からこの施設に集まります。子どもたちの夢や希望を与える素敵なキャンプ場で私たちボランティア部はそのお手伝いをさせていただいております。現在ボランティア部では100名以上の部員がそらぷちキッズキャンプのボランティアとして活動させていただいております。「献血推進活動」では、“現状では、2027年には約101万人分の血液が不足する”（東京都福祉保健局試算）ことに危機感を抱き、特に若年層の献血者減少にスポットを当てた活動を行っています。年２回行われる献血推進キャンペーンのスタッフとしての活動を始め、キャンペーン企画や処遇品の考案を行う週１回の「献血会議」に参加している部員もいます。

その他、「難病連クリスマスパーティー」での食事会・イベントの補助や、「音楽運動療法」のサポート等の活動も行っています。また、レット症候群の子どものために５年に１度行われる「レットサマーキャンプ in 北海道」にスタッフとして参加するという、貴重な体験をさせて頂いたり、ここ数年では小児一型糖尿病の子どものために病気の理解や糖尿病との付き合い方を学ぶためのキャンプ「小児糖尿病サマーキャンプ」にキャンプボランティアとして参加させていただいております。

これらのボランティアを通じて、「自分にできることで、人の役に立つことが出来る」ということはもちろんの事、「ボランティアをしているこちら側が、頑張っている人々（例えば、患者さんや難病の子供達）に逆に勇気づけられる」「ボランティア活動を通じ人々との交流の場を広げることが出来る」ということを、常々感じています。また、将来的に医療現場で働く立場としては、低学年のうちから病気と闘う患者さんと直に接しその方の思いを伺うことが出来ることも、この部ならではの貴重な経験だと思っています。

私達は、今後も人との関わりを大切にしながら、有意義なボランティア活動を行っていきたいです。そして、部員が共に考えを深め合いながら、より一層活動を発展させていけたらと考えています。

漢方研究会

会長　**大須賀　美　帆**
(医学科３年)

漢方研究会の主な活動は毎週金曜日昼休みの部会・学内学外で行われる漢方勉強会への参加を行っております。

昼休みの部会では毎週、担当者に資料を作ってきてもらい発表して頂く形式をとっております。発表するにあたって自学し、それを部員に向けて発表することによって受動的な学習より効果的な学習を行っております。前期の前半では１年生でも分かるように漢方の基礎・考え方について学習し、後半では臨床現場で多く用いられている方剤について学習しました。後期からは今まで行っていなかった症候別に漢方の使い分けを学習しております。

部会で発表した資料については毎年テキストとしてまとめ、部員達の普段の学習に活用出来るようにしています。

学内学外で行われる勉強会への参加は学生だけの学習では得られない、より臨床的な学習を行っております。

本学のカリキュラムでは３・４年生の選択授業でしか漢方に関してしっかりと学習する機会がないため、こうした自主的な学習を通して将来臨床現場に出た際に少しでも役に立てばと思い活動しております。

このほかの活動として、学祭における医学展への出店、毎年６月に開催される東洋医学会総会への学生発表としての参加・北日本東洋医学生会議への参加を行っております。

東洋医学会総会への学生発表として、今年は「漢方を自主学習する学生の課外活動」について発表を行い前会長が会頭賞を受賞しました。

北日本東洋医学生会議への参加は去年から参加させていただいており、去年は札幌、今年は弘前で開催されました。北日本の医学部にある東洋医学を学習する学生が集まり、それぞれの大学が発表を行ったり、東北大の先生の講習会を受けたりしました。他大学の学生との交流を通して、我々の今後の活動についても多くのことが得られました。また同じ漢方を学ぶ学生と交流することによって今後の活動への意欲を向上させるものともなりました。

また勉強会以外にも５月には花見や７月に前期打ち上げ、12月には追いコンを毎年開催しており、部員同士の交流だけでなくお世話になっている顧問の加藤先生とも交流を行っております。

美 術 部

代表者　**阪　口　孟　司**
(医学科３年)

今の美術部は平成23年に新設された部です。昭和の昔には旭川医科大学にあったらしい美術部ですが、一度つぶれてしまったようです。ですから同窓会誌には久々の登場だと思います。1500字以内のお目汚しとなる紹介だよりになりますが、未熟な若者の事と思って、ど

うぞご容赦くださいませ。

美術部というと、名前だけならば一度は皆様のお耳に入る程度には市民権を得ているであろう部活動だと思いますが、旭川医科大学におきましては大いに日陰者の存在となってます。学生の大半は体育会系或いは音楽系の部活動に所属しており、彼らはもれなく現実と正面から相対しても屈せぬ精神の持ち主のように見受けられます。大学を卒業した後には医者として体力をすり減らす毎日が待っているのですから、運動や音楽をすることで体や心を強靭にするというのは非常に立派な事だと思いますが、誰もがそのような強さを持っているわけではありません。そのような活力に溢れる若者達や現実からの避難所、それがこの学校における美術部となっています。

私の性別は男なので男の立場からしか書けませんが、美術部の男の部員達は世間からのイメージでは所謂オタクであり、排斥されるべきだと各所メディアで扱われているような存在です。大学も人の集まり、「世間」の一つです。げに恐ろしき周囲の人々からの「気持ち悪い」という視線、鏡を見るたびに常にそこにある美とはほど遠い姿。そんな現実から逃れる術が我々には必要であり、絵の世界は我々を暖かく迎え入れてくれる素晴らしい世界なのです。

美術部の活動はつまるところ現実逃避です。例え絵を描いていないときでも、辛い現実からの逃避を常々心がけている志の高い部員が大半を占めている活動的な部活動となっています。勿論、絵を描いている時間が何よりも現実から我々を救い出してくれます。水彩や油絵、鉛筆画にコンピューターグラフィックスでの作画、画の世界への没入手段は多岐に渡ります。美術部の部員は個人がそれぞれに好きな技法で絵を描いており、アクリルガッシュや色鉛筆、つけペンなど、各々が自身の得意なものを磨いています。作品を仕上げるまで、途中過程を他人に見せることは少なく、学校祭での作品展で完成した結果を展示しているばかりです。つまり部長である私には部員達が何をどう描いているのか全く把握できていません。現実から逃避する際は、皆１人でいたいようなのです。

このままでは団体活動としては如何なものかと思い、大学生でも出展できる絵画展覧会はないかと方々探し回って見たところ、どうやら美術の世界において大学生は一般の枠に納められるようで、出展すれば多くのプロの先生方や美術大学・芸術大学のようなとても敵わない人たちとの競争や、美術界の流行や派閥に縛られてしまうことを強いられてしまいます。そこで最近では東京でのコミックマーケットでの出展を考えており、美術部一同現在は鋭意執筆中です。部員達が皆で力を合わせて本を作るという活動と相成りました。

このような活動で、精神の成長ができるのか問題視される方もおられることと思います。至極全うな疑問だと思います。しかしその疑問は結婚や社交の場に出ることが普通に可能な方だからこその疑問だと思います。我々、学生のうちは多少の交友を持つことができるのですが、社会に出ては世間に石を投げられる存在なので、友人や結婚は絶望的なのです。そのときになると独り朽ち果てていく現実に耐える必要が出てくるのです。そのための現実逃避の活動なのです。しかも美術部で絵を上達させることで非常に写実的な油絵を描くことができるとキャンバスの中に生涯の伴侶を作り出すことができます。毎年その油絵に筆を加えることで共に年を取ることもできるのです。ですから、今の美術部の活動は将来のための建設的な精神構築と言えると思います。

我々美術部一同、世間からの逆風に晒されようとも、今後とも勉学と創作に精魂を使い果たし、他の活動ができないようにすることで世間の皆様のご迷惑になら無いように勤めて参ります。

育児院学習サポート

代表 **鈴　木　も　も**
(医学科４年)

育児院学習サポート代表、医学科４年鈴木ももです。当部は現在25名ほどで週２回活動しています。今年度は１年生が６名入部してくれました。参加者が多くなく、細々と続けてきましたが、こ

れを期にこの活動が広がってくれればと期待しています。

当部の主な活動は旭川育児院を訪問し、そこで暮らす中学生に勉強を教えることです。旭川育児院は市内にある養護施設で、様々な理由で親と一緒に暮らせない子ども達、下は赤ちゃんから上は高校生まで、が共に生活している場所です。自宅で暮らせない理由としては親の虐待が最も多く、他にも経済的な問題、親との死別などもあるようです。

難しい背景をもっていても、育児院の子ども達はとても明るく、普通の子どもと何も変わりません。幸か不幸か、大人の様子をよく見ていて、相手の気持ちを考えることのできる優しい子が多いです。

このような境遇の子ども達と接する上で私達が気をつけていることは、子ども達の言葉を頭ごなしに否定しないということです。育児院で活動するようになって、そこで暮らす子どもには自分に自信がない子が多いという印象を受けています。大人でも、一言目から否定されると次の言葉が出なくなってしまいます。仮にその子が間違ったことを言っているなと思っても、最初の言葉は否定も肯定もせず受け止め、話を聞いてくれる人がいるという安心感を持ってもらうことが重要なのではないかと考えています。誰にでも勉強したくない時、誰かに話を聞いてほしい時があります。そんな時は「いいから勉強しなさい」ではなく、教科書と鉛筆を一旦置き、相手の話を受け止め、共感することが子どもとの信頼関係を築く上で大事なのではないでしょうか。実際は勉強を教えるより話している時間の方が長いのですが、それも私達の大切な役割だと思っています。「今日は隣に座って教えて」「来週も来る？」という言葉が信頼の印だと思い、毎週その言葉を楽しみに通っています。

７月には子どもの虐待防止協会道北支部のシンポジウムに参加し、旭川市が作成中の「虐待防止マニュアル」や新設された「こどもセンター」などの説明を聞いてきました。懇親会にも参加させて頂き、小児科医、中学校の校長先生、元児童相談所の所長さんなど子どもに関わる職種の方々とお話しでき、有意義な時間を過ごすことができました。

当部は結成から５年を過ぎたところで、部員数にも毎年ばらつきがあり、運営としてはまだ安定していないのが現状です。しかし、メンバーはみんなこの活動に誇りをもっていて、できれば後輩達に長く続けてほしいと思っています。卒後も、先輩方から引き継いだこの活動が残ってくれるようにと願い、自身の在学中は精一杯取り組みたい思います。

Med－Edu －Students to Students－

山　田　一　紀
（医学科４年）

Med－Eduは旭川医科大学の学生によって2010年に設立され、「小中高生に対する健康教育を行うことで地域社会に貢献する」ことを目的とした団体である。活動５年目の現在、医学科・看護学科合わせて14名の部員で活動しており、のべ1000名以上の児童・生徒・学生に出前授業を行ってきた。

健康教育の場は北海道の小学校・中学校・高校・高専である。１学年数名～数十名程度の、地域

の小規模校での実施も多い。テーマとしては「からだのしくみ」を軸に喫煙・ドラッグ(違法薬物)・アルコール・性(性感染症、妊娠出産、命の誕生、デートDVなど)を今までにとりあげた。小中高生に対してこのようなテーマの授業を行う理由には以下の２点がある。①これらのものに興味を持ち始める年齢であり、行動を始めうること②小中高生に対する介入によって保護者への授業内容の伝播が期待され、地域全体の健康意識の上昇につながることが挙げられる。

Med－Eduの出前授業の特徴としては以下の５つが挙げられる。①対象に年齢が近く、ピアエデュケーションを行えること　②知識を与えるだけでなく、意見を考えたり発表したり体験するといった能動的な活動を盛り込んでいること　③受け手側の主体性と当事者性を大切にしていること④対象を少人数グループに分けスタッフを配置することによってデリケートな話題に配慮した授業を行えること　⑤evidence－based medicine(EBM)：根拠に基づく医療　を基本とし医学的に正しい知識を伝えられること　⑥Med－Eduのスタッフは、児童・生徒・学生にとっての、近い未来の姿であり、キャリア教育としての側面も期待できる

出前授業の内容は全て医師・看護師・保健師の監修を受けて作成されている。スタッフのほとんどは教育のプロではないが、学校教員にはないこれらのメリットを生かした授業づくりを行っている。

また、Med－Eduの出前授業では必ずアンケート調査を実施しており、基本的に①事前②直後③事後の３回行っている。事前アンケートでは対象のニーズや知識レベルを評価し、直後アンケートでは出前授業の感想を聞き、授業の改善に役立てている。また、事前アンケートと事後アンケートで同じ項目設定することで、出前授業によって児童・生徒・学生の知識レベルがどのくらい上昇したか、またどのくらいの行動変容があったかを評価している。これらのアンケートに統計学的解析を施し、年に１度は学会発表を行うことを目標にしている。このように、Med－Eduでは出前授業を行うのみにとどまらず、客観的に成果を評価し常に改善する努力をしている。

Med－Eduでは出前授業終了後に、「Med－Eduだより」という資料を配布している。資料の内容は授業のふりかえりや発展的な知識、コラムなどである。資料では知識の羅列にとどまらず、医学的なメカニズムを伝えることを重視している。Med－Eduだよりを配布する効果としては①児童・生徒・学生が「関心期」「準備期」に入った時に情報にアクセスしやすくすること　②家に持ち帰ることで保護者への授業内容の伝播が期待できること　の２点が挙げられる。おたよりは対象の学年やニーズ、学校の授業での知識レベルを踏まえて執筆し、精査を繰り返して制作している。

日々の活動内容は出前授業の立案・計画・練習のミーティングを主軸にしている。さらに、週に１回程度、勉強会を行っている。この勉強会で医学的な知識を深め、プレゼンテーション技術の向上を目指している。これにより、よりよい出前授業をつくることができる。

北海道では喫煙率や人工妊娠中絶率が他県に比べて高い。Med－Eduの健康教育によって北海道の地域の健康意識を高め、予防医療につなげる。さらに、私達の蒔いた小さな医療の種がやがて大きな実をつけ北海道の医療の一つの光となってくれることを願ってやまない。

放送研究会

代表　**フェアウェザー未央ジューン**
(医学科４年)

放送研究会は現在32名の部員で活動しています。活動内容は滑舌を良くするための発声練習や、映像制作など、メディアに関わる幅広いことをしています。

普段の活動はコンテストに出品するための映像作品のアイデアを考えたり、ナレーションで聞き取りやすい声で話すための

滑舌、発声練習が主となっています。活動頻度は週に１回以上です。また、動画を撮影するために、週末などの空いた時間に部員を集め学校外での活動も行っています。

放送研究会は個人プレーの時もあれば、団体プレーが求められることもあり、活動形態はいつも異なります。ですが、兼部率も高い中、個性あふれる部員で構成され、いつも楽しく活動しています。現在はビデオカメラ・三脚・マイクのみを使っており、十分に放送機材がそろっているとは言い難いですが、これだけの設備の中で、いかにユニークで面白い撮影ができるかを部員同士でアイデアを出し合い、その技術を実際の撮影で生かすようにしています。この個性あふれる部員がいるからこそ、今の放送研究会は成り立っているのだと思います。また、文化は模倣されることで磨きがかかります。映像制作もまた然り、他の映像作品や色んな素材の良いところを吸収して新たな作品を生み出します。良い作品を作るためには他の良い作品にたくさん触れ、自分自身の創造力をつけることが大切になります。そして何より、作品は制作側が楽しくなければ良い作品は作れません。ですから放送研究会ではとにかく「楽しくつくる」をモットーに日々活動しています。

設立４年目の、歴史の浅い団体であるため活動実績はそう多くはありませんが、映像作品などをコンテストに出品したり、他団体のイベントでの司会を行ったりと、積極的に活動を行っています。これまで「旭川イメージアップ動画コンテスト」では最優秀賞を、「豊橋ゴミゼロ運動スナップムービーコンテスト」では優秀賞をいただくことができました。今年度はラジオに挑戦し、「学生ラジオCMコンテスト」で北海道・東北ブロック賞をいただくことができました。この作品は２週間ほど実際にラジオで放送されたため、本学の宣伝となる内容を全道に発信できたことをとても嬉しく思っています。

放送は自分の伝えたい思いや意見を発信したり、少数派の意見に耳を傾け、それを周囲に広めていく力を持っています。情報を発信できるという特性を生かし、様々な視点を交えながら活動していくことが私たちの理想です。今後の展望としては、医学生ならではの視点を生かし、メディアだからできることは何かを日々研究していけたらと思っています。

プライマリー・ケアを学ぶ会

宮　内　琴　菜

私たちはプライマリー・ケア、総合診療、家庭医療などについて広く学ぶことを目的として活動しております。

今年度より週に一回のプライマリーケアレクチャーズへの参加をメインの活動内容としております。木曜日朝7:30からの30分間総合診療部の医局をお借りして、ネットを通じて沖縄から北海道まで全国の先生方のプライマリー・ケアに関する講義を受けています。

さまざまな先生方より日常診療のポイントや災害医療など幅広い内容のレクチャーを受けることで、学びを深めております。考えたことや疑問点などその場で話し合い、一人で学習するのとは違う発見ができているように思います。

毎週の活動の他に不定期で、講師の先生をお呼びして学習会の開催も企画しております。

今度とも学年を超えてプライマリー・ケアについて学習していきたいです。

手芸サークル はんどめいだー『広がる「はんどめいど」』

代表 **野 瀬 瑞 季**
(医学科３年)

１．はじめに

旭川医科大学手芸サークル「はんどめいだー」は、2013年５月に発足し、今年で３年目を迎えました。現在、部員は約30名に増えました。はんどめいだーは、編み物や刺繍、ビーズなどの「手芸」を、個人だけではなく仲間同士で、コミュニケーションをとりながら楽しむことを目的として活動しています。初心者も経験者も手芸を楽しめる場として、ゆるい雰囲気の中で楽しく活動しております。

２．主な活動内容

普段の活動としましては、編み物や刺繍、ビーズや裁縫など、「手芸」であれば何でも好きなことをみんなで持ち寄って、自由に楽しく活動しております。手芸は個人でコツコツやるもの…というイメージを持たれている方もいらっしゃるかもしれません。しかし、勉強や他の部活、バイトなどで忙しい医学生。何か手芸を始めるにしても、１人で一から始めるのは、なかなか難しいのではないかと思います。はんどめいだーは、そんな忙しい医学生たちが集まって、初心者は経験者に教えてもらいながら、経験者同士でもわからないところがあれば教え合いながら協力して作品を作っていくことができる場でもあります。また、活動の中で、個人で作った作品を発表し合うのも、部員たちの中では良い刺激となっております。

大きなイベントとしましては、昨年から医大祭にて作品の販売を行っております。普段の活動では、そのための作品も制作しております。来年度の医大祭でもフリーマーケットブースにて販売予定ですので、宜しくお願い致します。

３．広がる「はんどめいど」

部員も増え、手芸のジャンルも以前より多様化し、作品の幅も広がってまいりました。私自身も各種イベントへの出品をきっかけに、様々なジャンルの手芸に挑戦中です。また、はんどめいだーに入ってから手芸をするようになったという部員も多く、代表としては嬉しい限りです。現在部員は、１～６年生、医学科・看護科を問わず、和気あいあいと「はんどめいど」を楽しんでいます。

更に今年は、11月14日(土)～15日(日)にCoCoDeにて行われますハンドメイドイベント、「アサヒカワモノアンテナ amoa」にて作品を販売させていただくことになりました。ハンドメイド作家の方々の隣で作品を販売させていただくのは少し緊張しますが、部員たちにとっても良い刺激となることと思いますし、「はんどめいど」の良さを多くの市民の皆様に伝えることのできる良い機会になると思います。

今後とも、部員自身が「はんどめいど」を楽しめる場を作っていける様、また、積極的に「はんどめいど」の良さや楽しさを発信し、より多くの方々に楽しんでいただける様、精進したいと思っております。まだまだ小さなサークルではございますが、わたしたち「はんどめいだー」をこれからも温かく見守っていただけると幸いです。

Surgeon's hands

部長 **河 原 拓 也**
(医学科５年)

初めまして、Surgeon's hands部長の河原拓也と申します。本部活は2015年５月に立ち上げた新規団体ですので、最初に本部活の紹介をさせて頂きます。

本部活は旧第２外科の先生方の実験のお手伝いから始まり、日本の医学部ではまだ珍しいブタなどの大型動物を用いた医学教育に取り組もうという意図のもと部を新設しました。

実際に麻酔導入から閉腹までを外科医のご指導のもと、助手や鍛錬を積めば執刀させて頂くチャンスもあります。実験においては必ず犠牲死がついてきますが、その尊い命を使わせて頂き様々な外科手技を勉強させて頂いております。

始めは糸結び、道具の名前、持ち方や使い方を学び、徐々にステップアップしていき、静脈ルートの確保や結紮などを助手として行いつつ、手術手順の学習や先生の手技を盗もうと努力しております。

また犠牲死の前に、脾臓や腎臓の摘出、腸管吻合などをさせて頂く機会もあり、最後は学生で閉腹し、外科手技の基本である縫合の鍛錬を積んでおります。

私自身、はじめは糸結びの際の加減もわからず糸のテンションが一定にならないことや、結び目もグチャグチャになっておりましたが、練習すれば上手くなっていくことが非常に楽しく感じていますし、電気メスを握ったこともなかったのですが、正しい持ち方や使い方を学んで今では開腹や腹腔鏡のポートを入れさせて頂けるまでになりました。

早くから実験に関わっている先輩の中には、カットダウン法で内頸動静脈のルート確保や腹腔鏡でのエネルギーデバイスを用いた手技や腎摘・脾摘の執刀を行っている方もおります。

臨床実習では、メスを握る・縫合・結紮など現在では臨床現場でなかなか出来ない手技を学生のうちからさせて頂くことは大変勉強になります。また自身で直接手術に携わるので解剖の知識もしっかり学ぶことができます。

このような実践的な勉強は、臨床実習がまだ始まっていない学生にとっても外科という学問に触れる機会や講義で学んでいることを直接みることができ、大変勉強になると思います。

その他の取り組みでは、アドバンス実習と関連させて腹腔鏡の縫合・結紮のトレーニングを行い、そのトレーニング時間と学習効果との関連を学会で発表しようとまとめております。

まだまだ始まったばかりの部活で、動物実験による外科手技を学ぶことで手一杯になっておりますが、ドライラボトレーニングに加え、論文抄読や外科的な知識に関する勉強会など実践と座学の両方を学んでいけるように、更にはそうすることで低学年の学生にも外科に触れる機会を作っていけたらと考えております。

新しい部活で右も左もわからない状況ですが、皆様ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

訃 報

大平基之先生を偲んで

大田内科消化器科クリニック
大 田 人 可
（第４期生）

同期で、第３内科同門の大平基之先生が平成27年１月12日に逝去されました。

昨年半ばから体調がすぐれず、７月に検査を受けたところ、進行した肝細胞癌と診断されたそうです。８月に大平先生が札幌の病院に入院しているという情報を聞き、８月下旬にお見舞いに行ってきました。病状と今後の治療方針などを聞き、「できるだけ人に知られないように療養したい」と言い、「頑張るわ・・」という言葉で別れました。

若い頃、肝臓の組織を使った研究を行っており、その頃にＣ型肝炎に感染したのでないか、その後、あまり健診を受けずにいたため発見がおくれた、という話をしていました。その後、札幌から旭川に戻って療養するという連絡はありましたが、会ったのはその日が最後になりました。

１月12日に奥様である大平賀子先生（６期生）から亡くなった旨の連絡がありました。療養中の姿を人にはあまり見せたくなく、面会やお見舞いはほとんどお断りしていたとのことです。
葬儀は、家族葬・無宗教で行われました。

何事にも論理的で、真面目で一生懸命、思ったことははっきり言うし実行もする先生で、周りからの信頼も厚かったです。学生時代はクラスが違ったため、第３内科入局後も勤務先がすれ違っており、交流が始まったのはお互いが大学に戻った昭和63年からです。

平成２年、当時としてはやや遅く33歳で結婚、周囲から第３内科独身会会長と言われていた先生の結婚ということで、たくさんの方から祝福され、私も発起人の一人として祝賀会を盛り上げました。その後は、夫婦ともどものお付き合いをさせていただきました。

年２回の第３内科同門会の会合のあと、同期何人かで２次会に行くのが常で、これが楽しみで同門会に出席していたみたいなものでした。印象に残っているのは、当時函館協会病院の院長だった大平先生は、他の総合病院の院長をしている同期の悩みに、「それは、こうしたらいいよ・・・」などと、具体的に解決方法を話し、さすがだなあと聞いていました。総合病院のトップは大変そうでしたが、大平先生だから上手に出来るのだろうなと感心しました。私は、だいたい12時前には先に退散してしまうことが多かったのですが、先生はそのあともまだまだ続くことが多く、今になって、もっと付き合っておけばよかったと後悔しています。

その後、平成22年からは札幌の病院に移り、外来診療だけの仕事になった時は、少しほっとした表情でストレスも減ったと言っておりました。

函館、札幌と長い単身赴任生活でしたが、週末にはなるべく旭川の自宅に帰って家族と過ごし、家庭菜園ではいろいろな野菜を育てていました。日曜日に大平先生の家の近くを通ったとき、野菜の世話をしている姿をしばしばみかけました。

もし、私が先に死んだときは、大平先生に友人代表の弔辞をお願いしてほしい、と妻に伝えていたのに、それもかなわず、逆になってしまいました。本来、そこにいるべき人がいない、ということは、無念でなりません。

謹んで大平先生のご冥福をお祈りし、追悼の言葉とさせていただきます。

小山内 学先生を偲んで

旭川医科大学教育センター
講 師 **井 上 裕 靖**
（第15期生）

平成27年８月16日、同期の小山内 学先生（47歳）が亡くなりました。１年以上もの間、膵癌と闘い続けていたとのこと。追悼の意を表して、彼との思い出を綴ります。

彼と僕は同郷で、幼少期からの知り合い、いわゆる幼馴染です。昔を偲んで”学”と呼ばせてもらいます。

学とは同じ中学から同じ高校に進学し、彼の双子の弟に誘われて軟式テニス部に入部してから接点が増えました。当時から押しの強いテニスをする男で、そのあたりは同期みんなの想像通り。高校卒業後も縁は続き、同じ年に同じ大学に入学。同じアパートの上下に住み始め、同じく軟式テニス部に籍を置きました。僕にとっては、まさに青春時代を共に過ごした大切な友人の一人です。

大学卒業後はそれぞれ違う分野に進み、部活のOB会で顔を合わせるくらいになりましたが、訃報を聞いた時にはその早すぎる死を信じることができませんでした。今でもテニスコートに行けば誰かと乱打してるんじゃないか？と思ってしまう自分がいます。

学生時代を通して、学の印象はいわゆる「健康優良男子」。体育会系サークルの部長を任されるタイプです。ただ決して真面目一辺倒ではなく、おちゃらけて周囲を和ませる一面も持ち合わせていました。

仲間とスキーに行ったり、花見やバーベキューを楽しんだ事を思い出します。低学年のうちは仲間で長距離ドライブにも行きました。交代で運転するのですが、彼は少し頭を傾けて運転する癖があります。後部座席から茶化され、学はそれに反論して・・・。そのあと皆で大笑いしました。テニスで強打を狙う時にも、同じように首をかしげていましたね。

彼は大勢で飲みに行くのも好きで、よく仲間でビアガーデンに繰り出しました。酒席の好きな男ですが、決して酒が強いわけではありません。同期で宅飲みして、学を含む全員が潰れたこともありました。何人かでカラオケに行くこともしばしば。あの頃は皆それなりの悩みを抱えていたけど、本当に楽しかった。

体育会系のノリを持つ彼でしたが、仲間や後輩が悩んでいると、小さな心配りをする優しい一面もありました。学はどちらかといえば義理人情を大切にする男で、でもそれを前面に押し出すことはしない。相手に気を使わせないようにしていたのだと思います。そんな学だからこそ、良い仲間・同僚・家族に恵まれたのでしょう。

思い出はまだまだ尽きないけれど、学よ、どうか安らかに眠って欲しい。

訃　報

平成27年４月22日　特別会員　美甘和哉 名誉教授
平成27年９月５日　特別会員　黒田一秀 元学長
以上の方々がご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

事務局だより

特別会員・会員の異動について（旭川医科大学内）

下記の通り人事異動がありましたのでお知らせ致します。　（医学部医学科分）（准教授以上）

氏　名	旧　職　名	異　動　内　容	発令日
矢島　大介	医学部法医学講座　准教授	辞職	H26.12.31
吉岡　英治	医学部健康科学講座　准教授	研究休職	H27. 1. 1
浅利　優	医学部法医学講座　助教	昇任（医学部法医学講座 准教授）	H27. 1. 1
沖崎　貴琢	医学部放射線医学講座　講師	昇任（医学部放射線医学講座 准教授）	H27. 2.11
間宮　敬子	教育センター　准教授	辞職	H27. 2.28
高後　裕	医学部内科学講座（消化器・血液腫瘍制御内科学分野）　教授	定年退職	H27. 3.31
岩崎　寛	医学部麻酔・蘇生学講座　教授	定年退職	H27. 3.31
田中　剛	医学部ドイツ語　准教授	辞職	H27. 3.31
藤村　洋太	病院精神科神経科　病院准教授	辞職	H27. 3.31
及川　賢輔	医学部病理学講座（免疫病理分野）　講師	昇任（医学部看護学講座　教授）	H27. 4. 1
平　義樹	医学部解剖学講座（顕微解剖学分野）　講師	昇任（医学部看護学講座　准教授）	H27. 4. 1
住友　和弘	医学部循環呼吸医療再生フロンティア講座　特任講師	昇任（医学部循環呼吸医療再生フロンティア講座特任准教授）	H27. 4. 1
武井　英博		採用（病院病理部　教授）	H27. 5. 1
甲賀　大輔		採用（医学部解剖学講座（顕微解剖学分野）准教授）	H27. 5. 1
武井　英博	病院病理部　教授	命　（病院病理診断科　教授）	H27. 5.14
内田　恒	医学部外科学講座（循環・呼吸・腫瘍病態外科学分野）　准教授	辞職	H27. 9.30
國澤　卓之	病院手術部　准教授	昇任（医学部麻酔・蘇生学講座　教授）	H27.10.15

平成26年度 旭川医科大学医学部医学科同窓会事業報告

平成26年

４月16日　第14回医学奨励賞事前審査委員会開催（於：総合研究棟6階カンファレンスルーム）

５月27日　第40回医大祭（６月７～８日）に対し資金援助

６月10日　第14回医学奨励賞選考委員会（於：一般教育会議室）

６月17日　卒後臨床研修センター、同窓会合同企画 旭川医科大学病院医師臨床研修プログラム説明会・情報交換会（於：旭川ロワジールホテル）

６月18日　第１回幹事会（平成25年度事業報告、平成26年度事業計画）（於：事務局棟第２会議室）

６月21日　４期 髙橋康二氏 旭川医科大学放射線医学講座教授就任祝賀会スタンド花（於：旭川グランドホテル）

６月27日　飯塚理事・副学長に退任記念品を贈呈

７月１日　二輪草センター主催（同窓会共催）合同入局説明会、軽食・飲料提供（於：臨床講義棟臨床第３講義室）

９月30日　第２回幹事会（同窓会員資格見直し）（持ち回り会議）（会則の一部改正は26・10・17施行）

10月20日　３期 佐藤卓氏逝去（26・10・18）香典、弔電、供花

10月22日　２期 西野茂夫氏逝去（26・３）香典、弔電

10月９日　第14回医学奨励賞受賞記念講演会（於：看護学科棟大講義室）
学術奨励賞：第14期 牧野雄一氏
特別奨励賞：第６期 鈴木康之氏、第６期 今本千衣子氏、第４期 橋本和季氏
出席者82名（一般50名、学生名：１年７名、２年２名、３年２名、４年４名、５年15名、６年２名）

10月11日　５期 山本明美氏 旭川医科大学皮膚科学講座教授就任祝賀会スタンド花（於：旭川グランドホテル）

12月19日　同窓会誌第32号（2014年）発行

平成27年

１月23日　平成27年度医師国家試験支援者に対し資金援助

３月６日　27年度入学に係る合格者に対し同窓会入会案内を送付(以後前期・後期合格者に送付)

３月３日　第37期卒業予定者に対し同窓会入会案内を送付（37期幹事の協力を得る）

３月18日　高後教授、岩崎教授に対し退任記念品を贈呈

３月25日　第37期卒業生に対し卒業記念品贈呈及び祝賀会にて同窓会長からの祝辞

平成27年度 旭川医科大学医学部医学科同窓会事業計画（案）

平成27年

６月６・７日　医大祭（同窓会から資金援助）

６月17日　第1回幹事会（平成26年度事業報告、平成27年度事業計画）（於：事務局棟第２会議室）

６月23日　二輪草センター主催（同窓会共催）合同入局説明会　軽食・飲料提供（於：臨床講義棟臨床第１講義室）

７月16日　卒後臨床研修センター、同窓会合同企画　旭川医科大学病院医師臨床研修プログラム説明会・情報交換会（場所：旭川グランドホテル）

12月上旬　同窓会誌第33号（2015）発行

平成28年

２月上旬　平成27年度医師国家試験（支援者に同窓会から資金援助）

３月中旬　平成27年度退任教員に対し退職記念アルバム贈呈（２名）

３月下旬　38期卒業生に卒業記念品贈呈及び祝賀会にて同窓会長から祝辞

平成26年度 医学部医学科同窓会収支決算書

（平成26年４月１日から平成27年３月31日まで）

〈収入の部〉

（単位:円）

区分	予算額	決算額	差異	備考
前年度繰越金	15,509,977	15,509,977	0	旭川信金定期8,000,000、郵便普通7,509,977
入会金	200,000	292,000	92,000	146名（25期1、31期1、32期2、33期1、35期1、36期5、37期57、大学院2、27年度入学者76）
会費	10,000,000	9,864,000	△ 136,000	会費908名7,108,000、終身会費56名2,756,000（1期2、2期2、3期1、4期8、5期13、6期29、大学院1）
預金利息	3,000	3,087	87	旭川信金1,599、郵便局1,488
ドクター総合補償保険手数料	450,000	490,658	40,658	第一成和事務所
その他	0	0	0	
合計	26,162,977	26,159,722	3,255	

〈支出の部〉

（単位:円）

区分	予算額	決算額	差異	備考
1．事業費	6,753,000	6,704,698	△ 48,302	
同窓会誌作製費	3,700,000	3,678,670	△ 21,330	会誌第32号作製（印刷・製本・CD等）3,375,000 会誌送付料 303,670
医学奨励賞事業費	750,000	737,167	△ 12,833	学術奨励賞副賞 222,741 特別奨励賞副賞 222,741 撮影料、写真プリント 38,805 演台切り花、茶、目録等 5,502 講演会場一文字・看板・表彰状等 135,000 祝賀会・懇談会 99,600 副賞振込手数料・賞状郵送 2,778 式典運営謝礼 10,000
卒後研修医支援事業費	1,080,000	1,092,240	12,240	二輪草センター「合同医局説明会」 85,760 卒後センター合同企画 「臨床研修プログラム説明会」 1,006,480
ホームページ管理費	398,000	397,688	△ 312	HPサーバー管理費（26年度分） 337,050 36期生（26.3卒）名簿データ入力（ID,PW）作成 60,638
卒業記念品費	150,000	140,113	△ 9,887	第37期生（電波時計）
退職記念品費	200,000	197,400	△ 5,600	記念品（飯塚理事、高後教授、岩崎教授）
同窓会入会案内印刷費	25,000	43,900	18,900	第37期生、27年度新入学生
在学生各種事業支援費	100,000	100,000	0	大学祭運営支援
国試受験補助事業費	300,000	300,000	0	
その他事業費	50,000	20,520	△ 29,480	同期会用住所宛名シール（6期、16期）
2．事務費	2,065,000	2,130,098	65,098	
人件費	1,300,000	1,529,617	229,617	事務局職員及び協力者、労災保険
事務室管理費	170,000	170,503	503	事務室使用料 99,761 電話・電気・水道・暖房・コピー使用料 70,742
通信費	20,000	30,925	10,925	郵便切手、メール便
備品	0	0	0	
消耗品費	50,000	91,641	41,641	感光体ユニット、FAX用インクフイルム、掃除用具、文房具、住所宛名シール、会費徴収用領収書
交際費	50,000	46,559	△ 3,441	支援下さる関係者
会議費	50,000	32,209	△ 17,791	幹事会、医学奨励賞選考委員会弁当・茶
交通費	20,000	2,520	△ 17,480	会計監査決算書監査のための連絡
慶弔費	200,000	110,624	△ 89,376	放射線医学講座高橋教授（就任祝賀会スタンド花）、山本明美皮膚科学講座教授（就任祝賀会スタンド花）、3期佐藤卓氏（香典、供花、弔電）、2期西野茂夫氏（香典）
その他事務費	105,000	115,500	10,500	公認会計士顧問料（105,000）、会計ソフト更新（10,500）
予備費	100,000	0	△ 100,000	
3．支払合計（1＋2）	8,818,000	8,834,796	16,796	
4．次年度繰越金（収入－支出）	17,344,977	17,324,926	△ 20,051	旭川信金8,000,000、郵便普通9,324,926
合計	26,162,977	26,159,722	△ 3,255	

平成27年度 医学部医学科同窓会収支予算案

（平成27年４月１日から平成28年３月31日まで）

〈収入の部〉

（単位:円）

区分	本年度予算額	前年度決算額	差異	備考
前年度繰越金	17,324,926	15,509,977	1,814,949	旭川信金定期8,000,000、郵便普通9,324,926
入会金	400,000	292,000	108,000	新卒者・28年度入学者加入率100％見込
会費	10,000,000	9,864,000	136,000	対前年比101％見込
預金利息	3,000	3,087	△ 87	
ドクター総合補償保険手数料	500,000	490,658	9,342	
その他	0	0	0	
合計	28,227,926	26,159,722	2,068,204	

〈支出の部〉

（単位:円）

区分	本年度予算額	前年度決算額	差異	備考
1．事業費	7,065,580	6,704,698	360,882	
同窓会誌作製費	3,700,000	3,678,670	21,330	会誌第33号印刷・製本・CD等 3,400,000 会誌送付料 300,000
医学奨励賞事業費	819,000	737,167	81,833	学術奨励賞副賞 222,741 特別奨励賞副賞 222,741 受賞者交通費 100,000 撮影、写真現像等 35,000 演台花、目録等 5,000 講演会場一文字、表彰状、式次第等 120,000 祝賀会 100,000 副賞振込手数料、賞状郵送 3,518 式典運営謝礼 10,000
卒後研修医支援事業費	1,250,000	1,092,240	157,760	二輪草センター「合同医局説明会」 100,000 卒後センター合同企画「臨床研修プログラム説明会」 1,000,000 卒後臨床研修奨励発表会（新規） 150,000
ホームページ管理費	446,580	397,688	48,892	HPサーバー管理費 298,080 37期生(27.3卒)名簿データ入力(ID,PW)作成 105,300 名簿データ更新 43,200
卒業記念品費	150,000	140,113	9,887	第38期生（電波時計）
退職記念品費	200,000	194,400	5,600	2名（羽田教授、松田教授）
同窓会入会案内印刷費	50,000	43,900	6,100	第38期卒業生、28年度新入学生
在学生各種事業支援費	100,0000	100,000	0	医大祭支援
国試受験補助費	300,000	300,000	0	医師国家試験支援
その他事業費	50,000	20,520	29,480	同期会開催支援等
2．事務費	2,606,566	2,130,098	476,468	
人件費	1,800,000	1,529,617	270,383	事務局職員及び協力者、労災保険
事務室管理費	181,566	170,503	11,063	事務室使用料 101,566 電話・電気・水道・暖房・コピー 80,000
通信費	30,000	30,925	△ 925	郵便切手、メール便（幹事、同窓生等との連絡）
備品	0	0	0	
消耗品費	100,000	91,641	8,359	封筒2万円、ファイル等事務用品5万円、複写機消耗品5万円
交際費	50,000	46,559	3,441	支援下さる関係者
会議費	30,000	32,209	△ 2,209	弁当・茶（幹事会）
交通費	10,000	2,520	7,480	会計監査連絡等
慶弔費	200,000	110,624	89,376	
その他事務費	105,000	115,500	△ 10,500	会計士顧問料
予備費	100,000	0	100,000	
3．支出額計	9,672,146	8,834,796	837,350	
4．次年度繰越金	18,555,780	17,324,926	1,230,854	
合計	26,227,926	26,159,722	2,068,204	

事務局からのお願い

１．会員自宅住所等の問い合わせ

事務局に対して同窓会員または親族を名乗り会員自宅住所等の問い合わせがございますが、当局ではいっさい返答しておりません。業者からの同窓会誌の提供・売却依頼にもお断り致しております。

また、事務局職員や同窓生を名乗り、皆様の住所を調査するために、勤務先やご実家へ電話をする業者があるようです。当局では電話で皆様のご住所を確認することは一切いたしておりませんのでご注意下さい。不信に思われましたら即答せずに、同窓会事務局にお問い合わせ下さい。

２．名簿記載事項の変更

現住所、勤務先等に変更があった場合は同窓会ホームページ上のオンライン住所録からご自身で変更いただくか、あるいは綴じ込みのハガキでご連絡くだされば事務局で変更します。

同窓会ホームページは http://www.asahikawaidai.jp です。

オンライン住所録で変更頂く場合は、卒業時に交付したIDとパスワードを必要となります。IDとパスワードを紛失した場合は、同窓会事務局宛てメール又は手紙にてお問合せ願います。

３．会員名簿をCD－ROM化

2005年（第23号）発行分から会員名簿をCD－ROM化しています。CD－ROMでは勤務先・ご自宅住所等は原則公開とさせていただいております。

ただし、なんらかの事情で、ご自宅住所等情報の否掲載を希望する場合は、オンライン住所録で否掲載の手続きをお取りいただくか、事務局宛てにメール又は綴じ込みのハガキにてお知らせ下さい。

なお、同窓会事務局では、皆様にご提供頂いている個人情報の管理につきまして、細心の注意を払っております。皆様におかれましても、会員名簿（CD－ROM）の取り扱いに十分ご配慮頂き、会員以外への譲渡や貸与等ご遠慮頂くようお願い致します。

同窓会ホームページについて

平成21年４月から同窓会ホームページをリニューアルいたしました。

特に「会員専用掲示板」では会員からのご意見やご要望などを書き込んでいただくコーナーを設けましたので忌憚のないご意見をお寄せいただきたくよろしくお願いいたします。

※同窓会ホームページからリンクできる項目

「旭川医科大学」、「旭川医科大学病院」、「旭川医科大学図書館」、「学生団体（部・サークル）」、「全国大学（医学系・看護系・薬学系）一覧」、「各種証明証の発行方法」となっております。

「ドクター総合補償制度」のご案内と会費納入について

同窓会では、日常の医療に不可欠な「医師賠償責任保険」及び会員の疾病や不慮の事故で就業不能になった際に役立つ「所得補償保険」からなる『ドクター総合補償制度』の団体契約の窓口となっております。

掛金（保険料）は団体割引が適用され、個人で契約するよりも割安な保険料で加入することができます。

この保険の引受保険会社は、東京海上日動火災保険㈱が、取引代理店は、㈱第一成和事務所が行っております。

㈱第一成和事務所の連絡先

住所　〒103-8214　東京都中央区日本橋久松町11番６号　日本橋ＴＳビル８階
TEL　フリーダイヤル 0120-100-492/03-3669-2831
FAX　03-3667-9037
E－mail　seiwa@d－seiwa.co.jp

通常の会費と終身会費について

通常の会費は、30年間のお支払いで終了となります。それ以後につきましては、会則にありますように５万円を前納して頂くことで終身会員（終身会費納入者）となります。

終身会費はこれまで第１期生から第６期生の皆様についてお願いいたしました。今年度は第７期生についてお支払いのご案内をさせて頂きます。

なお、第１期から第６期生でまだ終身会費を払い込み頂いてない方には、今回改めてご案内させて頂いておりますので、よろしくお願い申し上げます。

会費納入などに関しまして不明の点がございましたら、同窓会事務局までご照会下さい。

同窓会事務局への連絡

本会の専用事務室は、関係者のご配慮により実験実習機器センター５階に設けております。

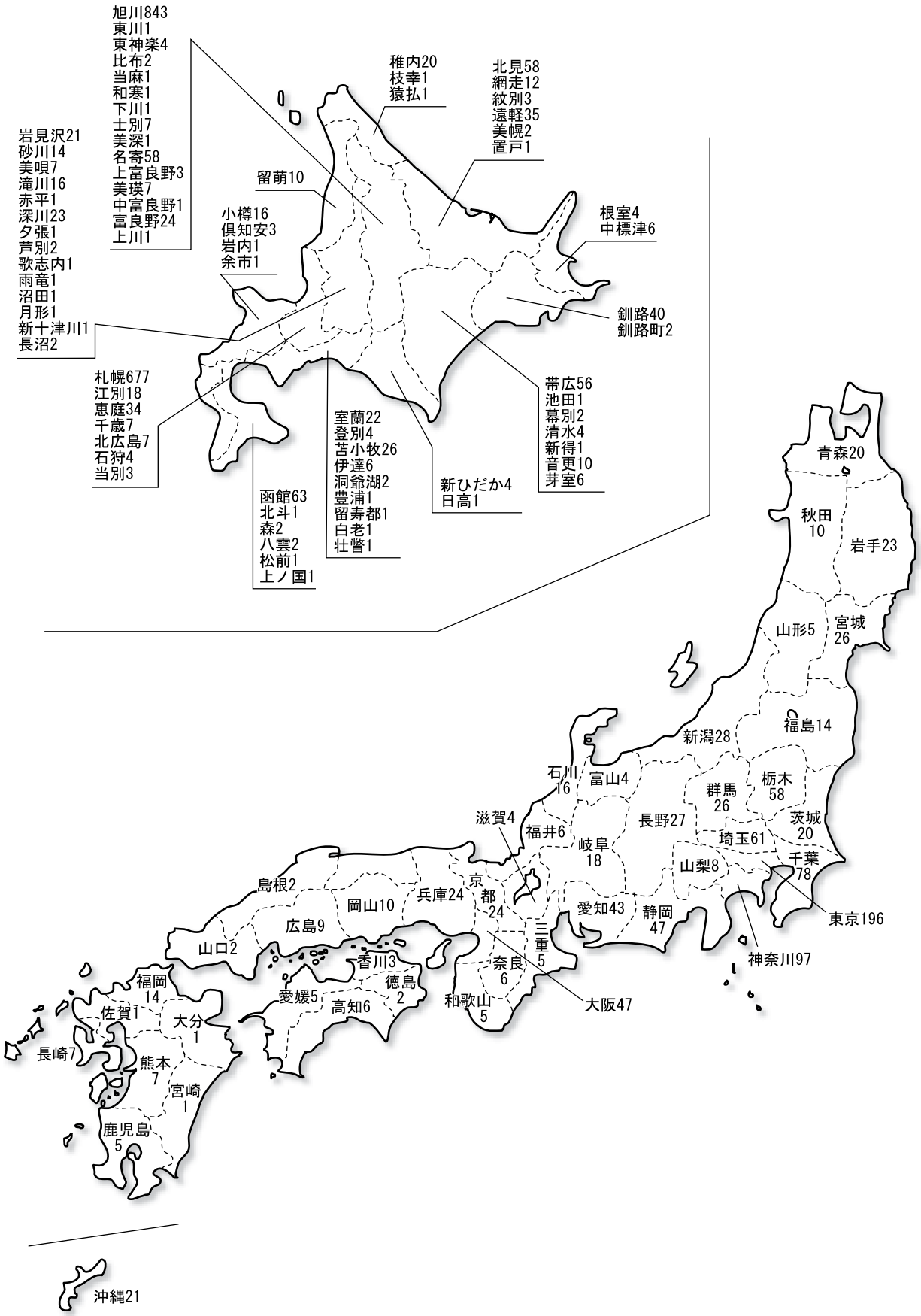
担当者は時間雇用となっており、そのため担当者不在の時間帯があり、電話に出られないケースがあります。その場合はメール、FAX若しくはハガキ等の文書でお問い合わせ頂ければ幸いです。会員の皆様にはご不便をおかけしますが、事情をご理解の上、ご協力下さるようお願いいたします。

〒078-8510　旭川市緑が丘東２条１丁目１番１号
TEL・FAX 0166－68－2234
E-mail：mdosokai@asahikawa-med.ac.jp

会員動向

会 員 動 向

勤務先	道内							道外								その他	海外	小計	死亡	合計
	道南	道央	(札幌)	道東	道北	(旭川)	道内小計	東北	関東	(東京)	中部・北陸	近畿	中国・四国	九州・沖縄	道外小計					
1　期	1	11	7	3	23	20	38	8	16	6	3	2	2	1	32	1	0	71	7	78
2　期	2	29	21	4	28	22	63	1	10	7	0	4	1	1	17	2	0	82	5	87
3　期	7	24	18	11	21	18	63	0	14	4	2	1	1	2	20	0		83	6	89
4　期	7	22	14	11	28	23	68	2	13	7	6	2	3	0	26	1	0	95	3	98
5　期	5	29	24	3	28	24	65	3	14	2	4	4	2	4	31	2	0	98	1	99
6　期	8	27	23	6	25	23	66	1	17	5	3	1	1	0	23	4	0	93	2	95
7　期	5	20	17	12	32	25	69	2	18	3	2	1	1	3	27	11	1	108	6	114
8　期	6	35	22	8	32	29	81	2	14	3	2	1	5	2	26	7	0	114	0	114
9　期	7	36	26	10	24	21	77	5	18	8	5	4	5	1	38	7	1	123	1	124
10　期	5	41	33	10	23	19	79	3	17	2	1	4	1	0	26	5	0	110	0	110
11　期	8	34	28	13	27	23	82	4	24	9	3	2	2	0	35	5	0	122	1	123
12　期	5	31	25	6	28	22	70	6	25	8	5	1	2	1	40	9	1	120	2	122
13　期	6	25	15	8	19	13	58	3	27	15	5	1	2	2	40	16	1	115	6	121
14　期	7	25	21	10	30	25	72	3	22	8	3	0	2	0	30	9	1	112	1	113
15　期	3	43	37	6	33	26	85	2	8	3	0		2	0	12	11	1	109	2	111
16　期	11	43	33	7	28	27	89	3	12	4	6	2	0	3	26	2	0	117	2	119
17　期	2	33	28	7	23	23	65	0	16	4	0		1	1	18	15	0	98	0	98
18　期	2	29	23	7	24	16	62	2	11	4	5	1	0		19	16	1	98	1	99
19　期	1	23	17	10	18	15	52	2	20	8	1	3	1	2	29	15	0	96	0	96
20　期	3	23	18	10	15	12	51	4	11	6	4	0	1	1	21	26	2	100	0	100
21　期	1	18	14	4	26	24	49	2	17	7	4	3	1	0	27	22	1	99	0	99
22　期	4	17	13	5	32	26	58	5	12	5	8	1	2	0	28	15	2	103	0	103
23　期	1	14	13	7	27	22	49	1	18	6	1	2	2	1	25	25	0	99	2	101
24　期	5	21	15	3	24	23	53	1	16	5	5	3	1	2	28	15	0	96	1	97
25　期	1	14	11	4	29	23	48	1	14	5	4	2	2	1	24	19	1	92	0	92
26　期	5	20	18	5	18	17	48	2	11	2	2	3	1	0	19	40	0	107	0	107
27　期	1	14	13	6	20	18	41	3	9	4	6	3	1	2	24	35	1	101	0	101
28　期	2	14	12	4	21	20	41	3	16	4	4	1	1	3	28	30	0	99	0	99
29　期	4	16	12	5	16	13	41	1	18	9	3	2	3	3	30	24	0	95	0	95
30　期	1	20	19	3	26	21	50	3	21	6	5	4	2	2	37	9	0	96	0	96
31　期	1	20	18	4	28	24	53	5	21	6	9	3	1	3	42	6	0	101	0	101
32　期	4	11	10	6	34	29	55	1	10	3	3	5	0	2	21	20	1	97	0	97
33　期	2	15	11	8	19	15	44	0	25	8	8	2	3	3	41	8	0	93	0	93
34　期	3	15	13	4	18	16	40	3	18	5	6	4	4	1	36	16	0	92	0	92
35　期	1	16	13	6	21	19	44	3	19	3	8	6	1	1	38	13	0	95	0	95
36　期	0	10	7	2	47	43	59	5	6	0	6	5	1	2	25	14	0	98	0	98
37　期	2	15	10	3	49	43	69	0	9	2	3	1	2	4	19	11	0	99	0	99
小　計	139	853	672	241	964	822	2,197	95	587	196	145	84	63	54	1,028	486	15	3,726	49	3,775
大学院	2	6	5	2	25	21	35	0	3	0	1	2	0	2	8	9	0	52	0	52
合　計	141	859	677	243	989	843	2,232	95	590	196	146	86	63	56	1,036	495	15	**3,778**	49	3,827

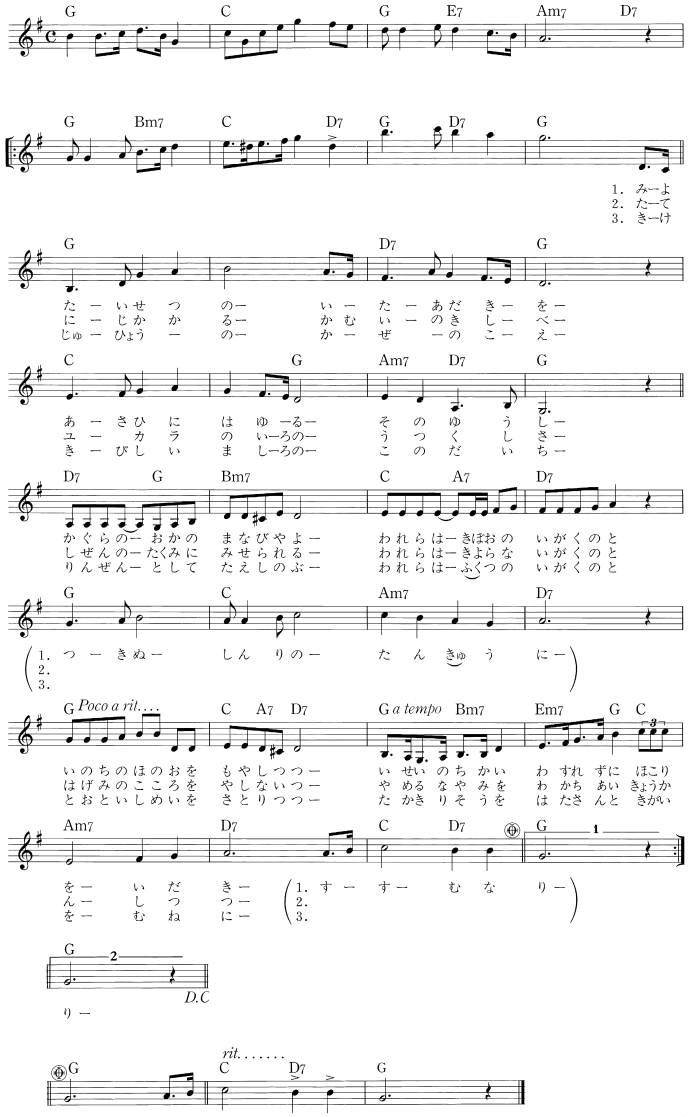

旭川843
東川1
東神楽4
比布2
当麻1
和寒1
下川1
士別7
美深1
名寄58
上富良野3
美瑛7
中富良野1
富良野24
上川1
岩見沢21
砂川14
美唄7
滝川16
赤平1
深川23
夕張1
芦別2
歌志内1
雨竜1
沼田1
月形1
新十津川1
長沼2
札幌677
江別18
恵庭34
千歳7
北広島7
石狩4
当別3
小樽16
倶知安3
岩内1
余市1
留萌10
稚内20
枝幸1
猿払1
北見58
網走12
紋別3
遠軽35
美幌2
置戸1
根室4
中標津6
釧路40
釧路町2
帯広56
池田1
幕別2
清水4
新得1
音更10
芽室6
室蘭22
登別4
苫小牧26
伊達6
洞爺湖2
豊浦1
留寿都1
白老1
壮瞥1
函館63
北斗1
森2
八雲2
松前1
上ノ国1
新ひだか4
日高1
青森20
秋田10
岩手23
山形5
宮城26
福島14
新潟28
石川16
富山4
群馬26
栃木58
滋賀4
福井6
長野27
茨城20
岐阜18
埼玉61
千葉78
山梨8
京都24
兵庫24
島根2
岡山10
広島9
山口2
愛知43
静岡47
三重5
奈良6
香川3
徳島2
愛媛5
高知6
和歌山5
福岡14
佐賀1
大分1
長崎7
熊本7
宮崎1
鹿児島5
沖縄21
東京196
神奈川97
大阪47

同窓会歌

同窓会歌

我等医学の徒

作詞　森田 昭之助
作曲　菊池　武志



同窓会歌

我等医学の徒

森田昭之助・作詞
菊池　武志・作曲

一

見よ大雪の山頂を
朝日に映ゆるその雄姿
神楽の丘の学び舎よ
我等は希望の医学の徒
つきぬ真理の探究に命の炎を燃やしつつ
医聖の誓忘れずに、誇りを抱き進むなり

二

立て虹かかる神居の岸辺
ユーカラの色の美しさ
自然の巧に魅せられる
我等は清廉な医学の徒
つきぬ真理の探究に精励の心を養いつ
病める悩みを分かちあい、共感しつつ進むなり

三

聴け樹氷の風の声
厳しい真白のこの大地
凛然として耐え忍ぶ
我等は不屈の医学の徒
つきぬ真理の探究に尊い使命を悟りつつ
高き理想を果さんと、気概を胸に進むなり
進むなり

旭川医科大学医学部医学科同窓会会則

制　　定　昭和53年４月１日
一部改正　昭和63年４月１日
〃　　平成11年２月12日
〃　　平成12年６月21日
〃　　平成25年８月７日
〃　　平成26年10月17日

第１章　　総　　則

（名　称）
第１条　本会は、旭川医科大学医学部医学科同窓会（通称：「旭川医科大学同窓会」）と称する。
（事務局）
第２条　本会は、事務局を旭川医科大学内に置き、幹事会の承認を得て支部を都道府県又は地区ごとに設けることができる。

第２章　　目的及び事業

（目　的）
第３条　本会は、会員相互の親睦を図るとともに、旭川医科大学の発展並びに医学の進歩に寄与することを目的とする。
（事　業）
第４条　本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
⑴　同窓会誌の発行
⑵　親睦会の開催
⑶　会員の福利厚生に関する事業
⑷　その他本会の目的を達成するために必要な事業

第３章　　会　　員

（会　員）
第５条　本会は、次に掲げる会員をもって構成する。
⑴　正 会 員　旭川医科大学（以下「本学」という。）医学部医学科を卒業した者、本学大学院医学系研究科博士課程を修了した者及び本学における研究歴を有し本学の博士の学位を取得した者
⑵　特別会員　本会の非正会員で、本学の現職の教授、准教授、講師、助教及び医員並びに元教授及び准教授(看護学科を除く。)
⑶　学生会員　本学医学部医学科に在籍する者及び本学の非正会員で本学大学院医学系研究科博士課程に在籍する者
⑷　名誉会員　本会に対する功労が顕著であって，幹事会において推薦された者

第４章　　役　　員

（役　員）

第６条　本会に次の役員を置く。

⑴　会　　長　　１名

⑵　副 会 長　　２名

⑶　常任幹事　若干名（１名を会計担当とする。）

⑷　幹　　事　若干名

⑸　会計監事　　２名

（選出方法）

第７条　役員の選出方法は次のとおりとする。

⑴　会長は、幹事のうちから互選により選出する。

⑵　副会長は、幹事のうちから会長が指名する。

⑶　幹事は、各期から２名充てることとし、原則として、互選によるものとする。

⑷　常任幹事は、幹事のうちから各期１名を充て、互選によるものとする。

⑸　会計監事は、幹事会において正会員のうちから選出する。

（任　期）

第８条　役員の任期は２年とし、再選を妨げない。

２　役員は、任期満了後であっても後任者の選出があるまで、その職務を行わなければならない。

（任　務）

第９条　役員の任務は次のとおりとする。

⑴　会長は、本会を代表し会務を総括する。

⑵　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、いずれかの１人がその職務を代行する。

⑶　幹事は、会務を掌理する。

⑷　常任幹事は、幹事会の委嘱を受け会務を分掌する。

⑸　会計監事は、会計を監査する。

第５章　　会　　議

（会　議）

第10条　本会の会議は、総会、幹事会及び常任幹事会とする。

（総　会）

第11条　総会は、幹事会が必要と認めたとき、会長がこれを招集し、その議長となる。

２　総会の議決は、出席正会員の過半数をもって決する。

（幹事会）

第12条　幹事会は、必要に応じて会長が招集する。

（幹事会の議決）

第13条　幹事会の議決は、構成員の過半数が出席する会議において、その過半数をもって決する。

（審議事項）

第14条　次に掲げる事項は、幹事会の決議又は承認を得なければならない。

⑴　収支決算

⑵　会則の制定及び改廃

⑶　その他本会の運営上の重要事項

２　前項各号のうち、会長が特に重要な事項と認めた案件は、総会において審議するものとする。

（常任幹事会）
第15条　常任幹事会は、本会の庶務、会計、会誌の編集等に関する事項を執行する。
（学生会員の会議出席）
第16条　学生会員は、会長の要請に応じ、幹事会及び常任幹事会に出席することができる。
　2　学生会員は、オブザーバーとし、議決権は有しないものとする。

第６章　会　　計

（会　計）
第17条　本会の経費は、入会金、会費、寄附金及びその他の収入をもってこれに充てる。
（会費等）
第18条　前条の入会金、会費は、次のように定める。
　⑴　入 会 金　　2,000円
　⑵　会　　費　年額 4,000円
　⑶　終身会費　入会後30年を経た会員を終身会費納入資格者とし、以後の会員として50,000円を前納することで終身会費納入者とする。
（会計年度）
第19条　本会の会計年度は、毎年４月１日に始まり翌年３月31日をもって終わる。

第７章　そ の 他

（その他）
第20条　この会則に定めるもののほか、支部並びにその他本会の運営に関し必要な事項は、幹事会の議決を経て会長が別に定める。

附　　則

１　この会則は、平成11年４月１日から施行する。
２　第17条第２号の規定にかかわらず既に納入されたものについては、従前の額とする。
３　第17条第３号の終身会費納入資格者で、会費を既に前納している者は、同号に規定する金額との差額を納入することで終身会費納入者となるものとする。
４　第７条第３号の規定にかかわらず、幹事の定員については当分の間、定員数にこだわらないものとし、その定員数は会長が定める。

附　　則

この会則は、平成12年６月21日から施行し、平成12年４月１日から適用する。

附　　則

この会則は、平成25年８月７日から施行する。

附　　則

この会則は、平成26年10月17日から施行する。

慶弔費支出基準

幹事会決定
平成20年５月19日

1　旭川医科大学医学部医学科同窓会（以下「本会」という。）の会員が破格の栄誉を受けた場合は、適宜、幹事会に諮り祝意（祝電、花束）を表す。
2　本会に対し多大な貢献を行った者に対して、適宜、幹事会に諮り感謝の意を表し、記念品を奉じる。
3　会員の逝去を知りえた場合は、その旨を速やかに本会事務局に連絡する。
4　会員、特別会員、名誉会員が逝去した場合、役員の会葬又は弔電及び供花などにより、哀悼の意を表し、後日同窓会誌にて会員に周知する。
5　会員などが逝去した場合の弔意は、次のとおりとする。
⑴　会　　員
　①　香 典 金　　30,000円
　②　供　　花　　15,000円相当
　③　弔　　電
⑵　特別会員、名誉会員
　①　供　　花　　10,000円相当
　②　弔　　電
⑶　宗教上の理由又は逝去後の日数を経過して連絡を受けた場合若しくはご遺族が辞退した場合などにより、上記の内容で弔意を表せない又は表すことが不適切の場合は、役員と協議して適宜対応する。
6　会員の疾病、災害を知りえた場合には、幹事会又は役員と協議して対処する。
7　その他緊急性又は特別な事情により、この基準により難い場合が生じた場合は、会長又は副会長の判断で処理し、後日幹事会に報告し承認を得るものとする。

附　則

この基準は、平成20年５月19日から実施する。ただし、この基準制定以前に処理したものについては、この基準により処理したものとする。

旭川医科大学医学部医学科同窓会
医 学 奨 励 賞 に 関 す る 規 約

平成11年８月21日
同 窓 会 総 会 決 定

（目　的）

第１条　旭川医科大学医学部医学科同窓会（以下「本会」という。）は、医学の発展と奨励のために優秀な業績に対して本会医学奨励賞を贈呈する。

（種類及び対象）

第２条　本会医学奨励賞は、学術奨励賞と特別奨励賞の２種類とし、年間それぞれ１件以内とする。

２　学術奨励賞及び特別奨励賞は、本会正会員の個人若しくは正会員の所属する団体を対象とする。

３　学術奨励賞は、研究者の独創的かつ発展性を有する研究を対象とする。

４　特別奨励賞は、医師としての視点に立ち行われた社会性公共性を有する行為若しくは事業を対象とする。

（応募資格）

第３条　本会医学奨励賞への応募資格者は本会正会員とし、過去の同窓会費を完納していることを条件とする。

（応募方法及び期間）

第４条　本会医学奨励賞への応募は、自薦他薦を問わない。

２　応募者は、別に定める様式により申請書、履歴書、主要論文目録、推薦書（他薦の場合のみ）各３部を本会事務局に提出する。

３　応募は、随時受付けるが、応募期限は各年度とも12月末日とする。

（選考委員会）

第５条　選考委員会は、旭川医科大学長（以下「学長」という。）より推薦された選考委員（以下「委員」という。）５名及び本会常任幹事１名の計６名により組織する。

２　本会会長は、各年度毎に学長に対し、委員５名の推薦を依頼する。

３　委員の推薦は、学長に一任することとし、応募者の所属長、出身講座の教授及び推薦者を選出しないことを条件とする。

４　本会会長は、学長から推薦された委員５名を本会医学奨励賞選考委員として委嘱する。

５　選考委員長は、委員の互選により選出する。

６　選考委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

（選考審査方法）

第６条　選考委員会は、応募条件を審査し、各賞受賞にふさわしい案件を選考する。

２　選考委員長は、選考案件を本会幹事会に報告し、本会幹事会で承認が得られたものをその年度の本会医学奨励賞とする。

３　授賞の決定期限は、各年度の年度末日とする。

４　選考委員長は、選考過程と選考理由の概略を各年度の本会会誌に掲載する。

（授　賞）

第７条　受賞者には、本会会長より授賞式において表彰状及び副賞を贈呈する。

２　副賞は、学術奨励賞20万円、特別奨励賞20万円とする。

３　受賞者は、本会会誌に受賞業績に関する概要を掲載し、併せて授賞記念講演を行うこととする。なお、学術奨励賞については、その成果の公表を行うことを条件とする。

（規約の改正）

第８条　本規約に関する改正は、本会幹事会において行う。

附　則

この規約は、平成11年８月21日から施行する。

附　則

この規約は、平成13年９月10日から施行する。

附　則

この規約は、平成17年４月20日から施行する。

附　則

この規約は、平成23年６月29日から施行し、平成24年度（第12回）受賞者から適用する。

旭川医科大学医学部医学科同窓会
医学奨励賞募集要領

旭川医科大学医学部医学科同窓会は、創立20周年（平成11年）を記念し、同年から医学奨励賞（以下「本賞」という。）を設立致しました。本賞は、学術奨励賞と特別奨励賞の２賞からなり、それぞれの受賞候補者を募集致します。

募集は学内、学外並びに自薦、他薦を問いません。詳細は、同賞に関する規約を御参照下さい。

１．応募資格者

応募資格者は、次の各号に掲げる者とする。

⑴　応募者は、旭川医科大学医学部医学科同窓会（以下「本会」という。）の正会員であること。

⑵　応募者は、過去の本会会費を完納している者であること。

⑶　医学研究又は医療活動において、学術的あるいは社会的に顕著な業績を上げ、または著名な貢献をした個人あるいは団体であること。

２．対象及び受賞者

対象は、次の各号に掲げる業績あるいは活動に該当するものとする。

⑴　学術奨励賞は、研究者の独創的かつ発展性を有する研究を対象とする。将来的な研究計画あるいは応募者が過去に発行した筆頭著者である論文を対象とする。

⑵　特別奨励賞は、医師としての視点に立ち行われた社会性公共性を有する行為若しくは事業を対象とする。

⑶　授賞者は、各賞１名あるいは１団体とする。

3．応募方法及び期間

⑴　応募は、「旭川医科大学医学部医学科同窓会医学奨励賞申請書」により応募すること。
　同賞申請書は、旭川医科大学同窓会ホームページ（http://www.asahikawaidai.jp/）からダウンロードすること。

⑵　論文での応募の場合は、同賞申請書と一緒に論文別冊３部（２部はコピーでも可）を添付すること。

⑶　応募期限は、各年度の12月末日とする。

4．受賞者の決定

⑴　「旭川医科大学医学部医学科同窓会医学奨励賞選考委員会」において、受賞候補者を選考し、本会幹事会にて決定する。

⑵　授賞の決定は、各年度の年度末日とする。

⑶　応募者には、採否の通知をする。

⑷　選考課程及び選考理由の概略は、各年度の本会会誌に掲載される。

5．授　　賞

⑴　本賞受賞者には、授賞式において、表彰状及び副賞（学術奨励賞20万円、特別奨励賞20万円）を贈呈する。

⑵　受賞者は、授賞式後に授賞記念講演を行うと共に、その年度の本会会誌に受賞業績に関する概要を掲載することとする。
　なお、学術奨励賞については、その成果の公表を行うこととする。

6．応募書類等請求及び問い合わせ先

〒078-8510
旭川市緑が丘東２条１丁目１番１号
旭川医科大学医学部医学科同窓会事務局
TEL 0166－68－2234　FAX 0166－68－2234

役員名簿

同窓会役員名簿

同窓会長　第1期　千葉　茂

同窓会副会長　第2期　坂本尚志
第4期　原渕保明

常任幹事

第1期	千葉	茂
第2期	坂本	尚志
第3期	三代川	斉之
第4期	原渕	保明
第5期	宮本	和俊
第6期	幸村	近
第7期	野坂	哲也
第8期	神谷	和則
第9期	平	義樹
第10期	髙橋	正年
第11期	小笠	壽之
第12期	木ノ内	玲子
第13期	辻	史郎
第14期	山上	英樹
第15期	籠川	浩幸
第16期	田村	義之
第17期	石本	隆広
第18期	高杉	和雄
第19期	佐藤	克彦
第20期	山口	祐司
第21期	横田	陽匡
第22期	数野	圭
第23期	類家	拓也
第24期	高橋	弘典
第25期	齋藤	司
第26期	渡邊	成樹
第27期	宮本	正之
第28期	鈴木	裕子
第29期	石戸谷	俊太
第30期	熊井	琢美
第31期	佐藤	恵輔
第32期	海野	茂樹
第33期	宮田	雅大
第34期	櫻井	由香里
第35期	安田	麻美
第36期	早坂	太希
第37期	小松田	浩樹

幹事

第1期	吉田	晃敏
第2期	田川	博
第3期	川村	祐一郎
第4期	河野	透
第5期	山本	明美
第6期	奥村	利勝
第7期	太田	勲男
第8期	黒田	健司
第9期	蒔田	芳男
第10期	今井	政人
第11期	村上	正道
第12期	瀧澤	克己
第13期	古谷野	伸
第14期	上口	権二郎
第15期	井上	裕靖
第16期	小幡	雅彦
第17期	北野	陽平
第18期	小原	和宏
第19期	長谷川	聡
第20期	栗山	周子
第21期	西川	典子
第22期	高橋	淳士
第23期	野原	史勝
第24期	大坪	誠
第25期	山口	一豪
第26期	森川	文淑
第27期	吉澤	明希子
第28期	石羽澤	明弘
第29期	安藤	勝祥
第30期	大原	賢三
第31期	浅野目	明日香
第32期	長谷部	智美
第33期	岡澤	友希
第34期	佐藤	裕基
第35期	髙取	恭平
第36期	針生	珠海
第37期	今野	杏美

会計監事

第3期	野中	聡
第6期	西川	祐司

編　集　後　記

旭川医科大学
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授
同窓会副会長・同窓会誌編集委員長
原　渕　保　明
（第４期生）

同窓会誌33号をお届け致します。本号は教室だより・クラブだより号として各教室、クラブの近況を掲載いたしました。ご多忙の中、ご寄稿いただいた方に厚く御礼申し上げます。

今年は永年にわたり本学の発展に尽力いただいた高後 裕教授（内科学講座 消化器・血液腫瘍制御内科学分野）と岩﨑 寛教授（麻酔・蘇生学講座）が退職されました。数多くの同窓生が教えを承り、お世話になったことに心から感謝申し上げると同時に、今後の先生のご発展を祈念申し上げます。また、新任教授として武井英博教授（病院病理部）と国澤卓之教授（麻酔・蘇生学講座）が誕生しました。特に国澤教授は本学第19期生であり現在最も若い教授です。同窓会としても誇りでもあり、若い同窓生の励みにもなります。おふたりとも本学の発展に大きく寄与していただくことを願っています。

近況報告としては、同窓生で他大学の教授としてご活躍している鈴木伸治先生（第３期生：常葉大学浜松キャンパス保健医療学部）にご寄稿いただきました。卒後臨床研修センター長の大崎能伸教授（第２期生）に本学の初期研修制度を紹介していただきました。今年は49名が初期臨床研修医に採用となり、充足率も全国国立大学で10位になりました。その殆どが同窓生であり、今後の活躍を期待しています。海外留学体験記として長森恒久先生（第23期生）、南 幸範先生（第29期生）、熊井琢美先生（第30期生）にご寄稿いただきました。海外での体験は研究のみならず、人生にとっても貴重なものです。今後も、数多くの同窓生が海外で活躍していくと期待しています。

学生では、潮田亮平君（医学科５年）が「旭川ウエルビーイング・コンソーシアム学生自主組織はしっくすの活動」、橋本 亮君（医学科４年）が「日本東洋医学学会での会頭賞（学生発表部門）の受賞」、阿部史華さん（医学科３年）が「北海道地区大学体育大会での弓道部女子団体優勝」、にて学生表彰され、その体験記をご寄稿いただきました。本学学生の活躍は同窓生にとっても頼もしいものです。また、飯田敏史君（医学科４年）に医大祭について寄稿していただきました。

さて、吉田晃敏学長（第１期生）は今年７月で第３期目を就任しました。３期目に当たり、「旭川医科大学の更なる機能化」を新たなビジョンとして掲げ、強いリーダーシップのもと、本学も確実に発展し続けています。現在会員数3778名となった同窓生の皆さまにも本学の発展に全員が一丸となってご支援、ご協力いただきますよう心からお願い申し上げます。

発　行　者　　旭川医科大学医学部医学科
同　窓　会　事　務　局

発行責任者　　千　　葉　　茂

〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
旭　川　医　科　大　学　内
旭川医科大学医学部医学科同窓会
ＴＥＬ　0166－68－２２３４
ＦＡＸ　0166－68－２２３４

印　刷　所　　谷　川　印　刷　株　式　会　社
旭川市旭町１条４丁目
ＴＥＬ　0166－51－０６５３

発行：旭川医科大学医学部 医学科同窓会 事務局